



令和7年度文部科学省  
新時代に対応した高等学校改革推進事業  
(普通科改革支援事業)  
実施報告書



GO BEYOND  
超えてゆけ！

滋賀県立伊香高等学校

## 巻頭言

滋賀県立伊香高等学校 校長 白井 正士

本校は、令和4年度から、魅力ある高校づくりの実践モデル校として、令和5年度からは文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」に採択され、「伊香高 Go Beyond プロジェクト 超えてゆけ」を合言葉にして、伊香高校と地域がともに未来を創ることを活動目標に設定し、特色ある高校づくりを進めて参りました。

文部科学省の指定最終年（3年目）となる本年度は、4月に集大成として、普通科1クラスを新たな学びの創出となる新学科「森の探究科」に改編しました。また、普通科では、学習者の興味や進路希望に合わせ、カリキュラムを選択する類型学習を来年度より一新します。これらの学びは、探究的な学びを重視し、単に知識を蓄えるのではなく、生徒が実社会の課題や自身の興味に基づいた「問い」を解決するために、思考を深め行動する学びへと転換していきます。

「森の探究科」は、普通教育を主とする学科として開設し、学校設定科目として「森のキホン」、「森の恵み」、「持続可能な社会」、「森の未来創造」を設け、滋賀県北部地域の「森・川・里・湖」が水系で繋がる豊かな自然環境、森林資源などを活用した学びを創出し「森で学ぶ」をコンセプトに、生徒の「生きる力」を地域とともに育みます。また、持続可能な社会と琵琶湖に根ざした暮らしや、人と自然が共存する循環型社会の構築に資する人材を育成します。

「普通科」では、2年次より展開する類型を「地域デザイン類型」、「スポーツ健康類型」に一新します。一人ひとりに応じた学習を習熟度・少人数で展開し、地域の特色を活かした学びを通して、自分の興味関心を発見し、主体的に取り組む力を醸成します。

これらの取り組みは、これまで先行授業として、普通科自然環境類型2、3年生の学校設定科目「環境Ⅰ」「環境Ⅱ」や旧類型の授業において実施し、試行錯誤しながら学習内容の充実を行ってきました。その蓄積により本年度開設した森の探究科では、スムーズに授業を進めることができいております。これらの授業は地域の専門家の方だけでなく、滋賀県琵琶湖環境部や地元長浜市の北部政策局、環境保全課をはじめ滋賀県内外の大学や森林・環境系の関係団体の方々に多大なご協力をいただきました。授業実施にご協力いただいた方々はもちろんのこと、新たな取組と一緒にチャレンジしてくれた生徒の皆さんに感謝申し上げます。

本校は、4年に渡るこれらの取り組みにより新たなスタートを切ることができましたが、今後も新学科の完成年度に向け、特色ある学びをより進化させるべく学習内容の充実を図り、1人でも多くの生徒が本校の学びに興味関心を持ち入学を目指してくれることを願っております。

最後になりましたが、本事業推進にあたりご支援とご指導をいただいております関係各位をはじめ多くの皆様方に心より感謝を申し上げ、巻頭の言葉といたします。

令和7年度 文部科学省  
「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」実施報告書

目次

○巻頭言	1
○目次	2
第1章 本校の概要	
1-1 所在地	3
1-2 設置学科および在籍生徒数	3
1-3 スクール・ミッション	3
1-4 スクール・ポリシー	3
第2章 令和7年度研究開発の概要	
2-1 事業の実施計画の概要	4
2-2 事業の実施日程	21
2-3 事業の実施概要	22
(1) カリキュラムの検討内容	22
(2) 管理機関による事業の実施体制や管理方法	35
(3) 高等学校における事業の実施体制や管理方法	36
(4) 運営指導委員会の体制および取組	39
(5) コンソーシアムの体制および取組	40
(6) コーディネーターの配置および活動内容	41
(7) 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況	44
(8) 管理機関における事業全体の成果検証、評価	52
(9) 管理機関による支援体制	53
(10) 成果普及のための取組	53
(11) 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組	54
(12) 他の事業との関係	54
第3章 研究開発の内容	
3-1 運営指導委員会	56
3-2 教育活動改善に向けた先進校視察	63
3-3 新学科設置にともなった先行実施授業	68
3-4 新学科の次年度（2年次）に向けた先行実施授業	111
3-5 地域をフィールドにした探究的な学び	137
3-6 伊香高校魅力化シンポジウム	147
第4章 参考資料	
4-1 広報チラシ	149

## 第1章 本校の概要

### 1-1 所在地

〒529-0425 滋賀県長浜市木之本町木之本 251

### 1-2 設置学科および在籍生徒数（令和7年5月1日現在）

	1年	2年	3年	計
普通科	75	72	80	227
森の探究科	17	—	—	17
計	92	72	80	244

### 1-3 スクール・ミッション

- ① 未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校
- ② 地域の熱意と協力により開校した伝統のもと、地域との連携・協働した学びにより、将来の地域を担う人材を育成する学校
- ③ 基礎学力の充実や発展的な学習等により、生徒の進路希望を実現するための確かな学力を育成する学校

### 1-4 スクール・ポリシー

滋賀 \ GO BEYOND 越えてゆけ /  
県立 伊香高等学校  
スクール・ポリシー

未来社会と環境を地域で学び

×  
将来の自分と向き合う

令和7年度より新設する森の探究科を含めた特色あるコース構成では、生徒それぞれが将来の自分を描き、そこに向かって自ら学ぶ力を育みます。また、教職員は学校生活の様々な場面で生徒と真摯に向き合うことで希望進路へ導いていくサポートを行っています。



**本校の  
スクールミッション**

未来を拓く心豊かでたくましい人づくりのため、生徒の自立する力・伝える力・協働する力・創造する力等の生きる力を育成する学校

地域の熱意と協力により開校した伝統のもと、地域との連携・協働した学びにより、将来の地域を担う人材を育成する学校

基礎学力の充実や発展的な学習等により、生徒の進路希望を実現するための確かな学力を育成する学校

**GO BEYOND**

**01**  
Admission Policy

**アドミッションポリシー** ~このような生徒を育てています~

- ◆ 目標に向かって、真面目に**コツコツ**と**一生懸命**取り組もうとする人
- ◆ **思いやり**の心を持ち、他者と協働して、失敗を恐れずに**前向きに挑戦**できる人
- ◆ **地域をフィールド**にして**行う学習や活動**に興味関心があり、探究しようとする人
- ◆ 滋賀北部の豊かな自然環境や地域文化から学びながら、地域貢献しようとする人

**02**  
Curriculum Policy

**カリキュラムポリシー** ~このような教育活動を行います~

- ◆ 自身の興味関心や希望進路にあった類型を選び、進路実現を目指します。
- ◆ 小規模を強みとして、**個に応じた学習を習熟度・少人数**で展開します。
- ◆ **滋賀北部ならではの地域資源**を活用し、地域と協働した学びを実施します。
- ◆ 外部講師を招き、**地域をフィールドとした多彩な授業**を設定しています。
- ◆ 自身で設定した課題を探究し、**地域での実践**を通して、学びを深めます。

**03**  
Graduation Policy

**グラデュエーションポリシー** ~このような生徒を育てます~

- ◆ 教育基本法の精神に則り、**将来の地域社会に貢献しうる、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人材**を育成します。
- ◆ 地域の未来を創造し、持続可能な地域社会を支える**環境未来人材**を育成します。

夢を掴み、進路目標を実現する <b>自己実現力</b>	自己の思いを伝えるながら、他者や多様な存在と協働する <b>コミュニケーション力</b>	人や地域と協働し、新たな創造につながる <b>課題解決力</b>	未知の困難に柔軟に対処し、変化する未来に <b>レジリエンス力</b>
--------------------------------	---	-------------------------------------	--

THE SCHOOL POLICY OF IKA HIGH SCHOOL

## 第2章 令和7年度研究開発の概要

### 2-1 事業の実施計画の概要（事業申請時のもの）

#### ■実施計画書（所属等は令和7年5月現在）

##### 2-1-1 事業の概要

###### (1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	滋賀県立伊香高等学校 (いか)	地域社会学科	令和7年度	○

###### (2) 学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	40人	学年制	森の探究科

###### (3) 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

令和4年度滋賀県教育研究事業「県立高等学校魅力化推進事業」では、地域連携のためのコーディネーターを伊香高等学校に配置し、炭づくり、薪割り体験や地域住民とのふれあい対談など、地域を教育資源とした地域連携活動に取り組み、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICTによる学校間連携授業に取り組んだ。また「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」の指定も受け、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を目指す主権者教育の充実の研究を行った。さらに「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」の指定により、自己を振り返り変容を確認する取組をすすめることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、またインターンシップをはじめとして、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性等を育む取組を進めることで、自分の将来を展望し、たくましく生き抜く態度や能力を身につけさせる教育の研究に取り組んだ。

これらの取組や学校を取り巻く環境を受け、かつて学校林を保有した歴史と豊かな地域資源を活かし、地域の専門家や地元長浜市と協働して、「森・川・里・湖」が水系でつながる滋賀ならではの学びに取り組むべく、令和7年度には「森の探究科」を設置する。「森の探究科」の学びのベースは滋賀県の提唱するMLGs(マザーレイクゴールズ・琵琶湖を切り口とした滋賀県版SDGs)をおき、持続可能な社会と琵琶湖に根ざした暮らしの創造、人と自然が共存する循環型社会の構築を考える人材育成を図る<ゼロ・カーボン・ハイスクール>を目指す。また地域の森林資源を活かした仕事やまちづくりにつなげ、地域活性化と地域創生を目指す。教育内容は、次の2本柱とし、主な内容は次のとおりである。

###### ①地元長浜市との協働による環境未来人材の育成：「カーボンニュートラル」

学校が立地する長浜市では2022年3月「ゼロカーボンシティ宣言」がなされ、それに先だって「湖北環境経済協議会」も設立され、行政、民間ともに、2050年までに市全体の温室効果ガス排出量の実質ゼロを目指す脱炭素社会実現への機運が高まりつつある。この脱炭素社会を構築していくうえで、今後、環境・エネルギー分野をはじめ専門性を有する人材へのニーズが高まることが予想される。さらに脱炭素社会を地域主導で進め、エネルギーの地産地消を達成していくためには、その知識やスキル、ノウハウを持つ人材を地域の中で育成していくことが必要である。地域の未来を見据えて子どもへの環境・エネルギー教育を進め、地域で育ち、地域で活躍する人材づくりを推進する長浜市と協働し、地域振興に資する長浜の脱炭素社会を実行する環境未来人材の育成に取り組む。

## ②新たな森林空間の総合利用に関する学び：「森林サービス」

地元の森林資源の整備と活用を実践的に学ぶ中で、特に森林空間を利用するサービスについて、フィールドワークや地域の専門家との対話を通して探究的に学ぶ。既存のサービスの充実だけでなく新たなサービスの創出を図り、そこで展開される活動をビジネスとして展開できるか、地域主導で持続可能なものであるか等を高校生の瑞々しい感性で探究し提案していく。このことは、人口減少や流出が激しい地域の活性化と地域創生につながる取組となる。これは林野庁が提唱する「新たな森と人とのかかわり」＝「Forest Style」の創造につながる学びであり、人生100年時代のあらゆるステージにおいて、森林とのふれあいや森の恵みをいただきながら、健康的、文化的で心豊かな暮らしを目指す資質を涵養することにもつながる。その結果、地球環境の保全や地域社会の活性化、持続性の向上にも貢献することができると考えている。

## 2-1-2 事業の目的等

### (1) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科等を設置する必要性

滋賀県全体の中学校卒業予定者数は、令和4年度13,781人に対し、令和16年度は12,152人となり、令和4年度から比較して1,629人(11.8%)減少する見込みである。このような人口減少や急速な社会情勢の変化に対応し、時代の要請に応じた滋賀の高等学校教育の適正化および質の向上を図るため、外部有識者からなる滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し議論を積み重ねてきた。ここでの答申は、令和3年度末の県民県政コメントの反映を経て、令和4年度からの概ね10から15年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのための「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」(以下「基本方針」とする。)として令和4年3月にまとめた。

「基本方針」では、県立全日制高等学校44校中の29校を占める普通科について、地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに関する学科等の設置を、高校の魅力化・教育改革の取組の方向性の一つとして示し、行政機関や地域住民、産業界、大学等との連携・協働を推進するためのコーディネーターの配置やコンソーシアムの構築、学校運営協議会の設置等を検討することが重要であるとした。

令和4年8月には各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義し、伊香高等学校については、①地域の熱意と協力により開校した伝統のもと、地域との連携・協働した学びにより、将来の地域を担う人材を育成する学校②基礎学力の充実や発展的な学習等により、生徒の進路希望を実現するための確かな学力を育成する学校とした。さらに教職員による主体的な具体化策の検討や、中学校や地域との意見交換(地域別協議会)、先進事例の研究等を経て、令和5年3月には、県教育委員会として、先に示した「基本方針」に基づき、学びの多様な選択肢や特徴的な学科等の配置を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」(以下「魅力化プラン」とする。)を提示した。伊香高等学校は、地域の専門家と協働し、森・川・里・湖がつながる県北部ならではの学びの実施と、地域をフィールドに「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」を掛け合わせた多様な地域探究の学びに取り組む地域連携重点校として、新学科設置に向けた取組を推進する。

伊香高等学校が立地する長浜市の中学校卒業予定者数は、令和4年度1,173人に対し、令和16年度は910人となる見込みで、令和4年度から比較して263人(22.4%)減少となり、県全体の11.8%を大きく上回る人口減少地域で、特に学校がある木之本地域は過疎地域にも指定されている。そのような中、令和4年3月に長浜市はゼロカーボンシティ宣言を行った。脱炭素社会の実現に向け、市民一人ひとり、事業者、行政などのすべての主体が気候変動に関する危機感を自らの課題ととらえ、地域資源に由来する再生可能エネルギーの更なる活用、市民活動における省エ

ネ行動、森林整備による二酸化炭素の吸収や市産材の活用を積極的に進めることを力強く宣言している。また本県では「琵琶湖」を切り口とした2030年の持続可能社会へ向けた目標（マザーレークゴールズ）（MLGs）を定めている。これは琵琶湖版のSDGsとして、2030年の環境と経済・社会活動をつなぐ健全な循環の構築に向け、独自に13のゴールを設定している。その1つ「恵み豊かな水源の森を守ろう」では、水源涵養や生態系保全、木材生産、レクリエーションなどの多面的機能が持続的に発揮される森林づくりが進み、人々が地元の森林の恵みを持続的に享受することとしている。さらに令和5年度から「北の近江振興プロジェクト」として、県内で先行する課題への対応、地域事情を踏まえた振興、北部における様々な機会を生かした振興を進めるとともに、地域特性や魅力を生かした地域振興に取り組んでいる。

高校教育改革、長浜市の現状、滋賀県の施策から、地域の発展・成長に寄与する人材の育成を図る必要から、伊香高等学校に「森の探究科」を設置するものである。

## （2）学際領域学科又は地域社会学科等における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科等における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

伊香高等学校は、地域住民の熱意と協力（「三萬一心」）により開校した128年の歴史を持つ滋賀県最北の県立高校である。これまで、その歴史背景と豊富な地域資源をもとに、地元に着目した教育活動を展開し、知・徳・体の調和の取れた人間性が豊かで将来の地域社会を担う人材の育成を行ってきた。近年、人口減少と少子高齢化が進む中で、学校が位置する長浜市では地域に思いをもった人材育成が中長期目線で必要となっている。そこで学校は、かつて学校林を保有した歴史と豊かな地域資源を活かし、地域の専門家や地元長浜市と協働して「森・川・里・湖」が水系でつながる滋賀ならではの学びに取り組むべく、令和7年度に「森の探究科」を設置する。また、ゼロカーボンシティを目指す長浜市からは、地域実践をベースとした脱炭素に関連する教育内容について、専門的アドバイスの実施やコーディネートなどによる支援が提示され、また地域での持続可能な取組を支える人材育成を期待されている。本学科では「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」のバランスがとれた確かな学力を土台に、県北部地域の豊かな自然環境、森林資源等を活用し、「森で学ぶ」をコンセプトにして生徒の「生きる力」を地域とともに育みたい。そのために、地域を学びのフィールドとした探究活動に取り組み、主に次の4つの資質能力を培うことを目指している。

1. 人や地域と協働し新たな創造に向かう「課題解決力」
2. 自己の思いを伝えながら他者の多様性を理解する「コミュニケーション能力」
3. 夢を描き進路目標を実現する「自己実現力」
4. 未知の困難に柔軟に対応しあきらめない「レジリエンス力」

「課題解決力」については、単純に与えられた課題について解決するのではなく、探究的な姿勢を持ち自らあるべき姿を設定し、そこへ至るまでの道程を組み立て、目標達成に向かう力を育成する。また、複雑化する社会課題を解決するためには多様な主体と連携しながら物事を進める必要がある。そのような協働する力も実際の活動を通して身に付けることを目標とする。

次に、「コミュニケーション能力」について、多様な主体と協働するためには、自身の考えを相手の状況を踏まえ伝えること、またそれだけでなく相手の思いや考えをしっかりと汲み取るという、双方向型のコミュニケーション能力が必要となる。授業というある程度枠組みを与えられた状況での学びと、地域の人々との協働という不確実な状況での実践を通して、実用性のあるコミュニケーション能力を育成する。

次に、「自己実現力」について、伊香高等学校では進学と就職する生徒が半数程度であり、新学科についても同様になると考える。どのような進路をとるにせよ、自らの興味関心に基づいた自己決定とそれを実現する力が必要であると考え。多様な人と対話や実体験に基づいた興味関心の発見と、本課程を通して身に付ける課題解決力、コミュニケーション力を総体的に活かす自

己実現力を育成する。

最後に、「レジリエンス力」について、これからの予測困難な時代を生きていく上で、逆境を跳ね返し回復するしなやかな力が必要である。3年間の一貫した探究学習を通して、自らの答を見い出しながら未来を切り拓く力を身に付け、困難や失敗があってもチャレンジし続ける力を育成する。

単に森林や環境に関する知識を得るだけでなく、「森で学ぶ」ことによって主に上記4つの能力を育むことが新学科の主眼となる。そのため、森林科学や木育、森林レクリエーション、ネイチャークラフトなど様々な分野における革新的な活動を行っている講師や、大学の教育系分野におけるアドバイザーを招き、カリキュラム開発に努める。

## 2-1-3 実施体制

### (1) 管理機関における実施体制や事業の管理方法

本県教育委員会事務局における実施体制については、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長1名、参事（校長級）1名、主担当として教育企画主事（教諭級）1名、主任主事1名をその任に充てる。

担当者と校長間で取組状況を共有するとともに、月1回以上は伊香高等学校に出向き、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を行う。またコーディネーターの活動状況を、毎月活動報告書として提出してもらい、業務実態を把握・管理する。あわせて高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダー、コーディネーターなどと協議を行いながら進め、事業管理を行う。

また県の「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を定期的を開催することを予定しており、この連絡会議において、各高校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認することとしている。この連絡会議の場で、伊香高等学校からの諸提案を行い、関係各組織に積極的な協働・協力を要請し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、地域連携にかかる課題の共有と成果の普及を行っていく。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は隔年開催（令和5年度は令和6年1月23日に開催）とし、本県の地域連携重点校について、伊香高等学校からの提案等により、諸課題等の情報共有を行うとともに、他の高等学校の進捗状況を確認しながら、伊香高等学校の改善点等を把握することとしている。働き方改革の観点から、オンラインによる開催も積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。

「地域連携重点魅力化連絡会議」は滋賀県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室長を事務局長に据え、参事（校長級）および業務を専属で担当する教育企画主事（教諭級）、指導主事を配置する。

この「地域連携重点魅力化連絡会議」に加え、伊香高等学校では、年3回、運営指導委員会を開催することで、事業の進捗状況や成果をその都度確認し、適宜事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てる。運営指導委員会は外部有識者で構成するものとし、事業の目的に鑑み、以下の構成で委員委嘱を行っている。

- ・委員 学識経験者（滋賀県立大学環境科学部）市民参加型持続可能な地域活動の研究
- ・委員 学識経験者（滋賀大学教育学部）環境教育・技術教育の研究者
- ・委員 民間企業（里山実験室 HareMori）元滋賀県林業専門職、森林総合監理士
- ・委員 民間企業（森の案内人）森ツアーガイド、森のサロン実施
- ・委員 民間企業（高橋金属株式会社）湖北市民会議構成員、ゼロカーボン実践企業

- ・委員 民間企業（株式会社バイオマスアグリゲーション）木質バイオマスエネルギー
- ・委員 行政機関（長浜市未来創造部）ゼロカーボンシティ宣言、地域づくり・振興関係

運営指導委員会は、県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理し、魅力ある高校づくり推進室参事（校長級）が事務局長となり、業務を専属で担当する教育企画主事（教諭級）、主任主事をその任に充てる。

中学校等卒業予定者進路希望調査の結果にも注視し、長浜市内 10 中学校やそれ以外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化を分析しながら、本事業の地域への広報や魅力づくりについて、長浜市教育委員会等の協力も得ながら、検証していく。

## （２）管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、管理機関では、令和４年度から県予算において独自に普通科の高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この取組では、地域の企業や大学、自治体等との調整を行うなど学校と地域をつなぐコーディネートの必要性や、ICT を活用した、小規模の学校間での遠隔授業の日常的な導入に向けた研究に取り組んだ。伊香高等学校を研究校に指定した研究で、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネート人材の必要性がより確かになってきたところである。

コーディネート人材に期待する、評価する考え方は３点ある。１点目として、高校から地域に働きかけるコーディネート機能として、生徒を指導するというより、授業において地域との関わり、機会を作ったり、地域行事の情報提供や人の紹介をするなど、地域に興味を持つきっかけづくりを求めたい。２点目は、県立学校が位置する地域におけるコーディネート機能（地域住民との関係を築きながら地域と高校をつなぐ）を求める。高校と地域住民の接点づくり、高校生と地域の協働活動を仕掛けたり、住民主体の活動に伴走したりすることで、地域の変化の流れを促進することも期待する。３点目としては、地域連携の流れを持続可能なものにするため、属人的な活動で終わらせるのではなく、協働体制（コンソーシアム）を構築・充実させていき、事業指定終了後も持続可能な協働体制構築のコーディネート機能を期待し、評価を行う。

令和４年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高校 29 校のうち、地域連携重点により魅力化を図ることを推進する 13 校で「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和５年度から開催している。その中で、伊香高等学校による、地域社会に関する学科の設置に向けた具体的な提案を期待するほか、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果・検証をしていきたい。併せて、伊香高等学校では、年３回運営指導委員会を開催し、事業の進捗状況や成果を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てることとしている。

さらに、管理機関は、伊香高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（Facebook や LINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業のその後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を４年後・７年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究し評価も行う。集計・分析した調査結果は、国の事業終了後も、伊香高等学校や県教育委員会において、本事業の成果の検証および「魅力化プラン」の地域連携重点の事業成果のための基礎資料として役立てることとしている。

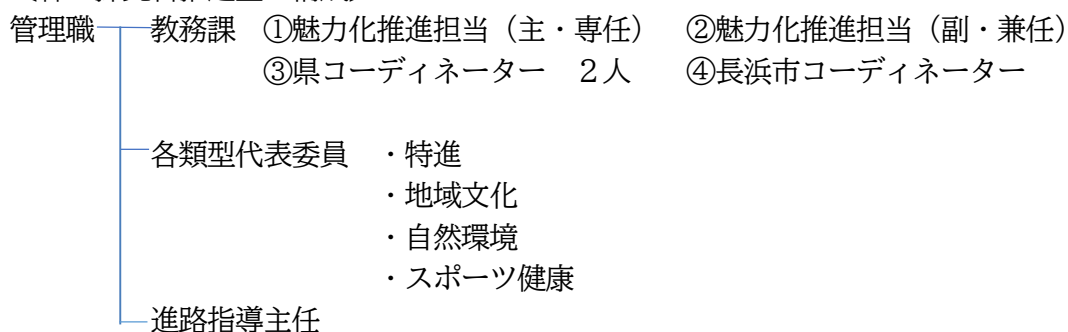
スクール・ミッション、スクール・ポリシーの観点からも事業全体の成果検証を行い評価していく。特に高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としての観点で評価する。さらに県教育委員会を実施する

中学校等卒業予定者進路志望調査の結果も注視し、長浜市内 12 中学校・義務教育学校やそれ以外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化を分析しながら、本事業の地域への広報や魅力、成果について、長浜市教育委員会とも協力し検証していく。

### (3) 学際領域学科又は地域社会学科等を設置する高等学校における事業の管理方法

校内では、令和4年度より教務課内に魅力化推進担当を置き、伊香高等学校の4類型（特進、地域文化、自然環境、スポーツ健康）から選出した委員と魅力化学校間連携担当者、県配置のコーディネーターで構成する「魅力化推進室」を設置、魅力化の方向性を模索し、新学科設置について検討してきた。令和5年度から「森の探究科推進室」と改称し、新たに長浜市が採用する地域おこし協力隊のコーディネーターを加えて、新学科設置に向けての取組を推進している。合わせて、令和4年度より検討してきた、伊香高等学校における3年間を通した「総合的な探究の時間」についての授業内容も本推進室で一体的に管理していくことで、新学科での学びと普通科全体の探究的な授業が相乗効果を発揮できるように留意する。また「総合的な探究の時間」、学校設定教科、公民や理科などのカリキュラムマネジメントに努め、「森の探究科」の学びの推進に努める。

#### 〔森の探究科推進室 構成〕



推進室では、全体での検討会議を月1回程度開催するとともに、核となるメンバーについては、1) コンソーシアム運営、2) 新学科カリキュラム、3) 広報のそれぞれの分野を担当し、週1回以上の頻度でチーム会議を行い進捗確認や各種相談を行う。また、伊香高等学校ですでに活用している Microsoft Teams を活用することで、日頃のやり取りを可視化し、お互いの状況把握が常時可能な状況をつくる。

また、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者と校長で月1回以上は取組状況を共有するとともに、取組を推進していくうえでの諸課題の解決に向けた協議を行うほか、高校教育課魅力ある高校づくり推進室の担当者が、生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長や森の探究科推進室メンバーなどと協議を行う。

県教育委員会事務局高校教育課魅力ある高校づくり推進室が管理する運営指導委員会は年3回開催され、伊香高等学校としては、そこに向け、事業の進捗状況や成果をその都度確認し、適宜事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てる。また管理機関が行う「地域連携重点魅力化連絡会議」において、伊香高等学校からの提案等を行い、地域連携に対する諸課題等の情報共有を行うとともに、伊香高等学校の改善点等に関する助言も得たいと考えている。

### (4) 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

地域社会学科に関わる研究開発の実績としては、令和3年度からマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を彦根工業高校において実施している。彦根工業高等学

校は、「ものづくりはひとづくり」をモットーとした創立100年以上の歴史ある学校である。高校がある彦根市には高等教育機関として、滋賀県立大学工学部・環境科学部や滋賀大学データサイエンス学部等がある。伝統技術等のビッグデータ分析などICT・デジタル教育で連携を図りながら、社会的課題を新たなチャンスととらえ、高付加価値を持つ産業へと創出できる“人財”を多様な主体の共創により育成するシステムを構想し、研究推進に取り組んでいる。

絶えず革新し続ける最先端技術と滋賀の風土が培ってきた伝統産業等の技と心を生かし、地域産業界と彦根工業高校が一体・同期化し、郷土愛にあふれた人財育成によって地域を活性化させ、地域産業の未来像の実現を資するものである。

また、令和元年から実施された文部科学省事業である「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に3校が申請を行ったが、令和元年度からグローバル型アソシエイト校に高島高等学校、令和2年度からプロフェッショナル型アソシエイト校に大津高等学校が認定された。

高島高等学校は、地域の特性に応じながら同時にグローバルな視点ももって社会課題の研究を行う、フィールドワークを含む「高島学」での探究的な学びを実施している。また大津高等学校は地域の課題を家庭科の視点から捉え、地域と連携・協働しながら、地域理解を深化させ、職業観を醸成しながら、地域をどのように活性化し、地域に貢献していくべきかを学んでいる。両校の事業指定は終了したが研究成果をいかし、地域連携を推進する取組を継続していくとともに、県内高等学校へも情報発信を行う。

さらに、滋賀県独自の研究開発事業として、3つの事業を実施している。

「県立高等学校魅力化推進事業」では、モデル校に伊香高等学校を指定し、地域連携のためのコーディネーターを配置、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICTによる学校間連携授業に取り組んだ。

「高等学校における地域との連携による主権者教育の充実事業」では、研究推進校に伊香高等学校を指定し、選挙権年齢、成年年齢の引き下げを契機に、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、地域社会の様々な課題を自らの問題として主体的に捉え、解決しようとする態度の育成を通して、高等学校における主権者教育の充実に取り組んだ。

「未来の担い手を育むキャリア教育形成支援事業」では、伊香高等学校をはじめ、17校を指定して、自己を振り返り、変容を確認する取組をすすめることにより、自らのキャリア形成を見通す力を向上させ、インターンシップをはじめとして、課題対応能力やチャレンジ精神、創造性などを育む取組を進めることで、自分の将来を展望し、たくましく生き抜く態度や能力を身につけさせる教育の研究に取り組んだ。

このように、本県では、県立高等学校と地域社会との連携は重要であるとして、伊香高等学校をはじめ複数の学校に対し、県独自の地域連携事業をはじめ、学校運営協議会設置を推進し、コミュニティ・スクールを拡大してきた。現在、伊香高等学校はコミュニティ・スクールの取組も進めているが、「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受けることにより、学校と地域の関係性をさらに深め、学校と地域の連携・協働による教育活動の推進の先導性を高めることで、本県高校教育の更なる充実を図りたい。

## (5) 運営指導委員会の体制

所属	氏名	主な実績
滋賀県立大学環境科学部 准教授	平岡 俊一	環境科学部環境政策・計画学科
滋賀大学教育学部 教授	岳野 公人	環境教育・技術教育
里山実験室 HareMori 森づくりコーディネーター	山本 綾美	森林総合監理士 滋賀もりづくりアカデミー講師
森の案内人 合同会社 NiwaMori 代表社員	三浦 豊	森ツアーガイド、森のサロン実施 著書『木のみかた 街を歩こう、森へ行こう』 (ミシマ社)出版
高橋金属株式会社 代表取締役社長	高橋 康之	長浜市で脱炭素社会に向けて取り組む企業
株式会社バイオマスアグリゲ ーション 代表取締役	久木 裕	長浜市で脱炭素社会に向けて取り組む企業
長浜市未来創造部 部長	中嶋 克之	ゼロカーボンシティ宣言・地方創生担当

## (6) 運営指導委員会が取り組む内容

新学科「森の探究科」では、「森林サービス産業」と「脱炭素に資する森林のエネルギー利活用」に関するものの大きく2つに分けられる。それぞれの視点が上手く統合され相乗効果が発揮されるよう、運営指導委員会では、新学科カリキュラム内容や運営体制構築に関して専門的立場から助言を行う。また、高校教員やコンソーシアムの参加主体の当該テーマ理解向上に向けた講習などの実施も検討する。また、外部専門家のみならず、地域内で関連した活動を実際に計画し推進している実践者にも委員会にご参画いただくことで、高校と地域のスムーズな連携実現を目指す。

### 2-1-4 学際領域学科又は地域社会学科等における取組

#### (1) 学際領域学科又は地域社会学科等におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容

「森の探究科」の学びのベースには県の提唱するMLGs（マザーレイクゴールズ・琵琶湖を切り口とした滋賀県版SDGs）をおき、持続可能な社会と琵琶湖に根ざした暮らしの創造、人と自然が共存する循環型社会の構築を考える人材育成を図る。また地域の森林資源を活かした仕事やまちづくりにつなげ、地域活性化と地域創生を目指す。教育内容は、次の2本柱とし、主な内容は次のとおりである。

##### ①地元長浜市との協働による環境未来人材の育成：「カーボンニュートラル」

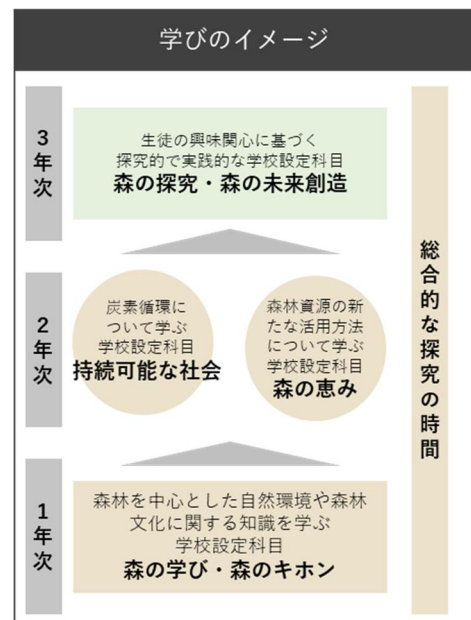
学校が立地する地元長浜市では2022年3月「ゼロカーボンシティ宣言」がなされ、それに先だって「湖北環境経済協議会」が設立されており、行政、民間ともに、2050年までに市全体の温室効果ガス排出量の実質ゼロを目指す脱炭素社会実現への機運が高まりつつある。この脱炭素社会を構築していくうえで、今後、環境・エネルギー分野をはじめ専門性を有する人材へのニーズが高まることが予想される。さらに脱炭素社会を地域主導で進め、エネルギーの地産地消を達成していくためには、その知識やスキル、ノウハウを持つ人材を地域の中で育成していくことが必要である。地域の未来を見据えて子どもへの環境・エネルギー教育を進め、地域で育ち、地域で活躍する人材づくりを推進する長浜市と協働し、地域振興に資する長浜の脱炭素社会を実行する

環境未来人材の育成に取り組む。

## ②新たな森林空間の総合利用に関する学び：「森林サービス」

地元の森林資源の整備と活用を実践的に学ぶ中で、特に森林空間を利用するサービスについて、例えばキャンプやトレッキング等のアウトドア活動、森林浴等のリラクゼーション活動、森のようちえん等自然を活かした教育活動などをフィールドワークや地域の専門家との対話を通して探究的に学ぶ。既存のサービスの充実だけでなく新たなサービスの創出を図り、そこで展開される活動をビジネスとして展開できるか、地域主導で持続可能なものであるか等を高校生の瑞々しい感性で探究し提案していく。このことは、人口減少や流出が激しい地域の活性化と地域創生につながる取組となる。また、森と人との関わりを山村文化に実際に触れることで学ぶ。これらの学びは林野庁が提唱する「新たな森と人のかかわり」＝「Forest Style」の創造につながる学びであり、人生100年時代のあらゆるステージにおいて、森林とのふれあいや森の恵みをいただきながら、健康的、文化的で心豊かな暮らしを目指す資質を涵養することにもつながる。その結果、地球環境の保全や地域社会の活性化、持続性の向上にも貢献することができると考えている。

学校設定科目としては、1年次に森林を中心とした自然環境や森林文化に関する基礎的な知識の習得を目的とする「森のキホン」科目を、2年次には「持続可能な社会」と「森の恵み」という地域と連携した専門的な科目をそれぞれ設定。3年次にはそれまでの授業を踏まえながら、生徒の興味関心に基づく探究的で実践的なマイプロジェクトを実施しその内容をまとめる「森の未来創造」を設定し、新学科における教育の集大成とする。また、新学科での学びと普通科全体の探究的な授業が相乗効果を発揮できるように留意するとともに、学校設定科目や総合的な探究の時間、公民や理科などのカリキュラムマネジメントに努め、「森の探究科」の学びの推進に努める。さらに修学旅行・文化祭などの学校行事や部活動、地域活動への参加など、学校生活の様々な機会を活用して、当該分野の知識や興味関心を深める内容とする。



## (2) コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

令和5年度末に発足した「地域と伊香高のミライ創造コンソーシアム」は、令和6年度には理事会を2回開催した。コンソーシアムの体制は整ったが、ややもすれば、地域や関係機関は依頼があれば協力するという受動的なかかわりになる傾向にあるので、それぞれができることや意見を出し合う場としてコンソーシアムは構築したいと考えている。

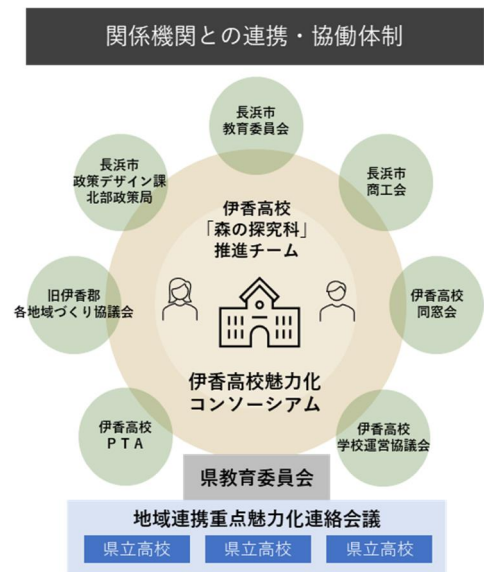
伊香高等学校側では、前述の「森の探究科推進室」が中心となり、コンソーシアムとのやり取りを行う。本事業に関連し県が採用するコーディネーターには、主にコンソーシアムマネージャーとして、コンソーシアム構成員との関係性構築やコンソーシアムが実際に動くものになるような働きかけや仕組みづくりを期待する。

コンソーシアム構成員は、本事業で重点を置く「1. カーボンニュートラル」「2. 森林サービス」「3. 地域連携」という大きく3つの視点を持って構成する。カーボンニュートラルにおいては、脱炭素社会構築に向けた活動を計画している長浜市をはじめ、地域のエネルギー専門家、大学、県庁関係部署等を構成員として迎え入れる。また、森林サービスに関しては、長浜市内の

森林関係団体の協議会である森林マッチングセンターや商工会や市内関連事業者、県庁森林政策課などを迎え入れる。地域連携に関しては、自治会等の地域づくり組織や地元商店街、近接するこども園や小・中学校、市役所関連部署等を迎え入れる。

コンソーシアムは、全体的な方針の審議を行うハイレベル会議と、個別の活動（例：森の探究活動、地域連携活動、保幼小中連携活動、など）を推進する専門チームの2階層とし、機動的に活動を推進できる体制とする。

高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたいことから、コンソーシアムの構成員から、高校生の取組に対する社会的評価も期待している。



### (3) コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
旧伊香郡各地域づくり協議会 【木之本・高時・伊香具・杉野・余呉・西浅井・高月】	各会長等	市北部の地域づくりに関すること
長浜市商工会	山内芳博	地域商工業者との連携
長浜市	手崎俊之 横尾 仁	市の重点プロジェクトに関すること 市の北部政策に関すること
長浜市教育委員会	馬淵康至	小中高連携に関すること
滋賀県教育委員会	木部浩次	県立高等学校の魅力化に関すること
伊香高等学校同窓会	大林利男 丹治和弘	伊香高等学校同窓生との連携
伊香高等学校PTA	吉村優子	伊香高等学校保護者との連携
伊香高校学校運営協議会	寺田年克	伊香高等学校の運営全般に関すること
伊香高等学校	校長	事務局

### (4) 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名
合同会社 kei-fu (ケイファー)	中山 郁英 氏
ココウ農園、ロハス長浜	伊藤 利恵 氏
長浜市地域おこし協力隊	副島 拓歩 氏

### ▼当該者の主な実績

中山郁英氏は、東京大学のイノベーション教育プログラムや行政と協働した事業に携わり、令和4年から伊香高校地域連携コーディネーターとして活動。行政と教育分野のコーディネートに関する知見を持つ。伊藤利恵氏は、三重大学生物資源学部森林資源学コースで学んだあと、静岡県、滋賀県で森林関係の仕事に携わり、森林環境学習の企画や、県内の小学生を対象とした森林環境学習「やまのこ」指導員としてのキャリアを持つ。副島拓歩氏は、NPO 法人カタリバでのインターンシップなどを通して探究教育や地域と連携した教育に関する経験を積み、地域おこし協力隊として取組を行っている。

### ▼コーディネーターが取り組む内容（勤務形態を含む）

中山氏は、県や高校担当者と協働し、主にコンソーシアムマネージャーとして、本事業に関わる行政や民間事業者、地域組織など多様な主体との調整や事業推進を行う。校内への駐在や電話・オンラインでのやり取り等に従事する。教務課に配置し、学校管理職や教員との情報交換などを魅力化推進担当の教員とともにを行う。具体的には以下のような業務を行うことを想定している。

- ・本事業に関するコンソーシアム組成のための各主体との調整
- ・コンソーシアムの運営方法検討および運営支援

伊藤氏は地域の森林関係者と協働し、新学科のカリキュラムの具体化とその準備を行う。実習のフィールドに出向いて専門家と教員をつなぎ、授業内容を構想する。またデスクを職員室内に設置し、週2日程度は学校内で生徒募集や情報発信のための業務を支援する。中山氏と伊藤氏あわせて、月12日程度業務に従事する。

- ・地域や専門家と連携した授業支援
- ・地域連携のための拠点整備支援
- ・その他、学校経営や生徒募集、情報発信など全般に関する支援

副島氏は主に学校内で活動し、各担当教員と連携しながら、新学科のカリキュラム検討に関連した地域の各種主体と連携した授業や活動などの実施や、ウェブサイトやSNSなどを活用した情報発信などを行う。デスクを職員室内に設置し、週3日程度は学校内に滞在し業務を行う。

長浜市の委嘱する地域おこし協力隊としての活動となるが、その業務管理においては、長浜市と伊香高校が協働して実施する。

中山氏は主に学校外部との関係構築・事業推進、伊藤氏は学校内外をつなぎながら新学科のカリキュラム形成、副島氏は主に学校内部での関係構築・事業推進と主たる担当領域を分けるが、密に情報交換しながら一体的に事業が推進されるように留意する。

### （5）学際領域学科又は地域社会学科等の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

県教育委員会では、急速な社会情勢の変化に対応し、時代の要請に応じた滋賀の高等学校教育の適正化および質の向上を図るため、外部有識者から成る滋賀県立高等学校在り方検討委員会を設置し、令和2年度から2年間にわたって議論を積み重ねてきた。そこで出された答申は、令和3年度末の県民県政コメントの反映を経て、令和4年3月「基本方針」として策定し、公表した。

令和4年8月には、各県立高等学校のスクール・ミッションを再定義し、伊香高等学校については、①地域の熱意と協力により開校した伝統のもと、地域との連携・協働した学びにより、将来の地域を担う人材を育成する学校、②基礎学力の充実や発展的な学習等により、生徒の進路希望を実現するための確かな学力を育成する学校と公表し、生徒、保護者にも知らせた。また、伊香高等学校の魅力づくりについて、10月には生徒会を中心に、生徒との話し合いを行い、さらに

11月には地元住民の皆さんからのヒヤリングを行い、様々な意見を賜った。

令和4年11月には、「魅力化プラン」策定に際し、市町のまちづくり主管課、教育委員会、地域の中学校長、保護者とそれぞれの代表に出席いただき、滋賀の県立高等学校の魅力化の方向性についての意見聴取（地域別協議会）を、管理機関が実施した。その中の意見を受けて、令和5年3月には「魅力化プラン」を提示した。伊香高等学校については、地域の専門家と協働し、森・川・里・湖がつながる県北部ならではの学びの実施と、地域をフィールドに、「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」を掛け合わせた多様な地域探究の学びに取り組む地域連携重点校として、新学科設置による魅力化を推進することを示した。

また、令和5年3月、令和6年3月に「伊香高等学校魅力化シンポジウム」を開催し、伊香高等学校の教育活動の広報、生徒による地域連携についての研究発表、さらに今後の伊香高等学校の魅力化の方向性や地域連携の取組について、地域の行政機関、企業、中学生、保護者に向けてメッセージを発信した。令和7年3月にもシンポジウムを開催し、情報を発信するとともに、魅力化に対する意見を伺う場としたい。シンポジウムのみならず、運営指導委員会やコンソーシアム全体会議、学校運営協議会において、多くの当事者で課題を共有し、一方通行にならないよう意見交換等の機会を設けるよう努め、それぞれの立場や果たすべき役割の理解を深めることにも留意したい。

管理機関においては、県教育委員会のホームページはもちろん、保護者向け情報誌「教育しが」や、県立高等学校の魅力や特色を知っていただくための「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用するとともに、県下の中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して行うなど、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたい。また、伊香高等学校の所在地の長浜市公報にも掲載をいただくとともに、地域密着型生活情報誌「リビング滋賀」に高等学校教育改革の特集の掲載を依頼していきたい。

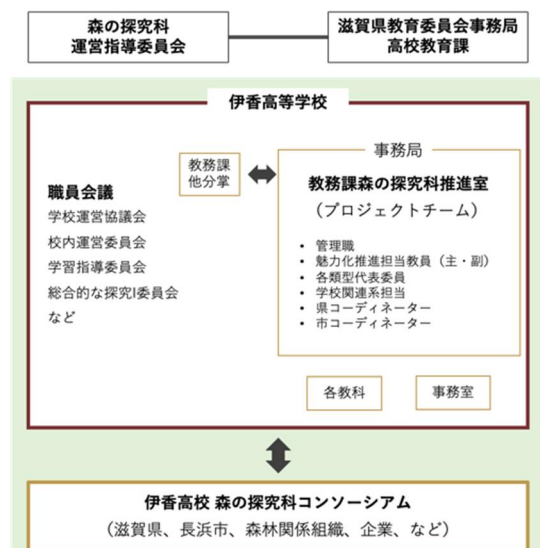
令和7年度には、県下の中学生・保護者・学校関係者を対象とした「学校説明会」を県教育委員会が主催して行うとともに、長浜市を中心に、地域連携の取組、学校改革についての説明会を、地元小中学校等を基本とした形で実施し、生徒・保護者・地域に対する説明を行う。また学校は夏季休業期間を活用して中学生や保護者に向けたオープンスクールを実施し、新たな学科の設置について魅力発信していく。

## 2-1-5 実施計画

### (1) 3ヶ年の実施計画の概要

令和5年度の校内校務分掌において、研究事業推進の事務局として、教務課森の探究科推進室（プロジェクトチーム）を組織した。そのうえで、委嘱した運営指導委員、校長、教頭、事務長、教務主任を中心に研究にかかわる組織ならびに運営指導委員会、コンソーシアムを右記のように構成した。

管理機関の担当者と校長は、月1回以上は取組状況を共有しながら、諸課題の解決に向けた協議を行う。また生徒の活動発表や外部講師によるワークショップなどの学習活動を複数回見学し、成果や改善点を校長やプロジェクトリーダーなどと協議を行い、学校設定科目「森のキホン」「森の恵み」「持続可能な社会」「森の未来創造」の充実を図る。特に、森の探究科運営指導委員会において、校内事務局は地域連携コーディネーターと協働して作成した学校設定科目のシラバスについて、評価・検討し改善を重ねる。



将来的には木質バイオマスの熱利用や太陽光発電を高校自体に取り入れることで、学習内容を体験的に理解するとともに、日本初の「ゼロ・カーボン高校」を目指す。また近接する保幼・小中学校も含めた地域のカーボンニュートラルに貢献できる環境を整える。

管理機関においては、「滋賀県立学校の校舎、課程、部および学科等の設置等に関する規則（滋賀県教育委員会規則第5号）」改正を行い、新学科設置を正式決定した。また「地域連携重点魅力化連絡会議」「運営指導委員会」を開催し、課題の整理や他校への情報発信、連携促進に努める。

令和6年度は、新学科設置の周知活動として、県教育委員会ホームページや保護者向け情報誌「教育しが」や、「滋賀県立高等学校デジタルスクールガイド」を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行った。6月には県教育委員会が主催し、8月には学校が主体となって学校説明会を実施した。並行して、地域連携コーディネーターと協働して学校設定科目について、普通科生徒の教育課程を一部変更するなど、指導と評価を一体的に行い、教育課程について、総合的な探究の時間を含め、さらなる改善を図るとともに、コンソーシアム構築の充実を図っている。卒業生にはアンケートを実施し、新学科1期生との比較も図っていく。

令和7年度入学生が1期生となる。地域連携コーディネーターと協働して練り上げた学校設定科目や総合的な探究の時間、その他各教科の教育活動等をマネジメントしながら実施し、生徒アンケートや関係者の評価を受けながらカリキュラムについてさらに改善したり、構築したコンソーシアムの充実化を図りながら、指定事業終了後の体制づくりについても、長浜市やコンソーシアムの関係団体等と確認を行う。高校生が主体性をもって取り組み、他者と協働しながら試行錯誤し探究することや、小さなことでも実際の政策や企業活動の実践や提案を行い、社会的評価も受けるところまで、学校での学びと実社会を結び付けた取組としたい。

コーディネーターと連携しながら、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「森の探究家」（森林サービス産業や環境エネルギーに関連する専門家）のタネを育てる、高校生と大学生が共に学び合いをするコンソーシアム構築を目指す。

## (2) 令和7年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」の年間計画作成</li> <li>・「森のキホン」1学期の授業計画作成</li> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業の年間計画作成</li> <li>・プレ授業1学期の授業計画作成</li> <li>・プレ授業実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長浜市との連携確認、情報共有</li> <li>・コンソーシアム会議年間計画作成</li> <li>・新たな専門チームの設立検討</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒募集専門チーム会議</li> </ul>

6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンソーシアム第1回理事会</li> <li>・事業の進め方についての共有</li> <li>・第1回運営指導委員会</li> <li>・学校説明会（県教育委員会主管）</li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」、プレ授業の実施と振り返り （カリキュラムアドバイザーによる指導助言） （革新的な教育活動講師）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森の探究科運営専門チーム会議</li> </ul>
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「持続可能な社会」「森の恵み」のシラバス初稿作成 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言）</li> <li>・プレ授業2学期の授業計画作成</li> <li>・オープンスクール （中学生や保護者に新学科説明）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校説明会 （学校主体・地域づくり協議会協力）</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業実施</li> <li>・修学旅行先の下見・視察</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒募集専門チーム会議</li> </ul>
10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校説明会 （学校主体・地域づくり協議会協力）</li> </ul>
11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第2回運営指導委員会</li> </ul>
12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業実施</li> <li>・「持続可能な社会」「森の恵み」のシラバス最終確定 （カリキュラムアドバイザーによる指導助言）</li> <li>・プレ授業3学期の授業計画作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒募集専門チーム会議</li> </ul>
1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携重点魅力化連絡会議 （県教育委員会主管）</li> <li>・コンソーシアム第2回理事会</li> </ul>

2 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「森のキホン」授業実施</li> <li>・プレ授業実施</li> <li>・「森のキホン」、プレ授業の実施と振返り (カリキュラムアドバイザーによる指導助言) (革新的な教育活動講師)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森の探究科運営専門チーム会議</li> <li>・生徒募集専門チーム会議</li> </ul>
3 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度の授業準備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度の成果を発表するシンポジウムの開催（研究成果報告会とコンソーシアム第3回理事会を兼ねる）</li> <li>・第3回運営指導委員会</li> </ul>

### (3) 事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み

管理機関による「地域連携重点魅力化連絡会議」を隔年開催する。ただし、令和5年度については令和6年1月23日に開催した。働き方改革の観点から、オンラインによる開催を積極的に取り入れ、安定的で計画的な会の開催に努める。その際に伊香高等学校から事業の進捗状況や成果と課題について報告を行い、他の地域連携に取り組む県内高等学校への情報提供とともに評価も行う。

伊香高等学校において、年3回（おおよそ6月、11月、3月）、運営指導委員会を実施していく中で、本構想において実現する成果目標の設定を行う。現時点においては就職希望者のうち県内に就職する生徒の割合を95%以上とすることや、進学志望者のうち将来県内での就職を希望する生徒の割合80%以上とすること、生徒アンケートにおいて「地域における課題に関わりたいと思う生徒の割合」を85%以上、「地元で貢献したいと思う生徒の割合」85%以上、「勉強したことを実際に応用してみたい生徒の割合」85%以上とすること、さらに「森林環境とエネルギーの問題が、自分たちの身の回りの生活にどのようにかかわっているかを知っている」生徒の割合を95%以上とすることなどを想定している。

伊香高等学校は、地域連携を重点として高校の魅力化を推進し、地域で活躍する人材を育成する高校として、生徒が地域に赴き、地域の人々と協働して何かに取り組む回数や地域の方々や卒業生を学校に招く回数をあわせて年間50回を目指し、地域に開かれた学校づくりを推進する。また自治体に対する政策等の提案を年間3回、市内の高校による合同発表会や研究報告会等への参加回数を最終年次は6回としたい。

管理機関としては、伊香高等学校の協力を得て、卒業生を追跡調査する仕組みの構築に向け、卒業時にメーリングリストを作成するとともに、SNS（Facebook やLINE）、学校のホームページなど、複数のソーシャルメディア等を介して、ニュースレター形式で、事業後の取組や学校の近況について定期的・継続的に情報を配信したい。それにより、卒業後も生徒とのつながりを維持したうえで、Google Form 等を活用したオンライン・アンケート調査を4年後・7年後に実施し、進学・就職状況や、地域との関わり、地域の社会課題に対する意識の変容、高校時代の学びの有用性等を調査・研究する。

最終的には、コーディネーターと連携しながら、滋賀県立大学の大学生も含めた地域の「森の探究家」（森林サービス産業や環境エネルギーに関連する専門家）のタネを育てる、高校生と大学生が共に学び合いをするコンソーシアム構築を目指す。そのためにコンソーシアムの構成メンバーを再検討したり、学校運営協議会組織とも関連付けたりしながら、より実効性のある活動ができる組織としていく。

## 2-1-6 成果の普及のための仕組み

管理機関では、令和4年度から県独自の「県立高等学校魅力化推進事業」を実施し、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置において、コーディネーター人材の必要性が見えてきたところである。伊香高等学校において開催する年3回の運営指導委員会を通じた研究の深まりにより、「魅力化プラン」の中で、地域連携重点による魅力化推進を指定した普通科13校による「地域連携重点魅力化連絡会議」の中で、地域社会に関する学科の設置推進に向けた具体的な提案により、地域連携の課題研究と解決の方向性の提案を期待している。

また、生涯学習課が主管する「県立学校コミュニティ・スクール推進事業研修会」における事例発表を行うことにより、コミュニティ・スクールの円滑かつ効果的な導入や取組の充実が図られ、県立学校の地域連携・協働の推進につなげたい。

さらに、令和5年度から実施している「高校生による【しが】学びの祭典」は、各校で実践した探究的な学びの取組やその成果について発表し、探究的な学びを全県に普及するとともに、同世代の高校生の課題研究の発表を聴くことで、生徒の学問的探究心を養うことを目的としている。この「学びの祭典」において、「森の探究科」の学びに関わる研究成果の事例発表を行い、新学科を県内の中学生等にアピールしていく。

伊香高等学校は、オープンスクールを年3回実施したり、学校のホームページに様々な活動を掲載し情報を発信したり、長浜市の公報や学校独自の広報誌（学校通信）を発行したりするなど、地域住民や地元中学校などに向け情報発信を行っていく。

## 2-1-7 国の指定終了後の取組継続のための仕組み

### ① 管理機関

- ・国の指定終了後も「地域連携重点魅力化連絡会議」を運用し、関係機関、特に、市町まちづくり主管課と連携を強化したうえで、事業の自走化を図り、「魅力化プラン」の推進に、構築したシステムの普及啓発を行う。
- ・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があることが想定され、地域おこし協力隊も含め、県教育委員会は長浜市と事業指定3年間に協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。
- ・県教育委員会事務局生涯学習課の令和6～8年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。
- ・令和3年度から令和5年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施した。この事業で培った知的財産を継承するため、令和6～8年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人財を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。同様に、本事業においても、「森の探究科」の学びの継続・充実のための予算確保や、長浜市や地域の企業等から費用も含めた支援も含め検討していく。
- ・「地域連携重点魅力化連絡会議」を継続して実施することで、「基本方針」に基づき作成した、「魅力化プラン」の事業成果の検証を行う。
- ・教育委員会内の体制の継続、また必要な予算を獲得し、伊香高等学校が、県予算で自走していくよう必要な支援を継続する。

・特別非常勤講師の仕組みを活用して、外部講師による教育内容の充実・継続を図る。

② 伊香高等学校・長浜市

・地域社会に関する学科の学びの成果や課題に係る調査・分析・検証については、外部機関と連携しながら継続して取り組み、さらなる改善・充実を図る。コーディネーターやコンソーシアム等の関係機関等と学校運営協議会の連携・協力体制を維持、強化しながら、特に長浜市の地域おこし協力隊の制度等を活用したコーディネート人材の活用、ふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得など、時代の要請に応じた新たな取組の企画・開発を継続する。

## 2-2 事業の実施日程（事業結果説明書より）

事業項目	実施日程（令和7年4月1日～令和8年3月31日）												
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
<b>カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施</b>													
新学科設立に向けた先行実施授業	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	
地域をフィールドにした探究的な学び	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	
カリキュラム開発会議	●			●					●				
カリキュラム作成における個別訪問							●		●				
先進校等訪問							●	●					
<b>関係機関との連携協力体制の構築・維持</b>													
運営指導委員会				●					●			●	
コンソーシアム関連会議		●			●							●	
地域各団体への説明						●							
<b>コーディネーター</b>													
コーディネーター（中山氏）				●	●							●	
コーディネーター（中井氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
コーディネーター（副島氏）	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
<b>新学科説明会等の実施</b>													
新学科説明会			●										
伊香高通信の発行		●			●				●	●			
大学・地域各団体・イベント等でのPR	●		●	●	●	●	●	●	●			●	
体験入学の実施					●		●	●					
地域中学校への訪問		●	●	●		●	●	●	●				
<b>成果発表・成果普及</b>													
関西万博出展（関西パビリオン催事）					●								
ながはまコミュニティカレッジ								●					
北の近江高校生サミット											●		
伊香高校魅力化シンポジウム												●	
「滋賀県立高等学校魅力化プラン」に基づく取組状況調査・結果共有											●		
<b>成果検証</b>													
運営指導委員会や先行実施授業後の生徒アンケート等	随時												
成果目標アンケート											●		
中学校等卒業予定者の進路志望調査						●				●			

## 2-3 事業の実施概要（事業結果説明書より）

### （1）カリキュラムの検討内容

今年度より本校では、新学科「森の探究科」が開設した。今年度を実施した学校設定科目「森のキホン」のカリキュラムは、令和5年度より実施してきた普通科自然環境類型での先行授業をもとに、年間授業計画を立てブラッシュアップさせて実施した。また来年度に実施する学校設定科目「持続可能な社会」「森の恵み」は、令和5年度より実施してきた普通科自然環境類型での先行授業に加え、今年度も普通科自然環境類型で先行授業を実施し、カリキュラムの具体化と充実化をはかった。特にカリキュラムの実施・計画においては、地域をフィールドにした本学科ならではの学びや生徒のインプットとアウトプットのバランス、普通科目とつながりを持たせることに注力した。

### 1-1 カリキュラム開発に関わる会議の体制および取組

新学科のカリキュラムについては、令和5年度よりコアメンバー（推進室長＋コーディネーター）、理科教員、地域の実践者をカリキュラムアドバイザーとして加えた校内組織「カリキュラム開発会議」を中心に、カリキュラム案の作成・修正を行ってきた。カリキュラムアドバイザーには、昨年度に引き続き地域で森林自然関係やゼロカーボンに関連した経験や人のつながりを持つ前田壮一郎氏や教育コーディネーターとして探究活動のデザインを行っている余島純氏にオンライン会議にてご助言をいただいた。この「カリキュラム開発会議」では、先行授業の振り返りと学期での具体的な授業内容を検討した。その際、生徒へのインプットとアウトプットとのバランス、地域の実践者や団体と連携・協働した授業の展開、学びの一貫性を考慮しながら進められるよう協議を重ねた。

また、コンソーシアムのなかに「森の探究科運営専門チーム」を発足させ、先行授業に基づいてカリキュラム案の検討を行った。「森の探究科運営専門チーム」のメンバーは以下の表の通りである。

#### ■森の探究科運営専門チーム参加組織

市内事業者・団体	株式会社バイオマスアグリゲーション
	ながはま森林マッチングセンター
	滋賀県森林組合 伊香事業所
長浜市	北部産業振興課森づくり推進室
	環境保全課
長浜市教育委員会	教育指導課（環境教育担当）
滋賀県	教育委員会事務局高校教育課
	魅力ある高校づくり推進室
	びわ湖材流通推進課

カリキュラム案の詳細が決まった今年度は、コアメンバーを中心に、理科教員、ゲスト講師の方々と具体的な授業案を検討、実践を行った。また、来年度実施予定の学校設定科目「持続可能な社会」は、森の探究科運営専門チームの委員である株式会社バイオマスアグリゲーションの久木裕氏・前田壮一郎氏、長浜市環境保全課の桐畑孝佑氏・菅谷氏、長浜市の地域エネルギーコーディネーター野村紗里氏にご意見を伺い、より緻密に学びを深めるカリキュラム案の作成を行った。さらに学校設定科目「森の恵み」においては、連携予定である志村の染さまの工房を訪問し、カリキュラムでの森林資源の活用方法の実践について、意見を伺った。

また、2年次の修学旅行で交流を行う予定である屋久島高校を訪問し、世界自然遺産となって

いる壮大なフィールドでの先進的な取組についての説明を受け、地域外の森林資源・自然環境における学びの実装化を進めた。また、来年度から始まる県外募集に向けて、下宿生に対して支援を行っている自治体や事業者の視察を行った。具体的には、所有者世帯と学生が所有者世帯の自宅の空き部屋のマッチングを行う「大和郡山ソリデール」、県・町・地域が連携して県外生の受け入れを支援している「佐賀県立有田工業高等学校」を訪問し、学校を核とした地域創生を目標に、地域に欠かせない人づくりの循環について意見を伺った。

### ■カリキュラム開発会議

	実施日	実施内容
第1回	R7.4/3	・1学期の授業計画 ・講師依頼と授業案作成分担
第2回	R7.7/7	・1学期の振り返りと2学期の授業計画 ・講師依頼と授業案作成分担
第3回	R7.12/9	・2学期の振り返りと3学期の授業計画 ・講師依頼と授業案作成分担

### ■カリキュラム案作成における個別訪問

実施日	訪問先	実施内容
R7.10/2	株式会社バイオマス アグリゲーション	・来年度の「持続可能な社会」のカリキュラム案について
R7.12/1	志村の染	・来年度の「森の恵み」のカリキュラム案について
R7.12/4	長浜市環境保全課	・来年度の「持続可能な社会」のカリキュラム案について

### ■先進校等訪問

実施日	訪問先	内容
R7.10/31	鹿児島県立 屋久島高等学校	昭和23年鹿児島県立種子島高等学校の分校として島内唯一の全日制高等学校として開校。普通科の環境コースでは、『世界自然遺産屋久島』の自然と環境、歴史、文化を学習する教育活動を展開している。今回の訪問では、環境コースの学びを伺い、今後の連携内容について協議を行った。
R7.11/4	大和郡山ソリデール	所有者世帯と学生が所有者世帯の自宅の空き部屋のマッチングを行う、大和郡山市の取組。本校の所在地である木之本地区の空き家活用を目指し、ヒアリングを行った。
R7.11/5	佐賀県立 有田工業高等学校	明治14年、日本初の陶磁器産業の技術者養成機関「勉修学舎」を源とする。県下屈指の「歴史と伝統、実績」を誇る工業高校として、全国でも数少ないセラミック科、デザイン科がある。今回の訪問でも、地域みらい留学生に対して、県・町・地域でどのような支援を行っているか、ヒアリングを行った。

## 1-2 新学科開設にともなった実施授業と先行授業の実施

今年度より新学科「森の探究科」が開設し、それにともない学校設定科目「森のキホン」を開講した。実施にあたっては、県・市の職員、自然環境施設の職員、地域企業や事業者と連携し、各単元の目標とねらいを明確化し、各単元が森・川・里・湖がつながる県北部ならではのつながりをもった学びとなるよう工夫した。また、次年度開講予定の学校設定科目「持続可能な社会」「森の恵み」に向けても、昨年度に引き続き先行授業を実施した。先行授業は、自然環境類型の学校設定科目「環境Ⅰ」「環境Ⅱ」の授業を通して、新カリキュラム設計に向けて検証を行った。

### ■授業計画（森の探究科開講「森のキホン」）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
1	R7.5/7	春の樹木観察	17名 （1年生森の探究科）	三浦氏（森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員）
2	R7.5/21	森林生態系総論	17名 （1年生森の探究科）	籠谷氏（滋賀県立大学 講師） 遠隔にて実施
3	R7.5/22	奥琵琶湖・山門水源の森での生物多様性の調査	17名 （1年生森の探究科）	富岡氏・浅井氏（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会）
4	R7.6/9	滋賀県の森林生態系総論	17名 （1年生森の探究科）	野間氏 （滋賀県立大学 准教授）
5	R7.7/11	大浦川での生態系調査	17名 （1年生森の探究科）	植田氏 （湖北野鳥センター）
6	R7.7/16	森林3D マップの活用を考える	17名 （1年生森の探究科）	藤井氏・井村氏・加藤氏・中山氏（株式会社デンソー）・上田氏（滋賀県立大学 特任講師）・小西氏（滋賀県環境保全課）・橋本氏（ながはま森林マッチングセンター）・前田氏（株式会社バイオマスアグリゲーション、菅山寺の森友の会）他
7	R7.9/8	夏の樹木観察	17名 （1年生森の探究科）	三浦氏（森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員）
8	R7.9/22	滋賀の林業総論	17名 （1年生森の探究科）	知田氏（滋賀県びわ湖材流通推進課）
9	R7.9/24	森林調査の基本（森林組合の仕事と調査、ドローン調査）	17名 （1年生森の探究科）	高橋氏 （滋賀県森林組合 伊香事業所）
10	R7.9/29	森林調査と森林管理（スマート林業とゾーニング）	17名 （1年生森の探究科）	古川氏・奥田氏 （滋賀県森林政策課）
11	R7.10/1	森林の計測・管理技術（森の健康度について）	17名 （1年生森の探究科）	山本氏（里山実験室 haremori）
12	R7.10/6	人工林の施業体験（枝払い、チェーンソー体験）	17名 （1年生森の探究科）	子林氏・東氏（木民）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
13	R7.10/22	木材流通の現状と木材の規格	17名 （1年生森の探究科）	知田氏（滋賀県びわ湖材流通推進課）
14	R7.11/10	農薬の生態系の影響について	17名 （1年生森の探究科）	須戸氏 （滋賀県立大学 教授）
15	R7.11/12	日本海と森林の歴史	17名 （1年生森の探究科）	堂満氏 （滋賀県立大学 准教授）
16	R7.11/13	木材流通現場・製材所・木材住宅見学	17名 （1年生森の探究科）	宇野氏（株式会社スンエン） 川瀬氏 他3名（内保製材株式会社）
17	R7.11/17	秋の樹木観察	17名 （1年生森の探究科）	三浦氏（森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員）
18	R7.11/19	主伐見学	17名 （1年生森の探究科）	清水氏（滋賀県森林組合 北部事業所）・湖周造林
19	R7.12/8	木材以外の価値づくり入門	17名 （1年生森の探究科）	高橋氏 （滋賀県立大学 教授）
20	R7.12/10	森づくりと播種体験	17名 （1年生森の探究科）	清水氏 （タネカラプロジェクト）
21	R7.12/12	メディアアートの世界と体験	17名 （1年生森の探究科）	竹本氏（紫洲書院） 唐神氏（メディアアーティスト）
22	R7.12/17	様々な森林・変化する森林	17名 （1年生森の探究科）	籠谷氏（滋賀県立大学 講師）遠隔にて実施
23	R8.1/14	森林における獣害の実態と対策	17名 （1年生森の探究科）	井上流・井上琳氏 （滋賀県自然環境保全課）
24	R8.1/19	森林と防災	17名 （1年生森の探究科）	砂田氏 （滋賀県森林保全課）
25	R8.1/23	岐阜県立森林文化アカデミー訪問	17名 （1年生森の探究科）	吉野氏・松井氏（岐阜県立森林文化アカデミー）
26	R8.1/26	野生生物の生態	17名 （1年生森の探究科）	須藤氏 （イーグレット・オフィス）
27	R8.1/28	冬の野鳥観察	17名 （1年生森の探究科）	植田氏 （湖北野鳥センター）
28	R8.2/4	森と人との関わりの歴史・文化（地域）	17名 （1年生森の探究科）	横山氏・前田氏（高時川源流の森と文化を守る会）
29	R8.2/6	琵琶湖博物館見学	17名 （1年生森の探究科）	奥田氏 （琵琶湖博物館講師）
30	R8.2/9	森と人との関わりの歴史・文化（日本・世界）	17名 （1年生森の探究科）	三浦氏 （森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員）
31	R8.3/10	持続可能な社会について	17名 （1年生森の探究科）	久木氏（バイオマスアグリゲーション）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
32	R8.3/13	セーザイゲームで学ぶ 木材流通	17名 （1年生森の探究科）	川瀬氏 （内保製材株式会社）

■授業計画（森の探究科開講「総合的な探究の時間」）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
1	R7.4/24 -5/8	1本の樹木と友達になろう	17名 （1年生森の探究科）	副島氏・中井氏 （コーディネーター）
2	R7.5/29 -7/15	山門水源の森で気になったことを調査しよう	17名 （1年生森の探究科）	副島氏 （コーディネーター）
3	R7.8/27 -9/25	能登半島地震の今を調べよう	17名 （1年生森の探究科）	大林氏・速水氏・柴田氏 （長浜ライオンズクラブ）・ 副島氏 （コーディネーター）
4	R7.10/2 -12/19	木工作品で身の周りの課題を解決しよう	17名 （1年生森の探究科）	上村氏（地域工務店）・ 副島氏 （コーディネーター）
5	R8.1/8 -3/19	これまでの振り返りをしよう	17名 （1年生森の探究科）	副島氏 （コーディネーター）

■授業計画（新学科設立に向けた先行実施授業）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
1	R7.4/10、4/11	森と人との関係性を考える	24名 （3年生自然環境類型）	本校教員
2	R7.4/18	竹の可能性について考える	24名 （3年生自然環境類型）	土屋氏 （長浜市地域おこし協力隊）
3	R7.4/23	地域の獣害について考える	24名 （3年生自然環境類型）	中野氏 （オウミジビエラボ）
4	R7.4/17 -5/8	森の食文化「春の森の恵み」・調理実習	24名 （3年生自然環境類型）	本校教員
5	R7.5/21 -12/8	田上山の戦国観光プロジェクトとコラボした木材加工実習	24名 （3年生自然環境類型）	長浜イノベーションネット、 浅尾氏（株式会社浅尾）、 長浜市
6	R7.9/3	滋賀県の持続可能な社会の取組みについて考える	24名 （3年生自然環境類型）	金氏 （琵琶湖環境科学研究センター）
7	R7.9/4	滋賀県の木材資源の循環について考える	24名 （3年生自然環境類型）	木村氏（琵琶湖環境科学研究センター）
8	R7.9/11	長浜市の持続可能な社会の取組みについて考える	24名 （3年生自然環境類型）	桐畑氏 （長浜市環境保全課）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
9	R7.9/17	余呉の山村文化、高時川の現状について考える	24名 （3年生自然環境類型）	本校教員
10	R7.9/18 -10/30	木育・木のおもちゃを通して、木の良さを園児に伝える	24名 （3年生自然環境類型）	青木氏（株式会社浅尾） 長浜市立きのもと認定こども園
11	R7.10/9	余呉の山村文化を学ぶ	24名 （3年生自然環境類型）	横山氏・前田氏（高時川源流の森と文化を継承する会）
12	R7.10/14 -11/5	「森のようちえん」を通して、森での保育や森林環境の利用について考える	18名 （2年生自然環境類型）	富士野氏（かえでの庭）、 前田氏、東氏、子林氏、 長澤氏（長浜市木育事業チーム）、 長浜市立きのもと認定こども園
13	R7.11/5	森と人をつなぐ仕事について考える	24名 （3年生自然環境類型）	橋本氏（ながはま森林マッチングセンター）
14	R7.11/12	丹生ダム建設で離村した村について考える	24名 （3年生自然環境類型）	吉田氏 （湖北アーカイブ研究所）
15	R7.11/13、19	山村文化の継承・植樹実習	24名 （3年生自然環境類型）	荒井氏 （荒井木籠製作所）
16	R7.11/20	風力発電について考える	24名 （3年生自然環境類型）	柿岡氏、牧野氏 （グリーンパワーインベストメント）
17	R7.12/17	長浜市で取り組む、持続可能な農業について考える	24名 （3年生自然環境類型）	小障子氏（大戸洞舎）
18	R8.1/15	CO <sub>2</sub> 削減技術について	24名 （3年生自然環境類型）	白木氏 （名古屋大学 准教授）
19	R8.1/20	キノコの生態と魅力	18名 （2年生自然環境類型）	入江氏 （滋賀県立大学 教授）
20	R8.2/4	水田生態系について	18名 （2年生自然環境類型）	皆川氏 （滋賀県立大学 准教授）

### ■新学科開設にともなった実施授業と先行授業の総括：課題と次年度への展望

- ・今年度新学科「森の探究科」の開設にともない、これまでに実施してきた先行授業をもとに1年次の学校設定科目「森のキホン」を計画的に実施することができた。その際、県や市の職員、企業や事業者にご協力いただき、体験を交えながら、専門的な学びを体系的に配置することができた。昨年度までの反省に、多くの方々に携わっていただくことで、学びのつながりを感じにくかったことがあったが、カリキュラムの中でインプットとアウトプットを連動させて取り入れたことで、レポートの出来や考査において理解も進んだ様子が伺えた。今後学習した内容を単年度で終わらせないよう、次年度の学校設定科目「持続可能な社会」や「森の恵み」に活かせるよう授業内容を磨き上げることや、他教科

との横断的な連携について検討していきたい。

- ・これまでの様々な先行授業により、次年度に実施する学校設定科目「持続可能な社会」と「森の恵み」は、よりブラッシュアップさせたカリキュラムを設計することができた。この2科目においては1年次の学びを踏まえて、その取組を発信できるようアウトプットを行っていききたい。また3年次の学校設定科目「森の未来創造」は、生徒の課題探究を軸とするため、生徒の課題発見力や解決力といった課題探究力に加え、人への伝え方などの技術向上の底上げを行っていききたい。

### 1-3 地域をフィールドにした探究的な学び

地域をフィールドに、「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」を掛け合わせた多様な地域探究を行う魅力的なカリキュラムの開発を目的として、類型での授業や「総合的な探究の時間」の中で様々な活動を実施した。

#### ■授業計画

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関（敬称略）
1	R7.10/2 - 12/15	3年生総合的な探究の時間「長浜市が進める持続可能な社会づくり」	76名	久木氏（株式会社バイオマスアグリゲーション）、清水氏・中筋氏（ONE SLASH）、桐畑氏（長浜市環境保全課ゼロカーボンシティ推進室）、関西電力株式会社滋賀支社、北川氏（もりのもり）、杉江氏（長浜市防災危機管理局）、姉川ダム管理事務所、湖北地域消防本部 長浜消防署 伊香分署、金居原の歴史と森を守る会、長浜市立木之本小学校
2	R7.4/15 -10/14	2年生地域文化類型発酵のチカラで地域を繋ぐ！「木之本バインミー」開発プロジェクト	11名	FUSE COFFEE ROASTERS、水のジャパンコーヒーフェスティバル2025 in 木之本実行委員会
3	R7.7/14 -15 R7.12/12	2年生・3年生類型別実習	48名	長浜消防署伊香分署、町おこしグループ「ツボのソコ」、長浜ローカルフォト、福井県立恐竜博物館、株式会社 エアウィーヴ、酒茶いくひ、滋賀県立琵琶湖博物館、ハックルベリー
4	R7.11/12 -26	1年生総合的な探究の時間「キャリアトーク」	72名	境氏（株式会社いろあわせ）、藤濱氏（田中シビルテック）、小川氏（夜カフェ ふらっと）、野村氏（長浜市地域おこし協力隊）
5	R7.12/16	2年生キャリア企画	69名	布施氏、大菅氏、藤原氏、村居氏、山口氏、中川氏、家倉氏 (本校卒業生7名)

## ■地域をフィールドにした探究的な学びの総括：課題と次年度への展望

- ・昨年度に続き、今年度も地域に密着した授業を展開した。2年生は類型別の授業で、3年生は総合的な探究の時間で「長浜市が進める持続可能な社会づくり」をテーマに探究活動を行った。特に2年生地域文化類型では、地域の魅力を再定義した新商品の開発を通じて、起業家精神（アントレプレナーシップ）を養う取組を実施した。これらの成果を踏まえ、引き続き類型間の連携を充実させていくとともに、様々な地域課題に対し複数の類型が異なるアプローチで解決策を提案する「合同プロジェクト」の導入を検討していきたい。
- ・1年生・2年生では、地域で活躍する方々と対談する機会を設け、自身のキャリアについて考える機会を設けた。対談終了後に講師の控室に訪れる生徒がいるなど、生徒が主体的にキャリアを考える良い機会とすることができた。これらの学びを校内での共有に留めず、長浜市への政策提言や地域誌への寄稿などを通じて社会へ直接発信する仕組みを強化し、生徒の社会参画意識をより一層高めていきたい。

### 1-4 新学科のコンセプト

滋賀県北部地域の豊かな自然環境、森林資源などを活用し「森で学ぶ」をコンセプトに、生徒の「生きる力」を地域とともに育む〈ゼロ・カーボン・ハイスクール〉を目指す。

## ■新学科教育活動の概要

持続可能な社会と琵琶湖に根ざした暮らしの創造、人と自然が共存する循環型社会構築に資する人材育成を図る。また、地域の森林資源などを活かしたまちづくりに関わり、地域活性化との相乗効果を目指す。

- ・「森・川・里・湖」が水系でつながる滋賀北部ならではの学び
- ・ 地域内外の専門家と協働した循環型社会に関する実践的な学び
- ・ 地元地域や長浜市など地域と連携した学び

### 1-5 新学科で育てたい人材像

新学科で育てたい人材像について、学校全体のポリシーも含め以下の通り検討を行った。

## ■伊香高校全体のグラデュエーション・ポリシー

- ・教育基本法に則り、将来の地域社会に貢献しうる、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人材を育成します。
- ・地域の未来を創造し、持続可能な地域社会を支える環境未来人材を育成します。
  - ▶ 夢を描き、進路目標を実現する「自己実現力」
  - ▶ 自己の思いを伝えながら、他者の多様性を理解する「コミュニケーション力」
  - ▶ 人や地域と協働し、新たな創造に向かう「課題解決力」
  - ▶ 未知の困難に柔軟に対応し、あきらめない「レジリエンス力」

加えて、新学科ならではの育てたい人材像

- ・人と自然が共存する循環型社会構築に資する「過去と未来を思いやる力」
- ・森林や自然との関わりを通して磨く「洞察力」と「感受性」
- ・わからないことを楽しむ「好奇心」

→ 個の力 × しなやかさ × 他者への想像力 = 新学科で育てる「生きる力」

## 1-6 新学科の学びに関するキーワードと大切にしたい要素

コアメンバーでの議論や運営指導委員会、森の探究科運営専門チームでの助言などを踏まえ以下の通り検討した。

- ・学習内容：森林、循環、持続可能性、再生可能エネルギー、自然資源、地域資源
- ・学習方法：鳥の目虫の目、上流から下流まで、温故知新、身体を動かす、探究とコミュニケーション

また、新学科での学びに関して、昨年度からの議論をふまえた新学科で大切にしたい学びの要素を以下の3点と考えている。

1. **現場主義**：実際にフィールドへ出て体験・実践することを大切にする。
2. **地域連携**：地域の実践者を講師として迎える、地域の団体と協働して授業を進める等、地域連携を大切にする。
3. **理論と実践**：現場での体験・実践の前後に座学の時間を設ける等、理論と実践のつながりを意識した活動を大切にする。

## 1-7 新学科の学校設定教科・科目

3年間で履修する全90単位のうち、10単位を新学科独自の「学校設定教科・科目」として設定する。各学年で検討している学校設定教科・科目は以下の通りである。

### ○1年生

「森のキホン」：年間2単位

森林および自然を理解するための基本的知識、特に森林の多面的機能を中心とした知識を習得させる。また、林業を含めた森林・自然と人間とのかかわりについての基礎的知識を習得させる。

### ○2年生

「森の恵み」：年間2単位

森林および自然から供給されている人間生活に必要な資源、また森林生態系によってもたらされる文化的な基盤や価値について理解し、その資源や価値を利用するための基礎的知識や技術を習得させる。

「持続可能な社会」：年間2単位

森林が支える生態系サービスは、地球環境の持続性にとって不可欠な存在である。本科目は、地球環境の持続に必要なエネルギーや環境問題の基礎知識を理解し、その課題解決にむけた基本的技術を習得させる。

### ○3年生

「森の未来創造」：年間4単位

「森のキホン」「森の恵み」「持続可能な社会」で学習した2年間の学びをもとに、林業や自然環境といった地球環境・地域産業の諸課題、また森林資源の新たな活用やサービス産出を自分達自身で考え、その実践・探究を行う。

### ○「総合的な探究の時間」との連携

「総合的な探究の時間」の活動においても、学校設定科目と関連した授業を行う。

### (授業案)

- ・ 1年生：木之本・伊香地域の理解、地域の方へのインタビュー方法、森林資源をテーマとしたビジネスプランの作成、ビジネスプラングランプリ等への参加、森林に関するキャリアを検討する座談会など
- ・ 3年生：プレゼンテーションや論文執筆方法といった情報をまとめる活動、推薦入試や総合型選抜に対応した進路指導など

### ○その他授業との連携

1年生「森の探究科」では、学校設定科目「森のキホン」の学びがより効果的となるよう、「生物基礎」のシラバスの見直しを行った。また「森の探究科」では「総合的な探究の時間」において、「森のキホン」で1学期に調査した山門水源の森で疑問に感じたことの調べ学習、2学期は次年度の「森の恵み」を見据えた身の周りの課題を解決する木工作品製作、3学期はこれまでの学習内容の総まとめとなる課題探究を行った。このように、「森の探究科」では「森のキホン」を普通教科や「総合的な探究の時間」と連動させ、新学科での学びが特殊にならず、インプット・アウトプットをより深めるカリキュラムとすることができた。また1年次の情報の授業で、メディアアートの内容を取り扱った。一見森林と関連性のないテーマであるが、将来的に森林への理解をアートとして表現することを狙ったものであり、このような先駆的な取組を実施できたことも今年度の成果である。また普通科では、2年次の「地理総合」の授業で、土倉鉱山跡地に生える森林のVR体験など他教科・他類型と連携した授業を行った。引き続き、国語・英語・数学・理科・社会の5教科、また体育や美術、家庭等の教科とも連携した授業を検討し、「総合的な探究の時間」においても獲得した視点やスキルと合わせて、3年次の「森の未来創造」やそれ以外での課外活動において発揮できるよう工夫を行っていく。

### 1-8 卒業後想定する進路

進学から就職まで幅広く、個々の生徒の希望に応じて対応する。

- ・ 進学希望者は、総合型選抜の機会を積極的に活用。今年度より進路指導課と協働し、個別指導プログラム「Go Beyond プログラム」をスタート。個別最適な学びと協働的な学びの充実を図り、文理を問わず4年生大学や専門学校等に進学できるよう準備を行う。
- ・ 就職希望者は、地元企業を中心に就職を支援する。
- ・ 地方公務員（初級）希望者には、試験対策講座を設ける。

## 「森の探究科」卒業生の想定進路（1/2）

- **森林科学、森林管理、森林の利活用に興味のある人**
  - ・ 森林組合、林業関連会社への就職
  - ・ 公務員（卒業後、進学後）
  - ・ 進学（森林科学、林学系の学部）
  - ・ 林業大学校（京都府立林業大学校、兵庫県立森林大学校、岐阜県立森林文化アカデミー、滋賀もりづくりアカデミーなど）
- **木の建築利用や多方面での利用に興味のある人**
  - ・ 建築関係、木材流通・加工関係の会社への就職
  - ・ 進学（建築学、森林科学系の学部）
- **自然・生物・環境に興味のある人**
  - ・ 進学（自然科学、農学、環境系の学部）
  - ・ 造園業等の自然に関わる会社への就職
  - ・ 公務員（進学後）
- **再生可能エネルギーやエネルギー政策に興味のある人**
  - ・ 進学（工学系や政策科学系の学部）
  - ・ 再生可能エネルギーや省エネルギーに取り組む会社への就職
  - ・ 公務員（進学後）
- **地域文化に興味のある人**
  - ・ 進学（地域文化、歴史に関する学部）
  - ・ 地元の伝統産業に関わる会社への就職

## 「森の探究科」卒業生の想定進路（2/2）

- **食文化に興味のある人**
  - ・ 食品の製造や流通に関わる会社への就職
  - ・ 進学（生活科学、食に関する学部）
- **地域振興、地域おこしに興味のある人**
  - ・ 進学（地域学、公共政策学、経済・経営学、商学、社会学系の学部）
  - ・ 公務員（進学後）
- **観光やレジャーに興味のある人**
  - ・ 観光・レジャー産業関連会社への就職
  - ・ 進学（観光学、経済学、経営学、商学系の学部）
- **森林の心身への影響や医療への活用に興味のある人**
  - ・ 進学（心理学、医学、看護学、薬学、化学関連の学部）
- **野山の薬草に興味のある人**
  - ・ 進学（薬学、医学、化学関連の学部）
- **森林の教育への利活用に興味のある人**
  - ・ 進学（教育、幼児教育に関する学部）
  - 参考：「やまのこ」、「木育」、「森のようちえん」等の取組
- **その他、上記以外の分野に興味のある人**
  - ・ 個別に相談を受けながら、希望に添うように援助して行きます。

## 1-9 実施教育課程

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
1年	国語			数学			英語			地理 歴史	理科	保健 体育		芸術	情報	森の キホン	総探													
2年	国語	数学			英語			地理 歴史	公民	理科	保健 体育	家庭	持続 可能な 社会	森の 恵み	L H R															
3年	国語	数学	英語	地理 歴史	理科			保健 体育	選択	森の未来創造		総探																		

※網掛け：「森の探究科」ならではの特色ある学び

※総探：総合的な探究の時間

※選択：生徒の希望進路等により選択

### 課題

- ・今年度は、学校設定科目「森のキホン」・「総合的な探究の時間」ともに新学期当初に計画した授業内容を実施することができた。しかし、学校設定科目「森のキホン」・「総合的な探究の時間」は実習が多く、さらに来年度より始まる学校設定科目「持続可能な社会」「森の恵み」も校外で実習を多く計画しているため、それぞれの科目でまとまった時間が必要となっている。実施にあたっては、担当教員や時間割の配置が重要となっており、学校内で「森の探究科」を含めたカリキュラムマネジメントについて議論が求められる。
- ・これまでの先行授業の中には、地域の方や事業者の方の依頼を踏まえて実施したものも多かった。また3年次の「森の未来創造」は、専門家や大学等の研究機関と連携予定である。これらの外部との連携にあたって、単年度にならず持続的なものとなるよう柔軟なカリキュラムの運用と体制づくりを丁寧に進めていく必要がある。

### 次年度計画への反映方針

- ・「森の探究科」所属生徒が2学年揃う次年度は、教科内で情報共有を細やかに行うなど連携を強めていきながら、スムーズなカリキュラム運用を行っていく。またその際、実習やアウトプットの時間の確保のため、他教科との連携も視野に入れながら綿密な授業計画を立てていく。

### 1-10 成果目標アンケート

実施日：令和8年1月8日（木）

対象：1年生 森の探究科（17名）

#### ■成果目標アンケートの結果

	質問項目	肯定的評価
質問1	今年度の学校魅力化事業において、様々な地域の方々と協働した学習をしました。これから「地域における課題と関わりたい」「地元で貢献したい」と思いましたか。	94.1%
質問2	これまでの「地域をフィールドとした学び」を通して、その学びを実生活や卒業後に応用してみたいと思えますか。	94.1%
質問3	「森のキホン」の授業や校外学習を通して、森林環境が身の回りの自然環境や環境問題に大きく関わっていることを理解できましたか。	100%
質問4	「森のキホン」の授業や校外学習を通して、身の回りの自然環境や環境問題に少しでも貢献したいと思えましたか。	94.1%

実施日：令和8年1月8日（木）

対象：3年生 自然環境類型（24名）

※先行実施授業を主に実施した学年でアンケート調査をした。

#### ■成果目標アンケートの結果

	質問項目	肯定的評価
質問1	今年度の学校魅力化事業において、様々な地域の方々と協働した学習をしました。これから「地域における課題と関わりたい」「地元で貢献したい」と思いましたか。	91.7%
質問2	これまでの「地域をフィールドとした学び」を通して、その学びを実生活や卒業後に応用してみたいと思えますか。	83.3%
質問3	（自然環境類型）「環境Ⅰ・Ⅱ」の授業や校外学習を通して、森林環境やエネルギーが身の回りの生活や文化に大きく関わっていることを理解できましたか。	95.8%
質問4	（自然環境類型）「環境Ⅰ・Ⅱ」の授業や校外学習を通して、地域における森林環境とエネルギーの問題に少しでも貢献したいと思えましたか。	91.7%

## (2) 管理機関による事業の実施体制や管理方法

本県では、令和4年度から概ね10年から15年先を見据えて、新しい時代を切り拓く人づくりのため、県立高等学校の在り方について全県の視野で基本的な考えを示す「これからの滋賀の県立高等学校の在り方に関する基本方針」を令和4年3月に策定した。令和5年3月には、この「基本方針」に基づき、全県の視野から各県立高等学校の魅力化の方向性を示す「滋賀の県立高等学校魅力化プラン」を作成し、各県立高等学校の魅力化の取組を推進している。

この「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和6年1月23日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、伊香高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。なお、今年度は伊香高等学校を含む地域連携重点校各校の具体的な取組内容とその課題、今後の計画について調査を実施し、取りまとめ結果を関係各校にて共有する形で実施した。

また、今後、児童・生徒数の大幅な減少が見込まれることや、高校授業料無償化の拡大、通信制高校への進学者の増加など、高等学校教育を取り巻く環境も大きく変化していることを受け、令和7年度に改めて県立高等学校の在り方について検討する附属機関「滋賀県立高等学校在り方検討委員会」を設置した。

伊香高等学校は、地域の専門家と協働し、森・川・里・湖がつながる県北部ならではの学びの実施と、地域をフィールドに「地域の人々や文化的資源」と「生徒の興味関心や進路希望」を掛け合わせた多様な地域探究の学びに取り組む地域連携重点校として、いち早く自然環境等の地域資源を活用した県北部ならではの学びに取り組み、普通科の特色化に向けたカリキュラム等の検討を行っており、かつ関係機関や市町等の協力体制など取り組みやすい条件が整っていること等から、新学科設置に向けた研究を進め、本年度「森の探究科」の設置に至った。

事業の実施にあたっては、高校教育課魅力ある高校づくり推進室が事務局を担当し、室長1名、参事1名、主担当として教育企画主事1名、主任主事1名をその任に充て、学校の支援を行ってきた。適宜、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を行うとともに、3回開催した運営指導委員会では、今年度入学した1期生の状況や事業の進捗状況、成果をその都度確認し、外部有識者による指導・助言・評価を行うことで、以後の事業運営に役立ててきた。

令和8年1月に実施した中学校等卒業予定者の進路志望調査では、新学科を含めた伊香高等学校への志望者数は前年同期調査と比較してやや増加した。長浜市内外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化等を分析するとともに、令和8年度から実施する全国募集も踏まえ、新学科の広報や魅力づくりについて長浜市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和8年度以降の周知活動に努める。

### ■協議や先行実施授業等への参加状況

活動日程	活動内容
R7. 4/ 1	・運営指導委員を委嘱
R7. 4/21	・本年度就任の運営指導委員永井委員へ事業説明 ・今後の取組について学校と協議
R7. 6/ 7	・新学科説明会
R7. 7/24	・第1回運営指導委員会 ▶ 最新情報の共有、今後に向けた課題、方向性に関する指導・助言

R7. 8/ 6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和7年度「地域と伊香高のミライ創造コンソーシアム」第1回理事会出席</li> <li>▶ 新学科開設後の活動報告および今後の課題について</li> </ul>
R7. 8/23	<ul style="list-style-type: none"> <li>・滋賀の私立学校展 2026 にて学校案内配布（草津会場）</li> </ul>
R7. 8/30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・滋賀の私立学校展 2026 にて学校案内配布（彦根会場）</li> </ul>
R7.12/16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第2回運営指導委員会</li> <li>▶ 最新情報の共有、今後の取組に関する指導・助言</li> </ul>
R8. 2/ 5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・庁内協議</li> <li>▶ 全国募集における今後の方針等について</li> </ul>
R8. 3/ 13	<ul style="list-style-type: none"> <li>・令和7年度「地域と伊香高のミライ創造コンソーシアム」第2回理事会出席</li> <li>▶ 今年度の活動内容の報告および次年度に向けての課題について</li> </ul>
R8. 3/22	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伊香高等学校魅力化シンポジウム</li> <li>▶ 成果発表</li> <li>・第3回運営指導委員会</li> <li>▶ これまでの取組に関する総括的な指導・助言</li> </ul>

### 課題・次年度計画への反映方針

伊香高等学校は、地域におけるフィールドワークをはじめ、探究的な学びを数多く実施されており、新学科での学びがより充実したものとなるよう、取組を推進する上での諸課題の解決に向けた協議を適宜行うとともに、生徒の成果発表等の学習活動に立ち合い、成果や改善点を校長やコーディネーター等と共有しながら進めていく。

### (3) 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

本校では令和4年度より地域連携実践モデル校として地域と連携した取組を進めてきた。今年度は、いよいよ新学科「森の探究科」が開設となり、新たなカリキュラムによる学習と地域と協働した活動が始まった。大卒では昨年度までの準備体制を引き継ぎ、次のような取組を実施した。

#### ■校内での取組

- ・校内校務分掌において、研究事業推進の事務局として、教務課内に森の探究科推進室（プロジェクトチーム）を組織した。室長、県コーディネーター、市コーディネーターを中心に、教務主任、カリキュラム開発担当、進路主任、各類型主任が所属する。
- ・昨年度までの室長が森の探究科長に就き、当該クラス（森の探究科1年1組）の担任として、プロジェクトチームとも連携しながら予定していたカリキュラムの実施とクラス経営にあたった。
- ・コーディネーターを校務分掌に位置付け、役割を明確化するとともに、職員室内に専用のデスクを配置した。
- ・森の探究科推進室のメンバーと管理職は、週1回60-90分程度の進捗確認会議を実施し、情報共有と実施事項を確認した。
- ・地域の実践者をカリキュラムアドバイザーとして任命し、地域と連携したカリキュラム内容構築に向け専門的助言を受けた。
- ・職員会議等にて事業内容の共有を図るとともに、森の探究科に関連した教員向けの研修を年2回実施した。

## ■運営指導委員会の開催

- ・運営指導委員会を年3回実施。大学教員、森の探究科に関連した実践者、地域の自治体・事業者等からなる委員より、助言を頂いた。
- ・助言の内容を踏まえ、森の探究科のカリキュラム内容や実施方法を検討した。

## ■地域と伊香高のミライ創造コンソーシアムの開催

- ・令和6年3月に発足したコンソーシアムは、今年度8月に理事会を開催し、新学科開設の状況について情報共有をはかった。理事会では、行政、地域、保護者、同窓生など様々な立場から意見や助言をいただき、今後の地域連携の在り方について検討した。
- ・「生徒募集専門チーム」の会議を2回開催し、特に次年度から始まる全国募集での入学生や県内遠方からの通学生の下宿体制（木之本留学）について、食事、生活場所、生活全般のサポート方法を議論した。

## ■木之本留学サポートの会

令和7年度より、遠方から親元を離れて伊香高校に入学する生徒を対象とした「木之本留学」が開始された。「木之本留学」では、遠方生徒が安心して高校生活を送ることができる環境整備を目的として、地域の諸団体が主体となり「木之本留学サポートの会」を立ち上げ、「まち全体が寮！」をコンセプトに支援を行っている。具体的には、住まいの提供や食事面での支援を通じて、生徒の生活基盤を地域全体で支える体制を構築している。また、木之本留學生には地域行事への参画を促し、地域住民との交流を深める機会を設けている。これにより、留學生にとって木之本が「第二のふるさと」となることを目指すとともに、将来的には地域の担い手として成長することを期待している。

### ■サポートの内容



**食事の支援**

○ 勉学や部活に専念し、健康で学生生活が送れるよう、「木之本のお母さんグループ」の方々が中心となり、平日朝・夕の2食を提供します。



**見守り支援**

○ 安心して木之本で学生生活を送れるよう、サポートの会が生徒および保護者の相談窓口となります。

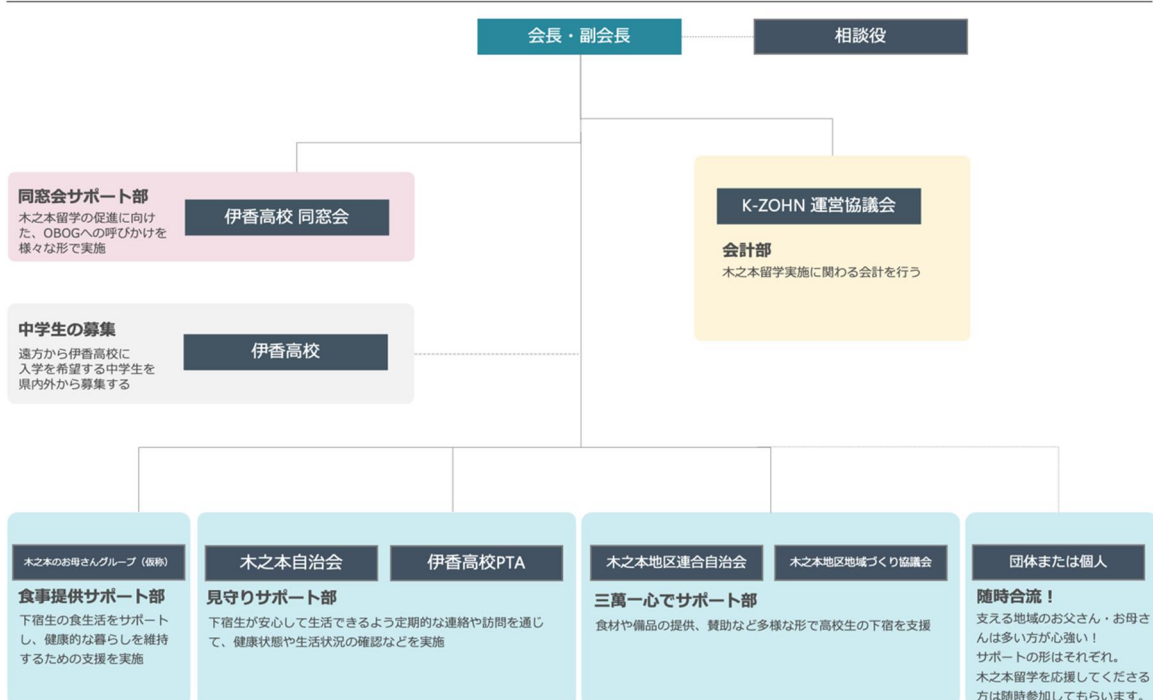


**住まいの支援**

○ サポートの会への理解があり、地域で空き家や空き部屋をお持ちの家主をご紹介します。



木之本留学サポートの会 組織図 (R.7年3月10日時点)



サポートの会の運営には、地域の方々と伊香高校の地域連携コーディネーター（長浜市地域おこし協力隊）が関わっている。令和8年度から始まる、森の探究科での全国生徒募集に備え、地域の関係者と受け入れ体制を議論している。

## 課題

- ・令和4年度から実施してきた先行授業の成果もあり、新学科への移行は概ね滞りなく進み、学校設定科目「森のキホン」のカリキュラムもほぼ予定通り新学科のコンセプトに沿った取組を展開することができた。今後は、2年次の学校設定科目「森の恵み」「持続可能な社会」について、より具体的な授業計画の見直しと、地域の外部講師との授業内容のすり合わせが必要である。また、新学科設置から2年目となる令和8年度は、1年生からのタテの積み重ねや、教科を超えたヨコの連携など、全体のカリキュラム・マネジメントを推進させ、学びや進路につながっているか、継続的に成果を見出す必要がある。
- ・支援事業終了後、コーディネーターが担ってきた業務をどのように校内の分掌体制に位置づけるかが、大きな課題となっている。
- ・校内ではプロジェクトチームが中心となり定期的な活動が実施できているものの、校外との連携については組織的な動きがまだ十分にできていない。コンソーシアムの専門チームの動きを中心に連携を深めたい。
- ・木之本留学サポートの会は、人材・資金・住まいの確保といった面で課題を抱えており、今後の受け入れ拡大に向けた体制整備が急務となっている。しかし、地域、学校、県、市が遠方生受け入れのため、それぞれがどのような役割を担い、どのように連携すると良いかが明確化されておらず、学校が実施する遠方生受け入れに対して、合意形成のないまま、地域が多なる負担を強いられている状況にある。

## 次年度計画への反映方針

- ・森の探究科のカリキュラムマネジメントでは、PDCAサイクルを活用し、さらに良いものへと改善する。また、令和8年度・令和9年度に実施する科目についても、実施計画を具体化する。
- ・教科や類型を横断するカリキュラムマネジメントについては、引き続き既存の学習指導委員会などの組織で対応する。
- ・令和8年度から全国募集を開始することを見据え、今年度を実施してきた県内外への広報活動について、より効果的なものになるよう改善を図る。
- ・校外連携については、コンソーシアムの理事会と専門チームの運営を通じて、情報共有と協議を行う。
- ・木之本留学サポートの会については、長浜市のバックアップのもと下宿体制整備や全国生徒募集を主眼においた地域おこし協力隊の配置に加え、総務省の集落支援員制度を活用した、「地域活力プランナー」を設置し、下宿体制推進における事務局機能の強化を計る。また、コンソーシアムの理事会や専門チームでの議論を通じて、遠方生受け入れにおける、地域、学校、県、市の連携方法を模索する。

#### (4) 運営指導委員会の体制および取組

運営指導委員会では、活発な議論が行われ、1期生の状況や授業、フィールドワークの様子、カリキュラム、全国募集の開始に向けた現状と課題、持続可能性等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただいた。

##### ■運営指導委員会の体制

氏名	所属
平岡 俊一	滋賀県立大学環境科学部 准教授
岳野 公人	滋賀大学教育学部 教授
山本 綾美	里山実験室 HareMori 森づくりコーディネーター
三浦 豊	森の案内人 合同会社 NiwaMori 代表社員
高橋 康之	高橋金属株式会社 代表取締役社長
久木 裕	株式会社バイオマスアグリゲーション 代表取締役
永井 正彦	長浜市未来創造部 担当部長兼北部政策局長

##### ■運営指導委員会の取組

	開催日	内容
第1回	R7. 7/24	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最新情報の共有、今後に向けた課題、方向性に関する指導・助言               <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 事業の成果と今後に向けた課題・方向性</li> <li>▶ 今年度の取り組みと計画について</li> <li>▶ 全国募集の開始に向けた現状と課題について</li> <li>▶ 留学サポートの現状と課題について</li> <li>▶ 事業終了後の森の探究科カリキュラムの継続性 など</li> </ul> </li> </ul>
第2回	R7.12/16	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最新情報の共有、今後の取組に関する指導・助言               <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 1期生の様子について</li> <li>▶ 森の探究科の進路について</li> <li>▶ 広報活動について</li> <li>▶ 下宿のサポート体制の整備について</li> <li>▶ 県外募集および下宿に関する他県高校の取り組み状況調査について など</li> </ul> </li> </ul>
第3回	R8. 3/22	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度の取組に関する総括的な指導・助言               <ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 伊香高等学校魅力化シンポジウムについて</li> <li>▶ 次年度の取組について など</li> </ul> </li> </ul>

##### 課題・次年度計画への反映方針

年3回開催して、事業の進捗状況や成果、課題等を確認し、適宜、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てるよう努めてきた。1期生の授業の参観は日程的に実現できなかったものの、第3回開催日を「伊香高等学校魅力化シンポジウム」と合わせることで、生徒の様子も見ていただき、指導・助言をいただくことができた。

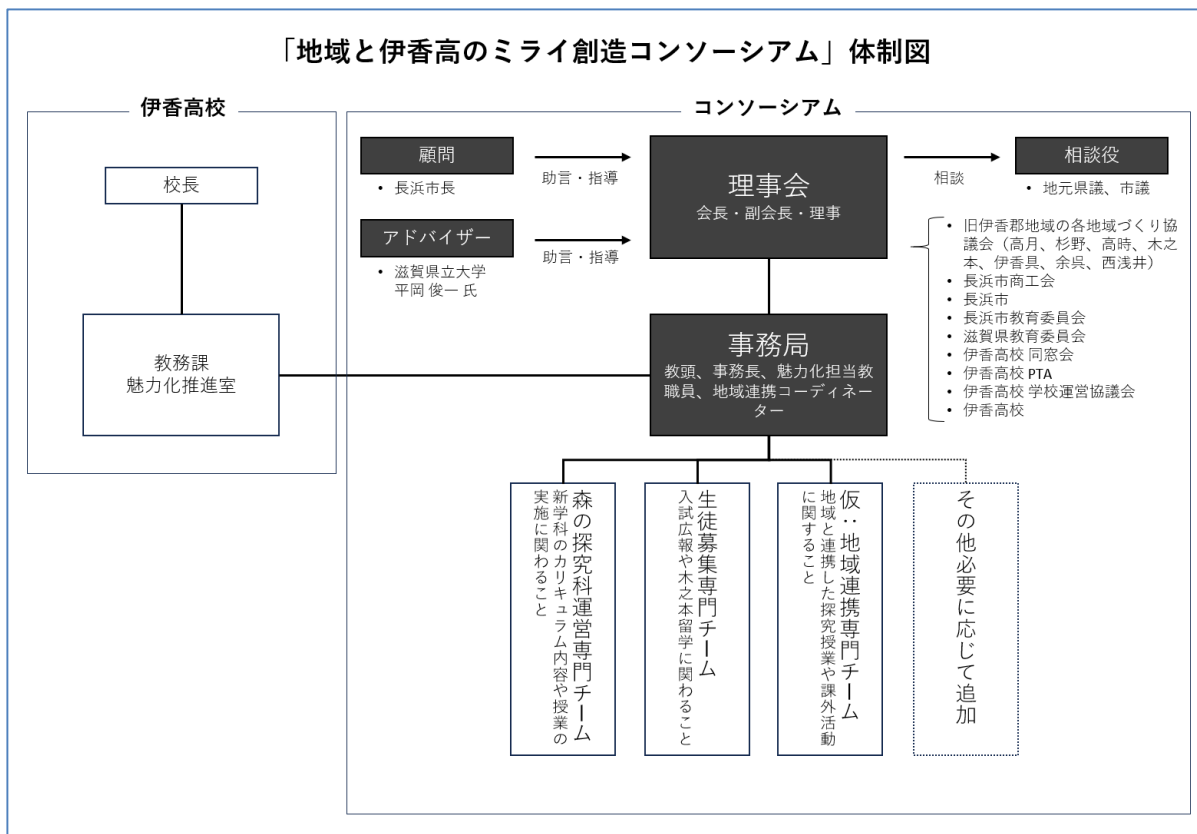
## (5) コンソーシアムの体制および取組

伊香高校の魅力化活動の目標である「伊香高校と地域がともに未来を創る」ことを実現するため、高校と地域の諸団体が連携するための基盤となる組織としてコンソーシアムを位置付ける。そして、コンソーシアムの運営を通して、「高校を核とした地方創生」の実現を目指す。

具体的には：

- ・学校と地域の協働に関するビジョンや学校経営の基本方針等について協議・共有し、必要に応じて承認等を行う。
- ・「生徒たちがどのように育ってほしいのか、高校として何を實現していくのか」という、目標や活動方針が話し合われる場として運営する。
- ・また、その議論の前提として、「高校の所在する伊香地域がどのようにあってほしいか」という地域の未来についても思いが共有される場にする。

コンソーシアムの体制は、全体の方向性を検討する「理事会」と、個別の事案について検討する「専門チーム」の2階層制とする。



### ■理事会参画団体（敬称略）

- ・旧伊香郡地域の各地域づくり協議会（高月、杉野、高時、木之本、伊香具、余呉、西浅井）
- ・長浜市商工会
- ・長浜市
- ・長浜市教育委員会
- ・滋賀県教育委員会
- ・伊香高等学校同窓会
- ・伊香高等学校 PTA
- ・伊香高等学校学校運営協議会
- ・伊香高等学校

「森の探究科運営専門チーム」では、森の探究科のカリキュラムと授業の実施に関わることについて議論した。「生徒募集専門チーム」では、入試広報や木之本留学に関わることについて議論した。また、今後「地域連携専門チーム」で、地域と連携した探究授業や課外活動に関することを議論し、必要に応じて他の専門チームを設置していく。各専門チームでは、人数や参加団体を規約で規定せず、柔軟な運営を行っており、その活動内容は理事会にて報告することにする。今年度は、8月6日に第1回理事会を行い、開設後の新学科の取り組み状況について情報共有をはかった。

### 課題

- ・コンソーシアム参画団体が多いため、会議以外の場においても各団体とコミュニケーションを意識的にとっていく必要がある。
- ・コンソーシアムと学校運営協議会の位置付けが重複する部分があるため、役割の明確化が必要である。

### 次年度計画への反映方針

- ・地域の団体との連携において、特に地元自治体とどのような協力関係で実施していくか協議していきたい。
- ・コンソーシアムと学校運営協議会については、将来的に統合していくことを検討する。時期などを協議していく。

## (6) コーディネーターの配置および活動内容

令和7年度は、本事業に関連するコーディネーター3名を配置した。県から中山氏と中井氏、長浜市からは地域おこし協力隊の制度を活用し副島氏が勤務した。さらに6月からは、副島氏を県からのコーディネーターとしても任用し、特に全国募集開始に伴う遠方生徒受け入れ体制の構築を担当していただいた。

3名は校務分掌において、教務課内の「森の探究科推進室」に所属し、職員室内にデスクを置いて、半常駐型で勤務し、一体的に事業を推進することに努めた。

中山氏は、主に学校外部との関係構築や事業推進を担当、中井氏は探究型授業の実施に向けたカリキュラム構築や地域連携についての検討を担当し、副島氏は森の探究科の「総合的な探究の時間」と関連させた事業推進、広報、および遠方生徒受け入れ体制の構築を担当した。3名は定例会議などを通じて密に情報交換を行い、一体的に事業を推進することに努めた。

中山氏は主に事業全体の企画立案やコーディネートに助言を行い、コンソーシアムマネージャー的な役割として、昨年度のコンソーシアム設立に多大な貢献をした。今年度は、コンソーシアムがすでに設立されていることから、昨年度ほど諸機関との調整に時間をかける必要がなかったため、活動時間は理事会の実施される時期の前後に集中し、月3日程度であった。

### ■主な実施事項

- ・コンソーシアムの運営と活動、その内容の検討
- ・コンソーシアム運営のための各主体との調整、会議の運営
- ・その他事業全体に対する俯瞰的視野からの助言

中井氏は、長浜市における様々な人脈を活かし、教員とともに「総合的な探究の時間」における探究的な取り組みの検討や企画立案・実施を担い、フィールドワーク先の選定や関係機関との調整、生徒に対する実習指導などに貢献した。活動時間は月3～4日程度であった。

## ■主な実施事項

- ・教員や地域、専門家と連携した新学科コンセプトやカリキュラム検討
- ・「総合的な探究の時間」の内容検討、実施、フィールドワークでの関係機関との調整

副島氏は主に学校内で活動し、各担当教員と連携しながら、森の探究科のカリキュラム検討に関連する「総合的な探究の時間」の授業や、地域の各種団体と連携した授業を実施し、ウェブサイトや SNS を活用した情報発信も行った。また全国募集に向けた広報や下宿生受け入れのための準備調整を担った。

6月以降、長浜市の委嘱する地域おこし協力隊としての活動のみならず、県コーディネーターとしても活動し、特に全国募集関連の活動では、協力隊業務に該当しない下宿体制整備に関する業務と全国に向けた情報発信を担当した。

ほぼ伊香高校に常駐し、週5日程度活動した。

## ■主な実施事項

- ・「森の探究科」に関連した「総合的な探究の時間」の授業内容検討、実施支援
- ・ウェブサイトや SNS、季刊の紙媒体「伊香高通信」の発行などの広報活動
- ・全国募集に向けた広報や下宿体制確立に向けた準備
- ・コンソーシアム「生徒募集専門チーム」に関する関係機関との調整
- ・「木之本留学サポートの会」の運営と調整

## ■コーディネーターの勤務記録

中山コーディネーター

月	時間数	主な取組事項
4月	—	(活動実績なし)
5月	—	(活動実績なし)
6月	—	(活動実績なし)
7月	4	・コンソーシアムに関する校内打ち合わせ
8月	6.7	・コンソーシアム・生徒募集に関する会議
9月	—	(活動実績なし)
10月	—	(活動実績なし)
11月	—	(活動実績なし)
12月	—	(活動実績なし)
1月	—	(活動実績なし)
2月	1.3	・コンソーシアムに関する校内打ち合わせ
3月	7.3	・コンソーシアム会議・魅力化シンポジウム活動サポート等

中井コーディネーター

月	時間数	主な取組事項
4月	18	・カリキュラム打ち合わせ ・地域関係者との打ち合わせ
5月	8.8	・授業内容の検討
6月	12.8	・授業打ち合わせ ・学校説明会対応
7月	6.3	・授業担当教諭打ち合わせ ・カリキュラム打ち合わせ

8月	8.5	・地域の方との授業打ち合わせ ・フィールドワーク先下見
9月	8.0	・取材対応
10月	10.0	・授業サポート ・講師打ち合わせ
11月	25.0	・講師打ち合わせ ・授業資料作成
12月	3.5	・田上山へのベンチ設置活動
1月	3.2	・授業打ち合わせ
2月	27.5	・授業打ち合わせ、ワークショップ準備・サポート
3月	12.3	・イベントに向けての生徒活動サポート

#### 副島コーディネーター

月	時間数	主な取組事項
4月	180	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・学校広報・学校パンフレット作成諸調整
5月	180	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・学校広報・学校パンフレット作成諸調整
6月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・学校広報・学校紹介動画作成
7月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・特別時間割 授業調整、設計、実施 ・学校広報・中学生体験入学準備
8月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計・課外活動の伴走 ・魅力化研修にむけた準備・学校広報・体験入学準備、実施
9月	180	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・課外活動の伴走・学校広報
10月	180	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・課外活動の伴走・学校広報 ・全国募集に向けた諸準備
11月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・課外活動の伴走・学校広報 ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備
12月	190	・「総合的な探究の時間」調整、設計、実施 ・特別時間割 授業調整、設計、実施 ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備 ・学校広報・事業報告書作成
1月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計 ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備 ・学校 SNS・新学科広報方針調整・事業報告書作成
2月	200	・「総合的な探究の時間」調整、設計・学校 SNS ・全国募集に向けた諸準備 ・下宿体制整備のための諸準備 ・新学科広報紙作成・事業報告書作成

3月	200	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度「総合的な探究の時間」設計</li> <li>・全国募集に向けた諸準備</li> <li>・下宿体制整備のための諸準備</li> <li>・学校 SNS・次年度学校案内作成</li> </ul>
----	-----	--

#### 課題

- ・森の探究科の立ち上げ、カリキュラム検討・実施、既存の普通科も含めた学校全体の魅力化、下宿体制の整備、全国募集に向けた準備など魅力化事業が進んでいくにつれ、教員・コーディネーターの関わる業務が増え、範囲も多岐にわたっている。事業期間終了後を視野に、役割分担と注力分野を決める必要がある。

#### 次年度計画への反映方針

- ・教員とコーディネーターの担当分野や範囲を明確にする。「総合的な探究の時間」については、教員主導で実施し、できるだけ多くの教員を巻き込みながら実施するようにする。また、既存普通科のカリキュラム開発・実施についても教員主導で実施する。
- ・下宿体制の確立については、地域主体で実施できるよう、教員ではなくコーディネーターが立ち上げに従事する。

### (7) 新学科の設置及び設置に向けた検討状況・関係者への説明の実施状況

#### ■伊香高等学校

- 令和7年度は、開設した新学科について県内中学生・中学校向けの広報活動を行った。
- ・県内市町立中学校 95 校に対して、新学科の概要を説明。県内市町教育委員会、全中学校に新学科資料を配付
  - ・湖北・湖西地域の中学校と体験入学参加中学校への訪問
  - ・北部地域中学校（18 校）の進路担当者との情報交換
  - ・市内中学校 2 年生保護者および生徒に体験入学の案内を市教委経由でデータ配布

昨年度に引き続き、地域向けの広報活動を以下の通り実施した。

- ・季刊発行の「伊香高通信」を 4 号（第 9 号～第 12 号）作成し、旧伊香郡地域の自治会に配布した。地元自治会へは全戸配布、その他地域は自治会内での回覧をお願いした。主に地域連携や新学科に関した内容を掲載している。
- ・公式フェイスブックとInstagramのアカウントにて、地域の方向けに学校の活動や日常風景を発信した。
- ・県内遠方から入学希望の中学生を受け入れる下宿先サポーターを募集するパンフレットを作成し、木之本自治会に全戸配布を行った。

また、2026 年 3 月 22 日には、主に地域の方を対象とした、第 4 回伊香高シンポジウムを実施した（生徒による活動報告や学校魅力化、木之本留学構想の内容共有、特別講演など）。

コンソーシアムの理事会を 2 回開催し、以下の団体に対して学校の取組について説明した。

- ・旧伊香郡地域の各地域づくり協議会（高月、杉野、高時、木之本、伊香具、余呉、西浅井）
- ・長浜市商工会
- ・長浜市
- ・長浜市教育委員会
- ・伊香高校学校運営協議会

以下の発表機会に生徒が参加し、探究的な取組について発表した。

- ・ R7.6/7：滋賀県主催「新学科説明会」
- ・ R7.8/3：関西万博出展（関西パビリオン催事「いのち育む”水”のつながり WEEK」）
- ・ R7.11/29：ながはまコミュニティカレッジ
- ・ R8.2/11：北の近江振興 高校生サミット  
（発表テーマ「滋賀県北部の河川上流域に関する生態系調査」）

以下の発表機会に参加し、魅力化・新学科の取組について発表した。

- ・ R7.4/16：立命館大学
- ・ R7.6/19：虎姫学園 進路研修会
- ・ R7.7/9：立命館大学
- ・ R7.9/12：普通科改革支援事業 指定校発表会
- ・ R7.9/18：長浜ライオンズクラブ定例会 登壇
- ・ R7.10/27：学校運営協議会
- ・ R7.11/30：みんなでつながる広場&つくる未来展
- ・ R7.12/12：学校運営協議会

以下のイベントにて、新学科 PR ブースを設置した。

- ・ R7.7/26：地元自治会夕涼み横丁
- ・ R7.7/27：あちかまの里 道の駅まつり
- ・ R7.8/23～8/25：木の本地蔵大縁日
- ・ R7.10/26：あちかまの里 道の駅まつり
- ・ R7.12/6：たかときクリスマスマーケット
- ・ R8.3/8：あちかまの里 道の駅まつり

以下の訪問・取材対応を行った。

- ・ 滋賀県知事 来校（5/23）
- ・ 滋賀県教育委員会教育長 来校（6/9）
- ・ 京都新聞（7/20 掲載）
- ・ 滋賀県議員 来校（7/22）
- ・ 奈良教育大学 河本准教授 来校
- ・ 嘉田参議院議員 来校（9/11）
- ・ 「ながおし！長浜で推してる人たち」（9/22 ウェブサイト掲載）
- ・ 新潟県立十日町高等学校 来校（12/11）
- ・ 岐阜県立羽島高等学校 来校（2/5）

その他、以下の項目を実施した。

- ・ 中学3年生向けの体験入学を昨年より1回増やし、年3回実施。特に、第3回体験入学は、新学科の紹介に注力し企画した。地域の森林に関する専門家をお招きして本校裏山の散策ツアーと焚火体験を行った。
- ・ 県内の自然環境系機関や施設をまわり、ポスター掲示を依頼した。

また今年度から「地域みらい留学」に参画。HPに伊香高校に関する情報を掲載するほか、東京・大阪の対面フェスに4日参加、オンライン説明会は16回参加し、262名の中学生と

接点を持つことができた。その結果、県外生 19 名が本校訪問に至った。具体的には、以下のような説明会を実施した。

- ・ 5/31 フェス in オンライン\_ルームプレゼン 11:30-12:15  
【森の探究科】伊香高校学校個別説明会① (14:00-14:30)  
【森の探究科】伊香高校学校個別説明会② (15:00-15:30)
- ・ 6/11 テーマ別合同学校説明会 | うちの高校の”特徴的な学科・コース” (19:00-20:00)
- ・ 6/21 フェス in 東京 1 日目 (10:00-17:00)
- ・ 6/22 フェス in 東京 2 日目 (9:30-15:00)
- ・ 6/24 【下宿先から配信！】伊香高校 森の探究科 学校個別説明会
- ・ 7/6 フェス in オンライン\_ルームプレゼン (11:30 - 12:15)  
フェス in オンライン\_ルームプレゼン (14:00 - 14:45)  
【森の探究科】伊香高校学校個別説明会① (15:00-15:30)  
【森の探究科】伊香高校学校個別説明会② (16:00-16:30)
- ・ 7/12 フェス in 大阪 1 日目 (10:00-17:00)
- ・ 7/13 フェス in 大阪 2 日目 (9:30-15:00)
- ・ 8/3 フェス in オンライン\_ルームプレゼン  
【万博会場から配信！】伊香高校 森の探究科 学校個別説明会①  
【万博会場から配信！】伊香高校 森の探究科 学校個別説明会②
- ・ 9/2 テーマ別合同学校説明会 | ここにしかない自然環境 (19:00-20:00)
- ・ 9/27 フェス in オンライン\_ルームプレゼン  
【森の探究科】伊香高校学校個別説明会① (14:00-14:30)  
【森の探究科】伊香高校学校個別説明会② (15:00-15:30)

接点	参加者数
事務局主催オンライン説明会 (合計7回)	168
学校個別オンライン説明会 (合計9回)	36
対面フェス (東京)	18
対面フェス (大阪)	40
<b>接点を持った生徒数 累計</b>	<b>262</b>
8/19 第一回県外体験入学申込者数	9
10/11 第二回県外体験入学申込者数	2
11/2 第三回県外体験入学申込者数	6
個別現地訪問	2
<b>現地訪問者数 累計</b>	<b>19</b>



第10号  
(8月発行)

**GO BEYOND**  
プロジェクト活動レポート

2025.08.19  
伊香高通信 第10号

この夏運動した、伊香高生の様子をお伝えします

**1 【森の探究科】大坂・関西方面に出展**  
森の探究科の探究活動が、関西・近畿圏で開催された「2025年夏の森の探究科」に出展しました。今回は、森の探究科探究活動の成果を、ワークショップや展示で紹介しました。ワークショップでは、森の探究科の探究活動で得た知識や技術を、参加者の皆さんに伝えるための資料を作成し、伊香高の森や川の様子を、写真やイラストで紹介しました。

**2 【野球部】応援ありがとうございました！**  
夏の全国高校野球選手権大会3回戦が7月22日、23日と開催されました。伊香高野球部は、高校野球の歴史を伝えるために、応援活動を行いました。応援活動は、選手たちを応援するだけでなく、試合の盛り上げや、観客の安全確保にも貢献しました。応援活動を通じて、選手たちとの絆を深め、高校野球の魅力を伝えることができました。

伊香高 野球部 2025年大会成績  
7月22日 対 徳島県立三好高等学校 1-1  
7月23日 対 徳島県立三好高等学校 1-0  
7月24日 対 徳島県立三好高等学校 1-0

**3 経路・森林・防災対策 特別委員会 訪問**  
経路・森林・防災対策特別委員会が、伊香高を訪れました。委員会の皆さんは、伊香高の森や川の様子を、写真やイラストで紹介しました。委員会の皆さんは、伊香高の森や川の様子を、写真やイラストで紹介しました。

**4 夕涼み横丁に出演！**  
7月26日、夜更草音楽祭で夕涼み横丁に出演しました。伊香高の森や川の様子を、写真やイラストで紹介しました。

**5 【森の探究科】産学連携 ワークショップを実施**  
7月18日、産学連携の森の探究科ワークショップを実施しました。産学連携の森の探究科ワークショップは、産学連携の森の探究科ワークショップを実施しました。

**6 【地域文化コース】写真をテーマとしたまち散策を実施**  
7月18日、地域文化コースの写真をテーマとしたまち散策を実施しました。まち散策を通じて、地域の歴史や文化を学ぶことができました。

地域の皆さんへの思いと支えのもと、この今号までいろいろな活動を実施することができました。また、おかげさまで、伊香高通信の発行回数も50回になりました。これからも、地域と伊香高の絆を大切に続けてまいります。

第11号  
(12月発行)

**GO BEYOND**  
プロジェクト活動レポート

2025.12.08  
伊香高通信 第11号

伊香高生や高校に関する最新の活動をお届けします！

**1 田上山麓に伊香高生製作のベンチを設置**  
今年夏、月から始まった田上山麓のベンチ製作プロジェクトが、今年も完了しました。伊香高生が製作したベンチが、田上山麓に設置されました。ベンチの設置は、田上山麓の自然を存続させるための取り組みの一環として行われました。

**2 【柔道部】応援ありがとうございました！**  
柔道部が、今年も全国大会に出場しました。柔道部の皆さんは、大会で活躍し、多くの賞状やメダルを獲得しました。柔道部の活躍を通じて、柔道部の魅力を伝えることができました。

伊香高 柔道部 2025年大会成績  
11月1日 対 徳島県立三好高等学校 1-0  
11月2日 対 徳島県立三好高等学校 1-0  
11月3日 対 徳島県立三好高等学校 1-0

**3 たかとき クリスマスマーケットに出展**  
12月1日に開催された「たかときクリスマスマーケット」に出展しました。伊香高の森や川の様子を、写真やイラストで紹介しました。

**4 【3年 総合的な探究の時間】持続可能な地域づくりとは？**  
3年生の総合的な探究の時間では、「持続可能な地域づくりとは？」というテーマで、持続可能な地域づくりについて学びました。

**5 【森の探究科】主役見学を実施しました**  
森の探究科の主役見学を実施しました。森の探究科の主役見学を通じて、森の探究科の魅力を学ぶことができました。

**6 森の探究科の取り組みを文庫省で報告しました**  
森の探究科の取り組みを文庫省で報告しました。文庫省での報告を通じて、森の探究科の魅力を伝えることができました。

第12号  
(1月発行)

**GO BEYOND**  
プロジェクト活動レポート

2026.01.22  
伊香高通信 第12号

伊香高高校魅力化シンポジウム  
3月22日(日)開催！

伊香高高校魅力化シンポジウムは、伊香高の魅力を伝えるための取り組みの一環として行われます。シンポジウムでは、伊香高の森や川の様子を、写真やイラストで紹介し、伊香高の魅力を伝えることができます。

日時・会場  
2026年3月22日(日) 13:00-15:30 (受付12:30-)  
開催場所 水之本スタジアムホール  
申し込み 不要です。当日直接会場へお越しください。

■プログラム  
第一部 伊香高のイメージ  
伊香高の魅力  
伊香高の森や川の様子  
伊香高の歴史や文化  
伊香高の未来  
第二部 伊香高の魅力  
伊香高の森や川の様子  
伊香高の歴史や文化  
伊香高の未来

最後に校歌を合唱します！みなさまご来場、お待ちしております。

**1 図書館にびわ湖材を使用した卓上書架が納入されました**  
図書館に、びわ湖材を使用した卓上書架が納入されました。びわ湖材を使用した卓上書架は、自然素材を使用した美しい書架です。

**2 トークフォークダンスを実施しました**  
トークフォークダンスを実施しました。トークフォークダンスを通じて、伊香高の魅力を伝えることができました。

**3 「メディアアート」ワークショップを実施**  
「メディアアート」ワークショップを実施しました。メディアアートを通じて、伊香高の魅力を伝えることができました。

**4 森林の多様性と遷移について学びました**  
森林の多様性と遷移について学びました。森林の多様性と遷移を通じて、伊香高の魅力を伝えることができました。

**5 漆湖の川づくりフォーラムにて山形水明賞を受賞しました**  
漆湖の川づくりフォーラムにて山形水明賞を受賞しました。山形水明賞を通じて、伊香高の魅力を伝えることができました。



新学科PRポスター



下宿サポーター募集チラシ

**伊香高校** 遠方から入学する  
**高校生へのサポート**  
をしてくださる方を探しています

伊香高校では令和4年度から「森の探究科」を新設します。滋賀県南部の中学生からも「森の探究科」に入学したい！」という声が届いています。そこで、遠方から入学してくる生徒の生活をサポートして下さる方を探しています。  
本企画を通して、地域の方々と生徒を繋ぐのが、勉強や部活動に積極的に取り組める環境づくりにご協力をいただけると幸いです。

例えば、このような形でご協力頂ければと思います

下宿生のために  
朝・夕食を提供できる

生徒が自立した生活をするための  
サポート・見守り

1部屋個室を  
提供できる

高校生へのサポートをご検討くださる方は、  
**裏面**をご参照いただき、伊香高校までご連絡ください。

GO BEYOND 超えてゆけ！  
**滋賀県立伊香高等学校**

**高校生へのサポート内容 具体例**

**食事の支援**  
食生活の相談（三食、朝夕食、夕食のみ、平日のみ等、様々なパターンがあります。また数名の方で交代しながらのご支援も想定しています。）

**生活場所の支援**  
空いている部屋の貸し出し、障がいや母体の1室、現在使われていない浴室 等  
高校生が安心して下宿生活ができる個室を提供していただければと考えています。

**生活全般への支援**  
親元を離れて生活する高校生の見守り、声かけ、何かあった時の相談役 等  
※ご質問のある方やご関心を持たれた方々は、お気軽にお問い合わせください。  
※サポート内容・費用面などの詳細については、個別に相談させていただきます。

**ご協力を検討いただける方へ**

高校生へのサポートについて、ご協力を検討していただける方はお近くのQRコードから入力いただくか、お問い合わせ窓口までお電話もしくはFAXにてご連絡ください。  
(FAXの場合は、こちらのご案内裏面をそのまま返信してください。)  
こちらから折り返し、ご連絡を申し上げます。

お名前  
お電話番号  
ご協力頂ける  
内容やご質問等

**◆お問い合わせ窓口**  
担当：地域と伊香高のミライ創造コンソーシアム事務局（伊香高校 教頭 中川）  
電話：0749-82-4141 FAX：0749-82-4477

**滋賀県立伊香高等学校**



校への志望者数は前年同期調査と比較してやや増加した。長浜市内外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化等を分析するとともに、令和8年度から実施する全国募集も踏まえ、新学科の広報や魅力づくりについて長浜市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和8年度以降の周知活動に努める。

#### **課題・次年度計画への反映方針**

- ・令和7年4月に新学科の1期生が入学し、「森の探究科」の学びが始まった。より具体的な学びの内容や卒業後の進路について周知を行っていくとともに、生徒の実際の声や活躍の様子についても発信していく必要がある。
- ・県教育委員会のホームページや保護者向け情報誌「教育しが」等を活用し、生徒・保護者・地域への情報発信を行いたいと考えている。
- ・長浜市広報や地域密着型生活情報誌に森の探究科の取組について特集の掲載を依頼していきたいと考えている。
- ・長浜市内12中学校・義務教育学校やそれ以外の中学校から伊香高等学校への志望者数の変化等を分析し、新学科の地域への広報や魅力づくりについて長浜市教育委員会等の協力も得ながら検証し、令和8年度以降の周知活動に努める。

#### **(8) 管理機関における事業全体の成果検証、評価**

令和4年度末に公表した「魅力化プラン」の中で、本県の普通科高等学校29校のうち地域連携重点により魅力化を図ることを推進する13校で、「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和5年度から開催することとした。初回は令和6年1月23日に開催し、連絡会議の場で伊香高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、普通科改革の推進のための必要条件を探る中で事業全体の成果検証を行った。なお、今年度は各校の具体的な取組内容とその課題、今後の計画について調査を実施し、取りまとめ結果を関係各校にて共有した。

あわせて、年3回の運営指導委員会によって事業の進捗状況や成果を確認し、事業の評価を行うことで、以後の事業運営に役立てた。運営指導委員会では、1期生の状況や授業、フィールドワークの様子、カリキュラム、全国募集の開始に向けた現状と課題、持続可能性等における大切な視点について、多くの指導・助言をいただいた。

令和4年度滋賀県教育研究事業「県立高等学校魅力化推進事業」において、地域連携のためのコーディネーターを伊香高等学校に配置し、炭づくり、薪割り体験や地域住民とのふれあい対談等、地域を教育資源とした地域連携活動に取り組み、現在および将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの推進と、ICTによる学校間連携授業に取り組んできた。このように、伊香高等学校では、1年先行して普通科改革の研究を進めてきたこともあり、コーディネーターを中心とした新学科のカリキュラムやコンソーシアム運営等の検討を順調に進めることができた。

#### **課題・次年度計画への反映方針**

学校における取組状況やコンソーシアムの管理運営について情報を共有しつつ、「伊香高等学校魅力化シンポジウム」や、その他成果発表会等の機会を活用して成果検証と評価を行い、以後の新学科運営に役立てる。

## (9) 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

伊香高等学校の新学科「森の探究科」は、森林管理や木材加工等の実習や森林資源を活用したサービス産業、地球環境や再生可能エネルギー等をテーマとした探究学習に取り組む学科であり、木材加工等のための実習室や、学校設定科目に必要な備品等の用意、指導できる教職員の配置が必要である。備品等については、県事業「『北の近江振興』高校魅力化推進プロジェクト事業」や「2050 しが CO2 ネットゼロに向けた高等学校の研究取組推進事業」において整備してきた。教職員については、新学科の専門的な学びに対応した特別非常勤講師を配置している。

## (10) 成果普及のための取組

### ■伊香高等学校

伊香高等学校は、中学3年生向けのオープンハイスクールを年3回実施したり、学校のホームページや SNS を活用して様々な活動を掲載し情報を発信したり、伊香高通信を発行したりするなど、地域住民や地元中学校等に向け情報発信を行った。

また、2月11日に開催された「北の近江振興 高校生サミット 集え！北の高校生たちよ！」では「滋賀県北部の河川上流域に関する生態系調査」をテーマにした1年間の探究活動の成果を発表した。3月22日には木之本スティックホールで「伊香高等学校魅力化シンポジウム」を開催し、今年度の教育活動の報告や、生徒による地域連携についての研究発表等を行い、伊香高等学校の新学科について、地域の行政機関、企業、中学生、保護者等に向けてメッセージを発信した。

令和5年度から実施している「高校生による【しが】学びの祭典」は、各校で実践した探究的な学びの取組やその成果について発表し、探究的な学びを全県に普及するとともに、同世代の高校生の課題研究の発表を聴くことで、生徒の学問的探究心を養うことを目的としている。令和7年度の「学びの祭典」において、「発酵のチカラで地域を繋ぐ！「木之本バインミー」開発プロジェクト」をテーマにした1年間の探究活動の成果を発表した。

- ・生徒による授業内容の発表
  - ▶ R7.12/26：高校生による【しが】学びの祭典  
(発表テーマ「発酵のチカラで地域を繋ぐ！「木之本バインミー」開発プロジェクト」)
  - ▶ R8.2/11：北の近江振興 高校生サミット  
(発表テーマ「滋賀県北部の河川上流域に関する生態系調査」)
  - ▶ R8.3/22：伊香高等学校魅力化シンポジウム

### ■管理機関

「魅力化プラン」において、地域連携重点校に指定した普通科高等学校（13校指定）による「地域連携重点魅力化連絡会議」を令和6年1月23日に開催し、各高等学校の取組の進捗状況および目標の到達・達成状況を点検・評価するなどして、「魅力化プラン」の進捗を確認した。この連絡会議の場で、伊香高等学校は新学科設置に向けた取組状況等を発表し、本事業の効果的な実施を推進するとともに、グループ別の意見交換を通して、地域連携の取組を進める上での課題の共有と成果の普及を図った。なお、今年度は各校の具体的な取組内容とその課題、今後の計画について調査を実施し、取りまとめ結果を関係各校にて共有した。

### 課題・次年度計画への反映方針

伊香高等学校が行うオープンハイスクールをはじめとする「学校説明会」の際には、より具体的な学びの内容や卒業後の進路について周知を行っていくとともに、新学科に入学した生徒の実際の声や活躍の様子についても中学生や保護者等に届くよう発信していく。

また、地域連携重点校における取組成果や課題等を定期的に共有し、各校における魅力化推進を図る。

#### (11) 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組 (特に予算・人員配置について)

##### ■管理機関

- ・国の指定終了後も関係機関と連携を強化したうえで、事業の自走化を図る。
- ・指定終了後もコーディネーターの継続的雇用の必要性があり、地域おこし協力隊も含め、管理機関である県教育委員会は長浜市と協議を重ねる。その際、クラウドファンディングやふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得について、研究を継続し知見を共有する。また、県教育委員会事務局生涯学習課の令和6～8年度県事業「県立学校地域協働モデル事業」では、モデル的に県立学校に地域コーディネーターを配置し、学校運営協議会と連携しながら地域学校協働活動を推進し、モデル校での取組を検証・事例として活用することにより、県域への普及を目指すこととしており、この事業推進に協力していく。
- ・地域連携重点校における取組成果や課題等を定期的に共有し、「基本方針」に基づき作成した「魅力化プラン」の事業成果の検証を行う。
- ・令和3年度から令和5年度にかけて、彦根工業高等学校においてマイスター・ハイスクール事業（次世代地域産業人材育成刷新事業）を実施した。この事業で培った知的財産を継承するため、令和6～8年度県事業「シン・マイスター・ハイスクール～地域創生への挑戦～」において予算を確保し、彦根工業高等学校が地域の産業界や彦根市との共創により、地域を活性化させ、自律的で持続的な未来社会を創生できる産業人財を継続的に排出する持続可能な人材育成プログラムを構築することとしている。あわせて、彦根市や彦根地域の企業等から費用も含めた支援を受けながら、長期間を見据えた持続可能な人材育成システムの構築に向けて取組を進めている。同様に、本事業においても、「森の探究科」の学びの継続・充実のための予算確保や、長浜市や地域の企業等から費用も含めた支援も含め検討していく。
- ・県教育委員会内の体制や予算等、伊香高等学校が自走していけるよう必要な支援を継続する。
- ・特別非常勤講師の仕組みを活用して、外部講師による教育内容の充実・継続を図る。

##### ■伊香高等学校・長浜市

- ・地域社会に関する学科の学びの成果や課題に係る調査・分析・検証については、外部機関と連携しながら継続して取り組み、さらなる改善・充実を図る。コーディネーターやコンソーシアム等の関係機関等と学校運営協議会の連携・協力体制を維持、強化しながら、特に長浜市の地域おこし協力隊の制度等を活用したコーディネート人材の活用、ふるさと納税等を活用した教育活動資金獲得など、時代の要請に応じた新たな取組の企画・開発を継続する。

#### (12) 他の事業との関係

県内における中学生の生徒数減少にともない県立高等学校の小規模化が見込まれることから、令和4年度から県予算において独自に県立高等学校を対象とした「県立高等学校魅力化推進事業」を実施している。この取組では、地域の企業や大学、自治体等との調整を行うなど学校と地域をつなぐコーディネートの必要性や、ICTを活用した、小規模の学校間での遠隔授業の日常的な導入

に向けた研究に取り組んだ。伊香高等学校を研究校に指定した研究で、地域社会に関する学びの導入や地域社会に関する学科の設置による普通科の魅力化を進めるにあたり、コーディネート人材の必要性がより確かになってきたところである。

また、令和5年度から県北部地域の高校（伊香高校はその対象）を対象とした「『北の近江振興』高校魅力化推進プロジェクト事業」を実施している。この取組は、北部地域の高校で学ぶ生徒が、地域での探究的な学びを深めることで、地域課題解決に必要な資質を養成し、未来の北部振興に挑戦する精神および地域に定着し貢献する人材の育成につなげることを目的としている。

「『北の近江振興』高校魅力化推進プロジェクト事業」における「北部の地域課題に向けた北部探究プロジェクト」では、県北部地域の豊かな自然環境や森林資源等を活用し、「森で学ぶ」をコンセプトに人と自然が共存する循環型社会構築に資する人材を育成するとともに、地域の森林資源等を活かしたまちづくりにかかわり、地域活性化との相乗効果を目指す取組である。これまでに森林資源等の自然環境を活用した炭焼き体験やアウトドアキャンプ実習、また、環境教育の一環として近隣の発電所見学や教室の断熱改修ワークショップ等、新学科設置に向けた様々な取組を実施してきた。また、県外の先進校も視察し、カリキュラム検討の参考とした。3月22日には木之本スティックホールで「伊香高等学校魅力化シンポジウム」を開催し、今年度の教育活動の報告や、生徒による地域連携についての研究発表等を行い、伊香高等学校の新学科について、地域の行政機関、企業、中学生、保護者等に向けてメッセージを発信した。

令和8年度も引き続き「『北の近江振興』高校魅力化推進プロジェクト事業」を実施し、北部地域の高校の魅力化を進めたい。

### 第3章 研究開発の内容

#### 3-1 運営指導委員会

##### ■第1回運営指導委員会

###### <会議の日時等>

開催日時 令和7年7月24日(木) 10:00~11:40 (伊香高等学校 ICT教室)

出席者 【運営指導委員】

久木裕委員 岳野公人委員 永井正彦委員 平岡俊一委員 三浦豊委員

【滋賀県立伊香高等学校 森の探究科推進室】

臼井正士校長 小野泰生教頭 水谷智宏教諭 大久保卓也臨時教諭

富山昌彦教諭 中川聖良教諭 木谷昌子教諭 脇阪博也教諭 中川寿香教諭

伊藤利恵臨時実習助手 副島拓歩コーディネーター

内 容 (1) 「普通科改革支援事業」の取組状況等について

①事業の成果および今後に向けた課題・方向性

②今年度の取り組み

③今後の計画

④全国募集の開始に向けた現状と課題

⑤留学サポートの現状と課題

⑥支援事業終了後の森の探究科カリキュラムの継続性

(2) 事業に関する指導助言等

###### 事業の成果と今後に向けた課題・方向性

###### ○資料説明(木部参事)

###### 今年度の取り組み、今後の計画について

###### ○資料説明(富山教諭)

###### <主な意見>

- ・説明を聞き「森の探究科」に注目が集まっていることがみえてきて、とても楽しみだと思う。
- ・生徒が主体的に森の探究科を選択されているのはとてもよいこと。学びのモチベーションも全然違うだろうと思う。生徒が入学を決めた経緯、新学科を知った情報手段、進路決定の時期等はとても貴重な情報になる。ぜひ毎年継続して調査し、データを蓄積するということも進めていただきたい。
- ・1期生はとてもモチベーションの高い生徒が入ってきていると思う。それを2年目、3年目とどう継続していくかということも、大きな課題かと思う。その中で、全員が取り組むのは難しいと思うが、有志の生徒と大学の研究室で連携して共同研究・調査するとか、何かしらの企画と一緒に実践してみるなどしてもおもしろいのかなと思う。実際に、私立大学であれば、附属高校の授業の一環で共同調査・研究をカリキュラムに組み込んで進めておられる。高校生が大学に進学したときに研究を継続的、発展的に取り組めるという位置付けであると思われる。公立だとそこまでは難しいと思うが、特に研究的なことに関心がある生徒と、一緒に取り組めそうな大学の研究室と共同研究的なこととしてみてもよいのでは。ただ、一部の生徒になると授業という形は取れないと思うので、今度はそれをどういう枠組みでやるのかという難しいこともあるが、試行してみても面白いのではないか。進路選択や将来のことを考えるうえでもよいきっかけになると思われる。
- ・1期生で森の探究科に行っている高校生を知っているが、学校がとても楽しいようで、それは何よりだと思っている。併せて学校の先生方もいろいろ頑張られているのだろうと思う。
- ・授業では、現場で実践的なことに取り組まれているが、課題解決に直接繋がるようなことや、継続的な共同研究といったことを大学や研究機関と一緒にできて、そのプロセスの中で、地域の山が変わっていく、守られていくといった結果をしっかりと実感しながら、取り組まれるのがよいと

思う。

- ・今、研究者の方々と、森林の保全活動の評価システムを作ろうと取組を始めている。現在は企業が森に注目し始めており、これまでであれば植林しましよくらいの話だったが、今ではネイチャーポジティブなど様々な言葉が出てきており、CSRとして山に投資していこうとなったときに、その投資の効果はどれだけ得られるのか。例えば、植林して、その後管理しなかったら、次の年には全部シカに食われていたとか、草がたくさん生えていたとか、まがい物の植林活動は今までたくさんあった。これからは、本物だけがしっかり続いていく、そこに対してお金がつくというような世界に変わりつつあり、そういった活動自体をきちんと評価できるシステムをつくり、効果や持続性を評価してあげれば、企業もお金を入れやすい。
- ・今は、森林環境譲与税という国の制度があり、自治体が税金を山に投資できる。森林がないような下流域の自治体でも人口割でお金がつくが、そういうところは上流域にお金を入れていくような話も出つつある。そのような時に、税金ということもあり特にエビデンスが必要で、やはり本物に森林環境譲与税を使っていこうという時には、評価システムが生きてくるのではないか。こういうこともあり、今研究者の方々とプロジェクトを立ち上げており、ここに高校生も参加できるのではないかなと思った。
- ・例えば、企業から森林にお金を入れてもらった時、森の状況をモニタリングして毎年評価するといったことはできそうではないか。毎年1年生が森に来て、チェックリストで評価をすることで、その企業のお金がきちんと社会に対して生きていることが分かる。また、そのモニタリングを支えているのは地元の高校生となると、モニタリングするために、その企業が出すお金の一部が入ってくる可能性もある。伊香高校の活動を進めていく上でお金の話は結構シビアになってくると思われ、研究しながら、学びながら稼ぐといったこともできるのではないか。結果的には、地域の森林を守ることになり、とても充実した学びにもなってくると思われる。我々は今、琵琶湖環境科学研究センターと取組を進めているが、もしかしたらそういった研究の世界に入っていきたい子たちが就職先としてこのようなところを選ぶなど、広がりもあるのではないかなと思う。単発のワークショップだけではなく、継続的な共同研究に取り組んでみても面白いのではないかなと思う。
- ・少し情報提供させていただきたい。現在、環境省が水資源を活用した地域づくりを支援するという事業を行っているが、その一環として、山形県内のある高校では、伊香高校と同じような教育に力を入れている。事業の申請主体は地元のまちづくり企業やNPO法人だが、高校生と一緒に、森とイワナをテーマにした地域づくりを進めようとする中で、イワナを生かした地域文化を育てていくことがテーマになっているようだ。イワナの生息状況調査や、多くいらっしゃる釣り人の地域に対するイメージなど、そういった調査を高校生と一緒に取り組むという事業が展開されている。高校生が主体的に地域づくりの調査研究を行い、地元のNPO法人やまちづくりの企業、自治体と連携しながら進めていくという取り組みで注目を集めそうだ。やはりこれからのトレンドとして注目を集める一つの方向性になってくるのかなと思う。
- ・今、中央教育審議会が動き出していて、次の学習指導要領改訂に向けて動き出しているところ。その中で、次の動きとして、探究はもう少し強く入ってくるだろう。そのときに向けてこういうことをやっていますというのはディフェンスがかなり強いのかなと思う。そのときに、定員を満たしていますということが言えるといいかなと考えている。また、それよりも大きいのは、やはり時代の流れで、生成AIとかICTなどが強く入ってきている。
- ・学校設定科目2単位で現実的にどれぐらいやるのか、みたいなこともあるかと思うので、一番聞きたいのは現場サイドの方で、抱えていらっしゃる課題、生の声を聞かせていただけたらご協力できるのかと思う。
- ・高校と大学では異なるが、現在、まちづくりに学生たちが関わってフィールドワークを行う科目を担当している。長浜市のまちなかを流れる米川を生かしたまちづくりという事で、地元側の地域づ

くり連合会や長浜市役所など様々な団体が入っているが、その活動に私達の学生も参加させていただいている。いろんな方にインタビューをしたり、実際に活動に参加したりして、8月3日の米川祭では子ども向けに、学生たちで企画したことを実践するというところを行ってきた。本当は20人以上の学生を受け入れないといけないが、教員は3人で担当しており、20人以上は難しいことを私達も言っている状況。

- ・やはり地域に出て、実践的に地域の方と一緒に様々なことに取り組むとなると、人数的に40人は大変なところがあるだろうなと思った。もし40人が崩せないということであれば、それに対してこちらの方で何人の体制を組めるかというところが一つ鍵になってくるのかと思う。やはり肌感覚として、40人は大変だろうなというところで、ぜひご検討いただけたらと思う。

## 全国募集の開始に向けた現状と課題について

### ○資料説明（富山教諭）

#### 留学サポートの現状と課題について

### ○資料説明（副島 CN）

#### 支援事業終了後の森の探究科カリキュラムの継続性について

### ○資料説明（富山教諭）

#### <主な意見>

- ・この辺の話はやはり県の方で継続的に予算をつけていただかないといけないのかなと思う。例えば他のところがどうマネタイズしているのか調べられるかもしれない。
- ・運営面で本当は人を付けないといけないので、そうなると、法人格をもった組織が運営等で主体になる必要が出てくるかと思う。
- ・まちづくりの団体が一つ必要になるくらいの感じになるかと思う。財源の確保については、委員もおっしゃった通り、他の地域で社団法人など団体を立ち上げられているところがあると思うので、そういう事例を見ていく必要があるのかなと思う。
- ・今は様々な資金獲得の手段があり、これが解決になるということではないが、最近は遺贈寄付の手段もあるようだ。この辺りで、地域愛のある方もいらっしゃると思うので、ご紹介させていただいた。
- ・運営状況というのはあまりオープンになっていないこともあるため、行政、地域の方々も含めて把握した上で、何が必要かということは大変なところかと思う。先ほどの保健所の指導で、調理場を改修しておられる件は、住居費に上乗せするものではなく、改修費を支援するなど、その辺の切り分けはきちり整理していく必要がある。コンソーシアム等の場で我々から話をさせていただいて整理できたらと思う。今、市のコーディネーターが頑張ってくれているので、そこは市としても支援は考えていこうと思っている。任期が切れた後もスムーズに動くような形はとっていききたいし、森の探究科が定着するまでは市もしっかり支援していく必要があると思っている。また、プラスアルファで木之本留学サポートの会の支援に長浜市がどこまで頑張れるかわからないが、その支援は令和8年度以降必要と感じている。生徒の食事支援は今2名だと思うが、それが将来的に15名になった時に経費がどうなるか、そのあたりの検証もしていないといけない。併せて15名と大きくなった時を想定して、今の空き家がいいのかは、しっかり考えていかなければいけない。
- ・樹木の観察の授業を17名にさせてもらった際、何人かの眼の輝きがあがっていて、とても意義のあることをさせてもらっているなと嬉しい気持ちでいっぱいだった。やはり森の生態系で大切なのは、子どもだと思う。例えば実生（みしょう）がどう入っているか、それによって未来の森がどうなるかがわかる。人間社会においても、子どもがわくわくしているというのはとても大切なことで、それが一番の資源なのかなと思う。

- ・高校に来て好きな生き物や、やりたいことをみんなが後押しする。子どもたちのあの目の輝きからどんどん世界を広げてもらって、それをバックアップしていき、可能性を広げる。そういう道筋もあるのかなと思う。今、環境問題で温暖化、森林環境といったことはよく言われており、私は聞きすぎて飽和状態になっている。そうではなく、生徒が入学して、こんな発見があった、モリアオガエルがここにいたとか、そういう話を例えば説明会などで聞いたら中学生にも響くかもしれないし、そこで親御さんもぐっと思われるのかなと思う。そのため、生徒たちの感想やこういうことやりたいということにも、先生方も大変だと思いが寄り添っていただくことで、森の探究科と呼ぶにふさわしい学科になるのかなと思う。

## ■第2回運営指導委員会

### <会議の日時等>

開催日時 令和7年12月16日(火) 14:00~15:35 (伊香高等学校 第3会議室)

出席者 【運営指導委員】

岳野公人委員 永井正彦委員 平岡俊一委員 三浦豊委員 山本綾美委員  
【滋賀県立伊香高等学校 森の探究科推進室】

白井正士校長 小野泰生教頭 水谷智宏教諭 大久保卓也臨時教諭  
富山昌彦教諭 中川聖良教諭 田中良教諭 脇阪博也教諭 西野賀子教諭  
伊藤利恵臨時実習助手 副島拓歩コーディネーター

内 容 (1) 「普通科改革支援事業」の取組状況等について

- ①1期生の様子
- ②森の探究科の進路について
- ③広報活動
- ④下宿のサポート体制の整備について
- ⑤県外募集および下宿に関する他県高校の取り組み状況調査

(2) 事業に関する指導助言等

### 今年度の取り組み状況、今後の計画等について

#### ○資料説明(富山教諭、副島コーディネーター、大久保臨時教諭)

##### <主な意見>

- ・学校外での実習やゲスト講師による授業など、多くのプログラムに取り組まれており、生徒にとってもよい教育の機会になっていると思う。先生方やコーディネーターのご苦労もあるのではと思います、説明を聞かせていただいた。予算の確保については大きな課題だと思う。
- ・予算確保の1つとして、県や長浜市などで付けてもらうなどできればよいが、他の案としては、例えば、ふるさと納税では、用途を限定して分野ごとの取組に振り分けるタイプをよく見る。教育分野でもその例は探せばあるのではないか。例えば東近江市だと、地域の環境保全活動の支援に特化したふるさと納税がある。また、企業版ふるさと納税も選択肢としてはある。このあたりは長浜市との連携になってくるかと思う。その他にも寄付金という面では、遺贈寄付というものもある。ご自身の遺産の一部を例えば地域のこと、特定のテーマの市民活動等に使ってほしいということで、相談に来られる方も増えていると聞く。ただし、寄付は税金の減免や控除の対象になるというのが一つの目的としてあり、寄付の受け皿となる認定NPO法人や公益財団法人に寄付をすれば、そういったものが受けられる。そのため、受け皿になる組織を作るか探してくる必要があり、学校だけの議論ではなかなか進まないところもあると思う。様々なところから寄付金を集めるための受け皿づくりも一つの例となるのではないかと思う。地域づくりや市民活動分野での最近の動きとして紹介した。

- ・ 県外募集など人の興味を引き立てる工夫として、今のところ活動内容の説明が主になっているが、せっかく1期生が入学したので、生徒の声をもっと収集してアピールしてもらえるといいと思う。体験入学や学校HPを見る際にも、実際に授業を受けた生徒の声が一番気になるころではないか。たくさん声の中に輝くものがあると思う。
- ・ 今年度は森の探究科は20名を割っているが、例えばそこに県外から5名来てもらえれば20名以上になり、ほかのコースの状況に近づく。口コミが良い方向にはたらくと評価も高くなると思う。そのためにも生徒の声は必要である。また、卒業生に森林関係の仕事に就いていただき、つながりができればと思う。
- ・ 説明を聞いたところ、学校ではできることをやりつくした状態で、あとは予算さえ何とかなれば動かせるころまで来ていると理解した。はじめ国の予算で動かして、事業が終わると予算がなくなってしまうのは大学も同様。最初に率直に感じたのは、いつまで継続するのか、閉じ方も考えていた方がよい。予算をつけてもらえて組織としては維持できても、どこかに負担がきて厳しい状態になるのではないか。先の見通しをもって予算を設計して、県に申請したり市にお願いしたりするようにもっていかないと、単年度予算で動かすのは厳しいだろう。10年で設計するのか20年で設計するのか、教員の体制や地域との連携の関係もあるので、それらも考慮しながら見通しをもって進める必要がある。提案としては、10年でやるのか20年でやるのかを決めて、長期計画をもって県や市と話をした方が良さそう。
- ・ 資料の実績を見ると9月、10月、11月と校外学習が集中している。この時期に合わさざるを得ないのか。今年はたまたま1年生だけだが、来年2年生がいることも考えると、1・2年生合同とはいかず、2学年別々に動くことになると思う。今年は1通りでよいが、来年は2通りやらないといけなく、再来年は3通りになる。それを考えるとバス利用やコーディネーターに係る費用について、単純に3倍になるのか、などといったことも含め、我々も予算を取っていかないとけないため、思い描いている予算の枠を示していただけたらと思う。
- ・ 後任のコーディネーターも同じように取り組んでいただけるか、いつまで募集するかということも含め、制度設計をしっかりとしていく必要がある。少しでも地域サポートの方が動ける部分は支援していこうと考えており、関連予算の要求はしているところ。例えば費用補助をするにしても、生徒に向けてのものか、整備される方への支援なのかといったところは検討に着手させていただきたい。佐賀県に学校と一緒に視察に行かせていただいた。佐賀県のように手厚い支援があってこそ成り立っているのかなとも思うが、滋賀県と佐賀県では状況もかなり異なると感じた。長浜市としては過疎地域にある学校を存続するために動いているが、それに伴う地域の方の協力があるので、そこに対して市も支援をしていく。これからも努力させていただきたい。
- ・ 「人づくり・人の流れづくりの好循環を目指す」の説明をいただいたが、資料の図中に「子供・若者の意欲・活力・誇り・肯定感醸成」という言葉が示されており、ここが要だと感じた。私は森が世界で最も尊いものとして、「森の案内人」という仕事をつくり生計を立てており、年間120~150件案内している。そこでは、よく話を聞いていただき、感動もしていただける。伊香高校では3回の樹木観察会をさせていただいた。120%全力で取り組ませていただいたが、生徒の眼差しや姿勢がこんなにも違うのだと感じた。本人の意欲が無いときついと思うし、こちらも学ばせていただいた部分もある。本人が自分を肯定するということ言えば、他の委員のご意見とは違った方向性になるが、今設定されている授業には、先生方の想いのコンテンツがあふれており、自分も受けてみたいと感じる。先生方はどれかに引っかかってほしいという願いを込められていると思う。
- ・ 若者の意欲・活力という観点で、どのようなことができるか考えている。例えば学校の入り口にある植栽について、樹齢1500年のケヤキがあるというのは大変なことである。森はシンボライズされたもの。例えば、入学した生徒たちに3年生の森の未来創造で、この空間を作ってみないか、などといったことを、子どもたちと取り組むのはすごく夢があることだ。

- ・先ほどお話のあったコーディネーターは大事な存在。継続的に担っていただくことが大事。
- ・継続的に人を雇えるという部分を模索していくのは必要。現実的なところとしては、地域おこし協力隊や支援員があるのかなと思う。他の高校の事例を聞くと、先進的なところでは、地域側が法人をつくって、そこがコーディネートする人材の受け皿として機能していたりする。予算の獲得は、高校の活性化だけが目的では難しい。高校の活性化と同時にその地域の活性化につながるプロジェクトを展開していく。例えば大学生がフィールドワークをして、地域の方や高校生と交流し、地域移住促進プログラムを作るなどといった事業をされている事例もある。学校を起点にしながら、地域づくりなどに取り組むことで、予算の獲得の面でも、例えば、譲与税やふるさと納税等を受ける窓口、糸口が広がってくるのかなと思う。簡単ではないと思うが、今後選択肢として置いておくのもありだろう。

### ■第3回運営指導委員会

#### <会議の日時等>

開催日時 令和8年3月22日(日) 16:00~17:00 (長浜市北部合同庁舎 会議室)

出席者 【運営指導委員】

久木 裕 株式会社バイオマスアグリゲーション 代表取締役

岳野 公人 滋賀大学教育学部教授

永井 正彦 長浜市未来創造部担当部長兼北部政策局長

平岡 俊一 滋賀県立大学環境科学部准教授

【滋賀県立伊香高等学校 森の探究科推進室】

白井正士校長 小野泰生教頭 大久保卓也臨時教諭 富山昌彦教諭

伊藤利恵臨時実習助手 副島拓歩コーディネーター 中山郁英コーディネーター

内 容 (1) 伊香高等学校魅力化シンポジウムの感想等

(2) これまでの取組に関する助言、所感等

#### ○伊香高等学校魅力化シンポジウムの感想等

##### <主な意見>

- ・ボリュームのある良いシンポジウムで、長浜市にもっとPRしておけばよかったと感じた。吹奏楽部も3人が頑張っていたのをより多くの方に聴かせてあげたかった。普段から伊香高校をPRする機会がもっとあれば気にかけていただける地域の方も増やせたのではないかと考えている。
- ・シンポジウムには様々な方が登場され、内容も盛りだくさんで大変興味深く聞かせていただいた。印象に残ったのは森の探究科1期生3名の発表。高校生の発表は原稿を読んでも多いが、本日の3人はしっかり自分の言葉で自分が伝えたいことを伝えられていてよかった。
- ・このような生徒の姿を見ると森の探究科といった新学科の強みが打ち出せているのかなと思う。普通科ではできない調査研究や発表の機会を持たせることは大事なことと感じた。全般的に何でもできることも大事だが、自分の興味のあることをじっくり取り組みたい生徒をどう伸ばすかという視点も大事かと思う。
- ・本日のシンポジウムは、目的を考えると仕方がないかもしれないが、内容的に多方面に向いてしまったなという印象があった。
- ・これまでに授業をさせていただいたが、全般的に意欲的に取り組んでくれるなという印象を持った。高校生のうちに取り組んだほうがよいこととお話させていただいたが、伊香高校の学びはとても多様で、これは生徒の皆さんにとっては吸収のチャンスだと思っている。経験こそが一番語れることで、学校の授業を通して経験値を高めることができるのは強みになっていくと思う。

- ・ AIが発達する中で、人間がすべきこと、人間しかできないことを考えないといけない。様々な可能性を学び、そこから創造的な新たな仕事を生み出す生徒も出てくるのではないかと思う。
- ・ どこかで見聞きした人が話すのと、本物を実践した人が話すのはやはり違う。今、高校生が実践経験のある方からの学びができることは、とても大きいことだと思う。
- ・ 思い起こすと、ゼロベースで始まった3年間で、2年目にカリキュラムができて3年目に動かしてといったように着実に事業が進んできたなという印象を受けた。一方で心配なのは、全国的な高校改革の流れの一環だと思うが、どんどん探究活動を動かしてカリキュラムを変えていく中で、動かし続けるという面では、いつまでこれを維持できるのかが心配。かなり特徴的なことに取り組まれているので、これをいかに進めていくかが課題になるのだろうと思う。
- ・ 山間地域の小学校、中学校でも森林資源を活用した学びをされている。近隣の小中の状況を把握して積極的に広報していくのも考えてみてはどうか。200~300名程度の中学校だと数名は興味を持つ生徒もいると思う。そういうところにピンポイントで当たっていくのもありではないか。また、長浜市内や県内で高校の横の連携も何かできないかなと思っている。

### 森の探究科の波及効果について

- ・ 地域に出かけて体験することで学ぶということや、専門的な取組をされている方に授業に入っただけ、教員だけではできない生の声を聞かせるといったことは、普通科の他のコースでも非常に多くなった。探究活動をカリキュラムの柱にしていくというコンセプトは普通科にも広がっており、この3年間の学科改編に向けて取り組んだことが波及しているのではないかと思っている。
- ・ 学校としては、令和5年度から事業が始まって外に出ていく機会が増えた。当初は教員も生徒を校外に引率することに対して、どう指導すればよいか戸惑っていたと思う。取組を進める中である程度パッケージ化していき、森の探究科前身の自然環境コースが1日外へ出て行く日を設けた。コース授業はすべてのコースで揃えているので、他のコースも外に出ることになり、何かしないといけないという思いで下地をつくってきた。現在はコーディネーターの力もいただきながら、抵抗なく校外に出ることができている。普通科の授業に加えて探究活動によって生徒の印象にも残るようだ。
- ・ きのもと認定こども園との連携は、森の探究科がはじめた後、普通科も行うようになった。
- ・ 国語の授業では「森の中で短歌をつくる」という取組をした。
- ・ 先生方は、校外での学習、外から講師を呼ぶことに対して怖さがなくなったという印象。今では校外での学習、外部から講師を呼ぶことが当たり前ようになってきている。一方で、事前の準備に時間がかかるということは思っているかもしれない。専門家の生の声は重み、説得力があり、これらを聞けるのは生徒にとって幸せなこと。
- ・ 高校生のうちに校外のいろいろな方とふれあい、コミュニケーションをとることは得られるものも多く、自分達の表現力の育成にもつながる。一方で非常に多くの講師がおられて、多くの情報をインプットされているため、生徒はどれだけ整理できているのかが気になる。1年間あるいは3年間の目標として、自分の考えをまとめて発信することを目標として授業に取り組んでもらえるといい。
- ・ 県立高校の教員は異動があるため、継続性が大きな課題になるだろう。コーディネーターの方などがその役割を果たしておられるのだろうと思う。今後も継続的・持続的な仕組みを整えることを県や市が考える必要がある。
- ・ 最後に、小中学校の取り組みに高校も巻き込んで、地域で体系的な学びの仕組みを作り、NPO法人がコーディネーター的な役割で支援をしておられる地域がいくつかある。中学校と高校の間をつなぐのは難しいとは思いますが、伊香高校はその可能性があるのではないかと思っている。ぜひ小中学校、子ども園等を巻き込んだ教育活動の推進もご検討いただきたい。

- ・学校案内のカリキュラムの表記について、現在は森の探究科の授業（森のキホン2単位）にだけ色を付けて強調しているが、すべての授業に少しでも森のことが関係しているような見せ方が工夫できるといいのではないかと思う。
- ・広域通信制高校のようにオンラインで授業ができるのであれば、うまく活用して伊香高校でもオンラインでの授業を取り入れるなどすると、抜本的な改革になり、特徴として打ち出せるのではないか。
- ・森の探究科の学習は地域に波及していると思う。一昨年に取り組んだ断熱ワークショップは木之本中学校でも実施された。地域活動やプロジェクトに取り組む中で、森の探究科と連携すればいいのではと言われ始めているくらいになっている。
- ・今後、森の探究科を魅力的なものにするにあたっては、卒業後にどのような進路があるかを示すことができるかも重要になってくると思う。

### 今後県内で新学科設置の取組を展開していくにあたって

- ・市の財政課は、高校は県立という発想を持たれている。長浜市は大きい市でも過疎地域をいくつか持っており、小学校も今後減っていくだろう。その中で、伊香高校は生徒がいるだけでシンボルになっている。伊香高校が地域に根付いた学校という認識を持たなければいけない。そのためにも地域や学校現場の声は大事で、市にも届けていただけたらと思う。

### コーディネーターより所感

- ・2年目で入学予定者数が増えたのは素晴らしいことと思う。学力差が大きいことも興味関心で森の探究科を選んでいるという証拠ではないか。それが普通科改革事業の狙いでもあると思う。
- ・まずは、地域の方の想いを具現化できてよかったと思う。本校に県南部から北部に来てくれていることは大きい。森の探究科の取組も、引っ張ってくれる生徒がいて、他の生徒も力を発揮して今日のような発表ができた。それを実現できた下宿の制度はとても良かったと思っている。また、森の探究科という場所があったからこそ、彼らが仲間を見つけ、力を発揮できる良い下地がつくれたのではないかと考えている。引き続きご支援いただけたらと思う。

## 3-2 教育活動改善に向けた先進校視察

### (1) 鹿児島県立屋久島高等学校

期日 令和7年10月31日(金)

視察者 教諭 富山昌彦

対応者 教頭 恵 美由紀氏、教諭 樋渡 洋一氏

- 内容
- ①授業内容について(特色ある学びについて)
  - ②県外生・地域みらい留学生徒の志望状況と効果、課題について
  - ③下宿の運用体制について

#### 【学校の基本情報】

- ・昭和23年(1948年)設立
- ・普通科(文系、理系、環境コース)と情報ビジネス科の2つの学科編成。情報ビジネス科は平成7年、環境コースは平成13年に設置。
- ・2025年現在生徒数175名(男子91名、女子84名)
- ・教員数30名、県外生徒の募集定員は5名
- ・島内中学生は5割程度の在籍で、その他の中学生は本土の進学校や寮のあるスポーツ強豪校へ進学する。

### 【特色ある教育について】

- ・普通科の「環境コース」は「世界自然遺産屋久島」をフィールドとした自然環境、歴史・文化の学習を行う。
- ・2年次よりコース選択を行う。「環境コース」は、学校設定科目として2年次「環境総合」2単位、3年次「屋久島ゼミナール」3単位実施。
- ・2年次の環境総合では、4～7月まで生物分野、9～11月中旬まで地学分野、11月下旬～2月中旬まで公民・家庭分野、2月下旬～3月下旬3年生の準備と時期ごとに担当者が分割して授業を運用、また分野ごとに年4回屋久島文化村センターにて研修を実施している。
- ・探究発表会として、全国環境サミットの参加や屋久島ソサエティの発表会を実施。
- ・実習にかかる費用は、① 屋久島財団（年間35万）② 企業（三菱みらい財団、アウディなど）の支援を受けている。
- ・総合的な探究の時間「黒潮キャンパス」にて、屋久島に関するテーマを探究。1年次、2年次はスライドでの校内発表会を実施。3年次はポスターとレポートを作成。作成したレポートは、冊子にまとめる。3年生のポスター発表は1・2年生も見学を行う。

### 【県外生・地域みらい留學生徒の志望状況と効果、課題について】

- ・県外募集5名
- ・選考は役場が実施。10月下旬に役場のHPにて県外生徒への案内を開始。12月初旬に書類×切。役場の職員がで5名程度に絞る形で、選考を行う。（1人暮らしは認めていない。中には選考に漏れたが、母と2人で暮らしている生徒もいる。）
- ・県外募集にむけて、地域みらい留学では東京出展1回、オンライン説明会は4回程度の実施。
- ・学校見学は、随時教頭が案内を行っている。
- ・県外生の入学によって、島外への流失が進むなか、普通科を2クラス維持することができることや島外からの新しい価値観も取り入れることができる。

### 【下宿の運用体制について】

- ・下宿先は、地域の方のご自宅か寄宿舍のいずれかである。
- ・寄宿舍は学校から車で5分程度の元ペンションを改築。2階建てで、12部屋ある。ハウスマスターは町役場が地域おこし協力隊を募集し、その方が運用している。
- ・寄宿舍には1年生4名、2年生2名、3年生1名の計7名（男子6名、女子1名）が下宿している。
- ・食事は朝・昼（弁当を持たせる）・晩の3食で、休日は申請制となっている。
- ・門限は20時00分。外出届があれば延長できる。

### 【新学科への反映】

- ・屋久島高校は、「世界自然遺産屋久島」をフィールドとした魅力あるカリキュラムを実施しており、その学びを「総合的な探究の時間」と連動させるなど、つながりのある課題探究活動を展開していた。またカリキュラムは分野ごとに各担当が実施することで、マンパワーに頼らない持続的な運用を行っていた。また地域みらい留学における県外募集では、離島という厳しい状況でありながら、学校・町・地域が連携することで、広報・下宿の体制を整えているが印象的であった。「森の探究科」では、2年次の修学旅行で、屋久島高校を訪問することを検討している。今後、屋久島高校と連携を深めながら、さらなる魅力あるカリキュラムづくりを行っていききたい。

## (2) 大和郡山ソリデール

期日 令和7年11月4日(火)

視察者 滋賀県議会議員 柴田清行、長浜市北部政策局長、北部政策課長代理、  
教頭 小野泰生、コーディネーター 副島 拓歩

対応者 大和郡山市まちづくり戦略課

内容 ①令和5年から実施してきた、「大和郡山ソリデール」の効果と課題

②住まいを提供される高齢者の方を募集するために、実施されている  
活動

③高校生を対象として、「大和郡山ソリデール」のような企画を実施する  
ことの是非

### 【大和郡山ソリデールについて】

- ・伊香高校は、来年度からの全国募集に向けた受け入れ体制の強化に取り組んでおり、現状では生徒の住居確保に課題がある。空き家の不足を解消するための新たな手段として、高齢者宅に学生が同居する「ソリデール」という仕組みに着目し、視察を実施した。
- ・大和郡山ソリデールは、学生と地域住民が一つ屋根の下で暮らす「同居交流」を核とした取組である。この施策の主な目的は、交流を通じて学生に大和郡山市への愛着を抱いてもらい、将来的な市内への定住や、地元の工業団地内にある企業への就職を促すことにある。
- ・市長と学長の対話を経て令和5年度より開始された。主な対象は、通学時間が2時間以内のために4年生進級時に学生寮を退去しなければならない奈良工業高等専門学校(高専)の学生である。彼らにとって、実家からの通学や一般の賃貸物件と並ぶ新たな居住の選択肢として機能しており、年間で10名程度想定される退寮対象者のうち、現在は3名が利用している。
- ・運営体制については、大和郡山市がNPO法人「空き家コンシェルジュ」に事業を委託する形で成り立っている。市は年間140万円の委託費を支出し、これには第二世代交付金も活用されている。NPO法人は、空き家バンク機能の提供やマッチングに加え、入居1ヶ月後のヒアリングなどのフォローアップを担当している。また、学校側も教員が寮生と同様のサポートを行うほか、学生の性格や事情を鑑みてソリデールでの生活に適しているかを判断する役割を担っている。
- ・利用料金は月額23,000円に設定されており、その内訳は家主への支払いが20,000円、NPOへの仲介手数料が3,000円である。この価格は、高専の学生寮の料金や他自治体の事例、さらには生活保護制度の基準を参考に、学生が利用しやすい安価な水準に抑えられている。

### 【コンソーシアム活動への反映】

- ・地域活性化と将来の担い手確保に直結している点が大きな強みである。学生が地域住民と「同居交流」を行うことで、大和郡山市への愛着を育むきっかけとなり、それが将来的な市内への定住や地元工業団地企業への就職につながるという、戦略的な視点を持って運営されている。伊香高校が全国生徒募集を行う意義、可能性を関係者に理解してもらえるようコミュニケーションを図っていく。
- ・大和郡山ソリデールの取り組みは、学生にとっての実用性と経済的な負担軽減が挙げられる。奈良高専では4年生進級時に通学時間の規定により退寮を迫られる学生がいるが、そのような学生にとって、実家からの通学や一般の賃貸物件に代わる、利便性の高い第三の選択肢として機能している。実際に退寮対象者の約3割が利用している事実は、この施策が学生のニーズを的確に捉えていることを示している。また、月額23,000円という利用料は、寮費や公的な基準を参考に設定されており、学生が安心して利用できる安価な価格帯に抑えられている点も評価できる。現在総額75,000円となっている伊香高校の下宿寮の利用料についても、学生が安心して利用できる金額にできるよう、関係者と協議を重ねていきたい。

### (3) 佐賀県立有田工業高校の県外生徒募集体制について

期日 令和7年11月5日(水)

視察者 滋賀県議会議員 柴田清行、長浜市北部政策局長、北部政策課長代理、

教頭 小野泰生、コーディネーター 副島 拓歩

対応者 佐賀県教育委員会事務局 教育振興課 唯一無二の学校づくり担当、佐賀

県立有田工業高校、有田町役場 まちづくり課、合同会社NOWA

内容 ①下宿の運営形態について

②関係各所との連携方法について

#### 【有田工業高校の県外生徒受け入れの体制について】

・有田工業高校における県外生徒受け入れの取り組みは、佐賀県が実施する「地域みらい留学」の一環として、令和3年度より開始されたものである。この事業の主な目的は、全国的に唯一無二の学びを提供している高校を支援し、特色ある教育を推進することにある。佐賀県内では、県外への生徒流出や佐賀市内への集中による定員割れが課題となっており、全国募集を通じてこれらの課題解決を図る戦略的な側面も持っている。また、有田町にとっては、本事業を通じて関係人口を創出し、将来的には町に戻ってきてくれる人材を育成することが重要な政策的位置付けとなっている。

・運営形態については、学校、県、町、および外部団体が連携した多層的なサポート体制が構築されている。校内では5名程度の教職員が分担して下宿生徒への配慮を行っており、県は専門組織である「NOWA」に業務を委託し、さらに実務を担う「Clay」がハウスマスター業務を再委託される形で運営されている。ハウスマスター(HM)制度は、下宿生徒が食事をお菓子のような軽食のみで済ませてしまうといった生活上のトラブルを回避し、必要最低限の見守りと生活支援を行うために導入された。現在は20代から60代までの移住者を含む4名体制で、11名の生徒を対象に日々の声掛けや消耗品の確認、月2回の個別面談などを実施している。

・住居の整備に関しては、新たな寮を建設するのではなく、既存の空き家や民間アパートを県が全額負担で改修する手法が採られている。改修費用は1軒あたり500万から600万円程度であり、家主との契約や管理業務は外部団体が担っている。経済的な支援としては、有田町が月額3万円の生活支援金を支給しており、その費用の3割を県が負担しているほか、年間5万円程度の帰省支援金の支給も検討されている。

・生活面では、平日の夜間は食事が提供されるが、朝食や土日の食事は生徒自身が準備する体制となっている。緊急時の対応については、基本的には物件の家主が緊急時支援者を務めるが、ハウスマスターがサブの役割として急病時の対応などを補完している。情報の共有については、ハウスマスターが得た生徒の状況がマネージャーを通じて毎月県庁へ報告され、その後学校や保護者とも共有される仕組みが整えられている。

#### 【コンソーシアム活動への反映】

・有田工業高校の県外生徒受け入れの体制では、単に住居を提供するだけでなく、ハウスマスターによる「必要最低限の見守り」と「生活支援」が全国生徒募集を県立高校が行なっていく上で必要な行為であると認め、委託として組み込まれている点が非常に優れている。(健康管理: 食生活の乱れを防ぐための声掛けや、LINEワークスを用いた日々の体調確認が行われている。メンタルケア: 月2回の個別面談(15分~30分程度)を実施し、生徒の状況を深く把握する体制がある。専門性の向上: ハウスマスターに対して年1回の傾聴研修を実施するなど、支援の質を維持・向上させる努力がなされている)県外生徒募集を行う上で、最低限の見守りや生活支援はどこまでなのか、その運営のためにどういった人的リソースが必要なのか明確化する必要がある。

・生徒の保護者に対する経済的支援が充実している。(生活支援金: 有田町から月額 3 万円が支給され、その 3 割を県が負担する仕組みとなっている。帰省支援: 遠方の実家へ帰省するための費用として、年間 5 万円程度の支援金支給が検討されている。官民連携: ANA と連携した学校見学ツアーの検討など、物理的な距離のハードルを下げる工夫も見られる。)木之本地域の活性化という目的も含めて運営されている現状の伊香高校の県外・県内生徒受け入れ体制において、必要な保護者への経済的支援のラインを設定する必要がある。

#### (4) 佐賀県立唐津青翔高校の県外生徒募集体制について

期日 令和 7 年 11 月 5 日(水)

視察者 滋賀県議会議員 柴田清行、長浜市北部政策局長、北部政策課長代理、  
教頭 小野泰生、コーディネーター 副島 拓歩

対応者 佐賀県立唐津青翔高校、玄海町企画商工課

内容 ①下宿の運営形態について  
②関係各所との連携方法について

#### 【学科の特色】

- ・唐津青翔高校は、かつての唐津北高校と東松浦高校の統合を経て誕生した創立約 20 年の総合学科高校である。同校が県外生徒の全国募集を開始した背景には、地域における出生数の減少という切実な課題があり、町が県立学校である同校を支援する大きな動機となっている。この取り組みは、学校運営協議会での地域住民の意見を反映し、校長が「地域みらい留学」への参画を提案したことで本格化した。
- ・運営形態については、佐賀県と玄海町がそれぞれの役割を分担し、多角的な支援体制を構築している。県は「地域みらい留学」の参画費用を全額負担しているほか、県内 5 校に配置されるコーディネーターや、県内に 1 名配置される学校魅力化アドバイザーを派遣してソフト面での支援を行っている。ハード面においても、原発関連予算を活用した寮の整備が進められているほか、生活環境を整えるためのハウスマスターについても、NOWA を経由した採用と県による設置支援が行われている。
- ・特に、玄海町が独自に実施している経済的支援策は本取り組みの大きな柱となっている。町は「生活支援金」として全額町費による給付を行っており、この支給額は、他県の寮を持つ県立高校の事例や国の家計調査を参考に月額 3 万円と定められていて、現在は県内の遠方居住生徒にも適用可能な規定となっている。さらに令和 6 年度からは、導入に際して議会で慎重な意見もありながら、帰省費用の負担も開始された。

#### 【コンソーシアム活動への反映】

- ・県が「地域みらい留学」の参画費用を全額負担し、さらにコーディネーターや学校魅力化アドバイザーといった専門人材を配置する一方で、町が独自の「生活支援金」を支給するという役割分担が明確である。特に生活支援金は、全額町費で賄うことで解決しており、さらに令和 6 年度からは帰省費用の負担も導入されるなど、保護者の経済的負担を軽減する仕組みが整っている。伊香高校の県外生徒募集についても、県、市、学校、地域のそれぞれの役割分担を検討する必要がある。

### 3-3 新学科設置にともなった実施授業

#### ■授業計画（森の探究科開講「森のキホン」）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関(敬称略)
1	R7.5/7	春の樹木観察	17名 (1年生森の探究科)	三浦氏(森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員)
2	R7.5/21	森林生態系総論	17名 (1年生森の探究科)	籠谷氏(滋賀県立大学 講師) 遠隔にて実施
3	R7.5/22	奥琵琶湖・山門水源の森での生物多様性の調査	17名 (1年生森の探究科)	富岡氏・浅井氏(山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会)
4	R7.6/9	滋賀県の森林生態系総論	17名 (1年生森の探究科)	野間氏 (滋賀県立大学 准教授)
5	R7.7/11	大浦川での生態系調査	17名 (1年生森の探究科)	植田氏 (湖北野鳥センター)
6	R7.7/16	森林3D マップの活用を考える	17名 (1年生森の探究科)	藤井氏・井村氏・加藤氏・中山氏(株式会社デンソー)・上田氏(滋賀県立大学 特任講師)・小西氏(滋賀県環境保全課)・橋本氏(ながはま森林マッチングセンター)・前田氏(株式会社バイオマスアグリゲーション、菅山寺の森友の会)他
7	R7.9/8	夏の樹木観察	17名 (1年生森の探究科)	三浦氏(森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員)
8	R7.9/22	滋賀の林業総論	17名 (1年生森の探究科)	知田氏(滋賀県びわ湖材流通推進課)
9	R7.9/24	森林調査の基本(森林組合の仕事と調査、ドローン調査)	17名 (1年生森の探究科)	高橋氏 (滋賀県森林組合 伊香事業所)
10	R7.9/29	森林調査と森林管理(スマート林業とゾーニング)	17名 (1年生森の探究科)	古川氏・奥田氏 (滋賀県森林組合 伊香事業所)
11	R7.10/1	森林の計測・管理技術(森の健康度について)	17名 (1年生森の探究科)	山本氏(里山実験室 haremori)
12	R7.10/6	人工林の施業体験(枝払い、チェーンソー体験)	17名 (1年生森の探究科)	子林氏・東氏(木民)
13	R7.10/22	木材流通の現状と木材の規格	17名 (1年生森の探究科)	知田氏(滋賀県びわ湖材流通推進課)
14	R7.11/10	農薬の生態系の影響について	17名 (1年生森の探究科)	須戸氏 (滋賀県立大学 教授)

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関(敬称略)
15	R7.11/12	日本海と森林の歴史	17名 (1年生森の探究科)	堂満氏 (滋賀県立大学 准教授)
16	R7.11/13	木材流通現場・製材所・ 木材住宅見学	17名 (1年生森の探究科)	宇野氏(株式会社スンエン) 川瀬氏 他3名(内保製材 株式会社)
17	R7.11/17	秋の樹木観察	17名 (1年生森の探究科)	三浦氏(森の案内人、合同会 社 NiwaMori 代表社員)
18	R7.11/19	主伐見学	17名 (1年生森の探究科)	清水氏(滋賀県森林組合 北 部事業所)・湖周造林さま
19	R7.12/8	木材以外の価値づくり 入門	17名 (1年生森の探究科)	高橋氏 (滋賀県立大学 教授)
20	R7.12/10	森づくりと播種体験	17名 (1年生森の探究科)	清水氏 (タネカラプロジェクト)
21	R7.12/12	メディアアートの世界と 体験	17名 (1年生森の探究科)	竹本氏(紫洲書院) 唐神氏(メディアアーティスト)
22	R7.12/17	様々な森林・変化する 森林	17名 (1年生森の探究科)	籠谷氏(滋賀県立大学 講 師)遠隔にて実施
23	R8.1/14	森林における獣害の実 態と対策	17名 (1年生森の探究科)	高田氏 (滋賀県自然環境保全課)
24	R8.1/19	森林と防災	17名 (1年生森の探究科)	砂田氏 (滋賀県森林保全課)
25	R8.1/23	岐阜森林文化アカデミ ー訪問	17名 (1年生森の探究科)	吉野氏・松井氏 (岐阜森林文化アカデミー)
26	R8.1/26	野生生物の生態	17名 (1年生森の探究科)	須藤氏 (イーグレット・オフィス)
27	R8.1/28	冬の野鳥観察	17名 (1年生森の探究科)	植田氏 (湖北野鳥センター)
28	R8.2/4	森と人との関わりの歴 史・文化(地域)	17名 (1年生森の探究科)	横山氏・前田氏(高時川源 流の森と文化を守る会)
29	R8.2/6	琵琶湖博物館見学	17名 (1年生森の探究科)	奥田氏 (琵琶湖博物館講師)
30	R8.2/9	森と人との関わりの歴 史・文化(日本・世界)	17名 (1年生森の探究科)	三浦氏(森の案内人、合同会 社 NiwaMori 代表社員)
31	R8.3/10	持続可能な社会につい て	17名 (1年生森の探究科)	久木氏(バイオマスアグリゲ ーション)
32	R8.3/13	セーザイゲームで学ぶ 木材流通	17名 (1年生森の探究科)	川瀬氏 (内保製材株式会社)

## ■新学科開設にともなった実施授業

今年度より新学科「森の探究科」が開設し、それにともない学校設定科目「森のキホン」を開講した。実施にあたっては、県・市の職員、自然環境施設の職員、地域企業や事業者と連携し、各単元の目標とねらいを明確化し、各単元が森・川・里・湖がつながる県北部ならではのつながりをもった学びとなるよう工夫した。

### 3-3-1 春の樹木観察

#### (1) 活動目標

- 樹木は多くの生物の「住処」である生態系の基盤となる以外に、地球環境保全など多くの機能をもっている。本時は、1年を通じて樹木の観察を行うことで、多様な植物の生態や生存戦略を知り、自分と自然との接点を考える。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 5月7日：本校裏山

##### 【実施体制】

- 授業実施：三浦豊（森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

- 本校の裏山にて、日本の各地域で樹木ツアーを務める講師より、この時期に目立つ樹木の案内と解説を行っていただいた。具体的には、サクラ・スギ・モミジバフウ・シンジュ・クサギ・シラカシ・ケヤキなどの樹木が紹介された。



##### 【生徒の感想】

- 「サワグルミはクルミという名前がついているのに、クルミはできないなど、木についての話は、聞いていて楽しかった。」
- 「印象的なお話として、スギが葉のかたまりごと落として、他の植物の芽生えを邪魔していることや、サクラが他の枝に栄養を送るため「わざと」枯れているとは思いませんでした。高校が始まり一か月、これからもまだ知らないことをよく学んでいきたいと思いました。」

### 【成果と課題】

- 森林を構成する樹木の観察を丁寧に行い、葉や樹形などの違いに加えて、樹木の生存戦略を知ることで、多様な樹木を知る樹木観察の第一歩とすることができた。
- 多様な樹木の観察には、粘り強く観察し、細部と全体像や生態を関連付けて捉える力が求められる。本時以外の理科の授業等で、観察力を養っていく必要がある。
- 生徒のなかには、樹木の違いに興味・関心を持っていない生徒もいた。引き続き、様々な形で樹木を取り上げていくことで、樹木への興味・関心を引き上げていきたい。

### 【次年度への反映】

- 事前授業として葉の観察を行ったが、その対象を本時で取り上げた樹木の葉の観察を行うなど、事前授業と関連づけを行う。

## 3-3-2 森林生態系総論

### (1) 活動目標

- 森林は樹木や動植物、微生物などの生物に加え、空気や土壌、水などの非生物的環境が相互に及ぼし合いながら構成されている。本時は、今後学習を進めていく森林生態系の概要を知り、森林生態系の全体像を捉える機会とする。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 5月21日：本校

#### 【実施体制】

- 授業実施：籠谷泰行（滋賀県立大学 講師）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 講義室にて、講師の籠谷氏から琵琶湖集水域と森林生態系の概要について同時双方向による遠隔で講義を聴いた。



### 【生徒の感想】

- 「森林には様々な問題が起こっており、解決するために色々な調査が行われていることを知った。」
- 「人が手入れをしないと生き永らえない植物もあれば、人が手を出すことで生命が途絶える植物があることを知り、植物に興味を持つことができた。」
- 「森林について、学校で学習したこともあったが、新たに学んだこともあり、大学での学びを想像することができた。」

### 【成果と課題】

- 森林に関する学びを始めたばかりであるが、高校の学びと大学の学びのつながりを実感することができた。

### 【次年度への反映】

- 次回は、講師の大学での研究内容の紹介や大学生との交流もプログラムの中に入れることを検討する。

## 3-3-3 奥琵琶湖・山門水源の森での生物多様性の調査

### (1) 活動目標

- 山門水源の森は琵琶湖の源流となる森で、貴重な湿原を有し冷温帯と暖温帯の植物の接点であるなど、多様な植生をもつ生物多様性に富んだ場所である。今回の実習では散策を通じて、山門水源の森における生態系と管理者の保全の取組について学び、生物多様性の意義について考える。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 5月22日：本校、山門水源の森

#### 【実施体制】

- 授業実施：富岡明・浅井正彦（山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 富岡様より本校にて山門水源の森が中央分水嶺に位置していることや森の保全・管理が水を守ることに繋がることをご講義いただいた後、バスにて奥びわ湖・山門水源の森へ移動。2グループに分かれて森や湿地、断層跡など多様なフィールドを散策し、引き継ぐ会の方々より植生する多様な樹木や植物の生態・保全に関する講義を受けた。



### 【生徒の感想】

- 「様々なフィールドで、多くの見たことがない生物を見ることができ、森林や湿地といったフィールドの重要性を知ることができた。」
- 「照葉樹林であるアカガシと夏緑樹林であるブナが並んで生えているところを見学でき、貴重な植生を見ることができた。」
- 「ササユリなど人が手を入れないと生きていけない植物の存在を知り、人と自然の共存について考える機会となった。」

### 【成果と課題】

- 山門水源の森は、琵琶湖の源流となる森林であり、水源涵養機能や生き物の住処になるなど、森の多面的機能を体感することができた。
- 様々なフィールドが、生態系の保全に必要であることを体感することができた。今後は、フィールドの手入れや保全に関わる活動を行いたい。

### 【次年度への反映】

- 生物の多様性に関する学習は、多くの内容が想定されるため、実習と内容を精選してカリキュラムを考えていく。

## 3-3-4 滋賀県の森林生態系総論

### (1) 活動目標

- バイオームと森林の分類について理解する。
- 滋賀県の植生の特徴を理解する。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 6月9日：本校

#### 【実施体制】

- 授業実施：野間直彦（滋賀県立大学 准教授）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 講師の方より、バイオームと森林の分類についての基礎知識を聞いた後、滋賀県の植生の特徴について、気候と垂直分布、琵琶湖の影響をふまえて解説いただいた。



### 【生徒の感想】

- 「森林の分類について詳しく教えていただき、森林の見方を理解することができた。様々な場所の樹木や原生林を見てみたいと思った。」
- 「滋賀県はシイヤカシ、タブノキなどの照葉樹林が多く、特にタブノキは琵琶湖を海と間違っ生えているといった話が印象に残った。またブナやエゾユスリハは雪があることによって生えていることを聴き、天候が植生に与える影響についても知ることができた。」

### 【成果と課題】

- 森林の植生は気温や降水量、周辺の地形によって形成されることを知り、地域の植生を俯瞰して理解することができた。
- 滋賀県でよく見られる樹木を知り、滋賀県の植生の特徴を理解することができた。

### 【次年度への反映】

- 生物基礎の学習内容であるバイオームの内容と植生の理解と合わせて、地域の植生を理解するよう、教材やカリキュラムに工夫を施していく。

## 3-3-5 大浦川での生態系調査

### (1) 活動目標

- 琵琶湖の源流である山門水源の森から流れ出す大浦川は、琵琶湖の固有種であるビワマスの産卵が盛んに行われるなど、水生生物が暮らす貴重な場所である。昨年度同様に中流・下流に生息する底生生物と魚を調査し、河川の特徴とその生態系から森と川のつながりを見出すことを試みた。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 7月11日：本校、大浦川

#### 【実施体制】

- 授業実施：植田潤（湖北野鳥センター）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 大浦川の中・下流でたも網を用い、魚を捕獲した。捕獲した魚は、バケツにうつし、種類とその数を数える。また底生生物に関しては、ザルやアミを用いて採集し、種類ごとに分けて、種類と数を調査した。調査後、捕獲した魚や底生生物は、捕獲した場所に戻した。



### 【生徒の感想】

- 「市内の河川では見られない魚を多数観察でき、源流である山門水源の森とのつながりを知ることができた。」
- 「中流・下流での生物の様子が異なっており、生物の餌や水温条件による違いを感じた。」

### 【成果と課題】

- 魚類の分布は、中流ではカワムツ、下流ではウキゴリ、アユが多いという琵琶湖流入河川での一般的な分布が見られた。
- 下流では、ヤリタナゴも多く見られ、抽水植物が多く分布していることを反映した結果となった。
- 中流ではトンボ類の幼虫が多く、下流では砂主体の底質であったため、スジエビが多く見られ、河川食物連鎖の一端を見ることができた。

### 【次年度への反映】

- 河床の土砂の形状や水質、水生植物の違いがどのように生態系に影響を及ぼしているか、異なる季節や河川の調査を行うことで知見を積み重ねていく。

## 3-3-6 森林3D マップの活用を考える

### (1) 活動目標

- 森林課題の1つとして、世代交代や森林への関心の低下により、森林所有者の山林境界を把握できていないことや森林管理ができていないことがあげられる。本時は、株式会社デンソーが開発した3D マップの技術を活用し、今後の森林活用方法について考える機会とする。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 7月16日：本校

#### 【実施体制】

- 授業実施：藤井直樹・井村多加志・加藤大嗣・中山翔大（株式会社デンソー）  
上田洋平（滋賀県立大学 特任講師）・小西優斗（滋賀県環境保全課）  
橋本勤（ながはま森林マッチングセンター）  
前田壮一郎（株式会社バイオマスアグリゲーション、菅山寺の森友の会）他
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：教諭 富山昌彦

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 滋賀県立大学の上田氏より昔から現代に至るまでの山のなりわいと森林利用の歩みについて講義を受けた後、株式会社デンソーの藤井氏より自社で開発した3D マップ技術の概要を紹介。その後、グループでデンソーが作成した本校近辺の3D マップを閲覧。グループでその活用事例を検討し、全体でアイデアを共有した。



#### 【生徒の感想】

- 「大手企業が森林課題に対して積極的に取り組んでいることがすごいと思った。3D マップの精度も高く、積極的に活用事例を考えていきたい。」
- 「3D マップの活用事例を考えることは難しかったが、機械を背負って歩くだけでマップが作成できるのは簡単で良かった。個人的には、若い世代を対象に作成したゲームにすれば良いと感じた。」

#### 【成果と課題】

- 先進的な ICT 技術を身近に体感できる良い機会となった。これらの技術が、山林境界の把握や人手不足といった林業の課題に対して、効果的なアプローチとなることを学んだ。
- 本企画は、県・大学・企業・地元事業者との合同企画であり、産学連携の大きな一歩となった。森林課題という難しい課題に対して、それぞれの立場から知恵や技術を生み出しながら課題解決を図る姿勢は、森林課題以外の社会課題に対して必要となってくる。知識の習得以外に、課題解決への道筋を立てていく良い機会とすることができた。

#### 【次年度への反映】

- 出てきたアイデアを具体化し、高校生ならではの森林課題の解決に向けてアプローチしていきたい。

### 3-3-7 夏の樹木観察

#### (1) 活動目標

- 樹木は多くの生物の「住処」である生態系の基盤となる以外に、地球環境保全など多くの機能をもっている。本時は、春に続いて夏の時期に樹木観察を行うことで、樹木と森林の変化を観察する。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 9月8日：本校裏山

##### 【実施体制】

- 授業実施：三浦豊（森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 本校の裏山にて、日本の各地域で樹木ツアーを務める講師より、この時期に目立つ樹木の案内と解説を行っていただいた。春との違いを観察するため、シンジュやクサギ、シラカシ・ケヤキなどの樹木に加えてクマノミズキ・ハンノキ・ナツツタ・キササゲなどの樹木も新しく紹介された。



#### 【生徒の感想】

- 「春はフジなどの花が咲いていたが、夏はコナラの若葉が見れたり、シンジュやキササゲといった樹木が元気な姿だったのが印象的だった。」
- 「マツが崖に生えていたり、クマノミズキの特徴を聴き、春とは異なる樹木の過ごし方を知ることができた。」

#### 【成果と課題】

- 春とは異なる樹木や森林の違いを観察し、葉が茂り、花が咲くなど夏で目立つ樹木に対し、一方で枯れていく樹木など外からでは分からない森林の変化を観察することができた。
- 春の樹木の様子が思い出せない生徒もいた。季節ごとの違いをすぐに想起できるような工夫が必要である。

#### 【次年度への反映】

- 春の樹木の様子を、簡単なスライドショーでまとめたり、春との違いがすぐにわかるような配布プリントにしておくなど、教材に工夫を施していく。

### 3-3-8 滋賀の林業総論

#### (1) 活動目標

- これまで、生態系や地球環境の保全に、森林が大きな役割を担っていることを学習してきた。そこで、2学期より森林の役割や機能を保つ施業である林業について学習する。本時は滋賀県で林業・木材産業の振興対策を実施する県職員を講師としてお招きし、林業の概要や課題について学習する。

## (2) 実施概要

### 【スケジュール】

- 9月22日：本校

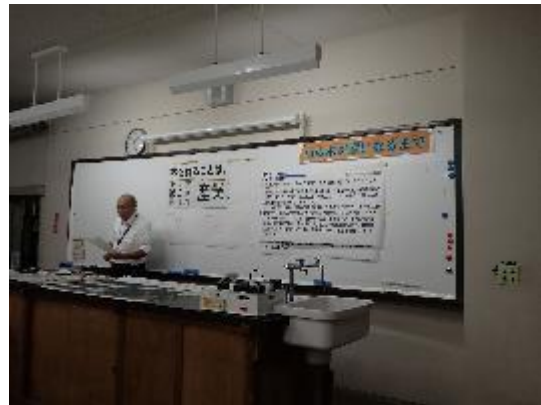
### 【実施体制】

- 授業実施：知田之宏(琵琶湖環境部 滋賀県びわ湖材流通推進課)
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

## (3) 活動実績

### 【活動内容】

- 林業の概要、木材流通の川上・川中・川下の各段階について詳しい講義を聞いた。
- 日本・滋賀県の林業課題について学習したが、特に滋賀県は伐採時期を迎えている木が伐られていない課題があり、木材の循環利用の重要性を学習した。



### 【生徒の感想】

- 「林業は木を伐るだけでなく、間伐や下刈りといった作業に加えて、流通や木材建築に携わることも林業であると知ることができた。」
- 「林業の循環の必要性について学んだが、そのなかで林業従事者の数が不足していることはとても大変なことだと思った。」

### 【成果と課題】

- 2学期のテーマとなる林業の概要について学び、今後の展開を見通すことができた。
- 本校が位置するこの地域は高齢化に加え、少子化も顕著である。そのため、林業の携わり方を、従来のイメージから拡充させ、林業を自然との対峙とのなかで考えていく必要がある。

### 【次年度への反映】

- 健康な森が少なくなった時のシミュレーションを行うなど、森が自分たちの生活にどれだけ影響を及ぼしているかを考え、今後どのように自分たちが森林と関わることができるかを考える。

### 3-3-9 森林調査の基本（森林組合の仕事と調査、ドローン調査）

#### (1) 活動目標

- これまで地球環境保持のため、森林資源の活用について学習を進めてきた。今回の実習では本校近辺の森林管理を行う森林組合の講師をお招きし、実際の森林調査の手法と森林組合の仕事内容について学習する。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 9月24日：本校

##### 【実施体制】

- 授業実施：高橋市衛（滋賀県森林組合 伊香事業所）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

- 森林管理において、樹木の成長度や材積の評価するための胸高直径や樹高の測定方法、近年進んでいるスマート林業の概要について学んだ。
- 講義後、実際の林業現場で行うレーザー測量を行い、教室の面積を測定した。そして森林組合で使用しているドローンの紹介も行っていただいた。



##### 【生徒の感想】

- 「木の直径や樹高の測り方を知ることができて良かったが、1本1本測定することは手間がかかると感じた。」
- 「広大な森林を管理するには、ドローンや人工衛星における技術を駆使しながら長期的な展望が必要であると思った。」

##### 【成果と課題】

- 木の直径や樹高の測定といったアナログ技術に加え、ドローンや人工衛星における先端技術を学ぶことができたが、単なる技術の紹介に終始した懸念がある。
- 森林管理を行っていくうえで、地域で森林事業に従事する森林組合の存在は必要不可欠である。授業でお越しいただいている講師の方々の役割や仕事を明示していく。

#### 【次年度への反映】

- ドローンや GIS などの技術の習得への道筋を検討する。
- 森林組合を含めた林業事業のやりがいや魅力を伝え、林業キャリアの道筋を立てていくことを検討する。

### 3-3-10 森林調査と森林管理（スマート林業とゾーニング）

#### (1) 活動目標

- 前回の授業で長期的に森林管理を行っていくうえで、ドローンや人工衛星における技術が必要不可欠であることを学習した。本時は、森林データを利活用するうえでの森林クラウドやゾーニングの活用について学習を行う。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 9月29日：本校

##### 【実施体制】

- 授業実施：古川修平(琵琶湖環境部 滋賀県びわ湖材流通推進課)
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：教諭 富山昌彦、臨時実習助手 伊藤利恵

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

- 講師より、持続的に森林を管理していくうえで欠かせない森林クラウドの概要と必要な情報ごとに作成された林相図や赤色立体地図等の紹介をしていただいた。その後、県が保有している本校近辺の森林データに触れ、最後森林データを用いたゾーニングの考え方をご教示いただいた。



##### 【生徒の感想】

- 「広範囲にわたる森林クラウドのデータは見ごたえがあった。属性ごとに作成された図をじっくり見てみたいと思った。」
- 「ゾーニングの考え方として、林業適地であっても管理する人の有無など人的ソースも同時に考える必要があると感じた。」

##### 【成果と課題】

- 森林管理を行っていくうえで、林業のスマート化は必要不可欠である。実際に蓄積された森林データを目の当たりにして、滋賀県北部が豊富な森林環境を有していること、スマート化の恩恵を体感できた。
- 森林クラウドに触れることで、森林の管理において巨視的な視点を得ることができた。一方でスケー

ルが大きいため、どのような活用を行うべきか、イメージしにくかった。

#### 【次年度への反映】

○本時で得た巨視的な視点をふまえながら、次回以降の森林計測や管理方法を学習し、森林との接し方を考えていく。

### 3-3-11 森林の計測・管理技術（森の健康度について）

#### (1) 活動目標

○地球環境の維持や森林資源の活用を有効的に行うには、人工林の適切な管理や保全が必要である。そこで本時は、森の健康度を測定することで、間伐等の効果的な森林の管理計画について考える。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

○ 10月1日：本校、本校裏山

##### 【実施体制】

○授業実施：山本綾美（里山実験室 haremori）

○対象生徒：1年生 森の探究科 17名

○企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

○山本氏より、樹木の概要と人工林としてよく利用されるスギ・ヒノキの特性、林業の循環についてご講義いただいた。

○講義後、裏山の森に移動し、注目した樹木の胸高直径、樹高、周囲の樹木との平均距離を測定し、間伐の必要性について考えた。そして、グループに分かれて10m四方に区切られた区間内で2種類の間伐方法（下層間伐・優性間伐）について、間伐する樹木の選定を行った後、グループで選定理由を発表し講師より講評を受けた。



##### 【生徒の感想】

○「間伐にあたって木の選び方が難しく、どのような森にしたいかを考えて、細い木、枯れた木、まっすぐじゃない木を切らなければならないことがわかった。」

○「やまのこ（小学校4年生）の時から間伐が必要でありどんどん間伐をしていけばよ

○「やまのこ（小学校4年生）の時から間伐が必要でありどんどん間伐をしていけばよいと考えていましたが、この授業を通してどの木を伐るかは所有者との兼ね合いで決まり、間伐は簡単にで

きるものではないことがわかった。」

#### 【成果と課題】

- 森の健康を調べる方法を理解し、森に対する見方を深めることができた。
- 間伐は林業の中でも重要な施業の一つであり、高校生にとって馴染みのない林業の一端を経験することができたが、間伐対象の樹木の選定には経験が必要である。

#### 【次年度への反映】

- 次年度も同様に実習を進め、講義中で行った森の健康度の算出方法を事前授業で行う。

### 3-3-12 人工林の施業体験（枝払い、チェーンソー体験）

#### (1) 活動目標

- これまで人工林の適切な管理方法について学習を進めてきた。そこで本時は、木材の収穫の体験として、枝払いとチェーンソーを用いた玉切りの体験を行う。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 10月6日：本校裏山

##### 【実施体制】

- 授業実施：子林葉、東逸平（木民）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：実習助手 伊藤利恵

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

- まず前回の授業で、間伐対象とした樹木を1本選定し、子林氏・東氏によりその樹木の伐倒が行われた。そして伐倒された樹木の枝払いをノコギリで行った。その際、ヘルメットを着用するなど安全面に十分な配慮を行ったうえで、チェーンソーを用いた玉伐りを行った。
- 一通り実習が終わった後、講師による木登り器とチェーンソーを用いた枝打ちを見学した。

##### 【生徒の感想】



- 「チェーンソーを使うのは力があるものだと思っていましたが、チェーンソーの重さで簡単に木を切ることができて、驚きました。」
- 「大きな木の伐採は、上の方から少しずつ伐るということを知れてよかった。命を懸けて林業を行っている割に講師の方がもらえるお金が少ないことを聞いて、林業従事者の待遇を上げる必要があると感じた。」

#### 【成果と課題】

- 林業に必要なチェーンソーを実際に使用し、大きな樹木を切断することができた。
- チェーンソーの使用の際には細心の注意が必要であるため、チェーンソーを用いた実習について展望をもつことが難しい。

#### 【次年度への反映】

- 玉切り体験以外に、農業現場での剪定作業の見学など、チェーンソーの用途について理解する機会を増やす。
- チェーンソーでの玉伐りに関心を持った生徒が多かったため、学校でチェーンソーの資格習得の機会を考える。

### 3-3-13 木材流通の現状と木材の規格

#### (1) 活動目標

- これまでに滋賀県の林業課題として、伐採時期にある樹木が伐られず、木材の循環が滞っていることがあげられている。そこで本時は、我が国の木材流通の現状を知り、木材流通の現状と課題について考える機会とする。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 10月22日：本校

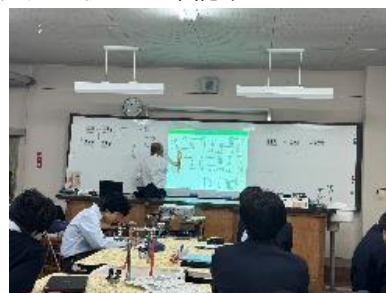
##### 【実施体制】

- 授業実施：知田之宏(琵琶湖環境部 滋賀県びわ湖材流通推進課)
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

- 講師より、我が国の木材流通の現状と課題に、一時期輸入材に押されて落ち込んでいた木材自給率が回復傾向にあること、素材の価格は低く、製品化しなければ利益は出ないことがあげられた。さらに国内の木材流通の課題として、流通が小規模で多段階に渡ることが指摘された。最後に、木材の品質や加工の仕方について説明を受け、加工と流通の流れを確認することができた。



#### 【生徒の感想】

- 「木材を山で伐採し搬出するだけでも大変なのに、加工まで行わないと利益が出ないことを聞き、林業の厳しさを改めて感じた。」
- 「ベニヤ板に加工するには、滋賀県には工場がなく他県に搬出していることを知り、需要と供給のバランスが保てていないのではと感じた。」

#### 【成果と課題】

- 間伐・主伐により生産された木材を木材消費者につなぐ流通現場の重要性と現状について知ることができた。
- 滋賀県の林業課題である木材循環について中間地点である流通現場の現状を理解することは重要であるが、その現場は数少ない。木材流通の課題を通して、林業課題を洗い直す必要がある。

#### 【次年度への反映】

- 国産材の需給を増やしていくうえで、木材流通の効率の良いシステムを考えていかなければならない。川上である伐採現場から木材価値を辿り、木材価値を視覚化することや他府県の流通システムを比較することで、滋賀県の林業価値を図っていきたい。

### 3-3-14 農薬の生態系の影響について

#### (1) 活動目標

- 農家にとって農薬は、品質の良い農作物を安定的に生産するうえで便利な資材であるが、その一方で農薬の基本的な作用から農薬に対してマイナスなイメージを持つ消費者も多い。そこで本時は、持続的な農業を考えるうえで、農薬の基礎知識を学び、農薬が抱える問題について考える機会とする。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 11月10日：本校

##### 【実施体制】

- 授業実施：須戸 幹（滋賀県立大学 教授）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

- 講師の方より、どのようなものでも許容量を超えると毒になること、致死量をどのように決めているかという毒に関する基礎知識を聞いた後、農薬の使用に際しての法令やリスク評価の方法について講義を聴き、農薬の安全性について考えた。



### 【生徒の感想】

- 「全てのものは毒になると聞き、何事もほどほどが大事だと感じた。特に農薬は、試験の厳重性や残留量に関する法律を定められていることを知り、農薬に関する考え方が変わった。」
- 「農薬も適切な量を利用することで大丈夫なのかなと感じた一方で、一つのものに頼りすぎないことや絶対に安全なものはないことを感じた。」

### 【成果と課題】

- 生活に欠かすことができない「食」と密接に関わっている農薬の知識を通して、食や持続的な農業、自然由来でない物質について考えることができた。
- 農薬に対する取り扱いで正解はなく、自分自身で調べて考えなければならない。答えのない問いを考える機会を得ることができた。

### 【次年度への反映】

- 2年次の「持続可能な社会」で農業を取り扱う予定であるため、その学習内容として本時の内容を組み込んでいく。

## 3-3-15 日本海と森林の歴史

### (1) 活動目標

- 滋賀県の環境は、過去2万年間の日本海の変遷を通して変化してきた。本時は、日本海の特徴をふまえながら、滋賀県の森林や琵琶湖がどのように変化しているか、学ぶ機会とする。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 11月12日：本校

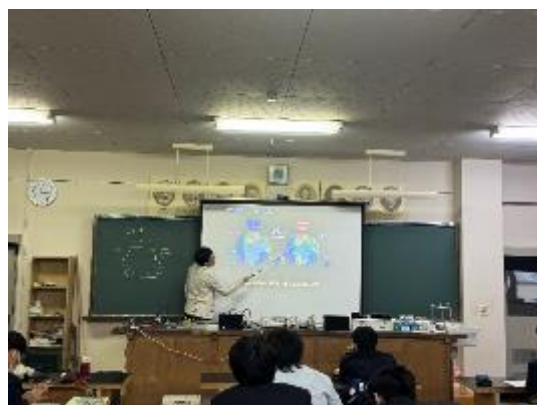
#### 【実施体制】

- 授業実施：堂満 華子（滋賀県立大学 准教授）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 講師より、日本海の地形的特徴の説明がされた後、現代と2万年前で森林環境や日本海の内部循環に変化が起こっていることが説明された。今後地球温暖化が進むと、内部循環が起こらず、底部に酸素が行き渡らない懸念があることを伝えられた。



#### 【生徒の感想】

- 「地球の気候の変化がもたらす日本海の変化が、滋賀県の植生の変化を生み出していくことは興味深かった。植生を考える際、周辺の環境とそれまでの変化に注目したい。」
- 「日本海からもたらされる雪によって生じる雪解け水が、滋賀県の多様な植生をもたらしていることは強く印象に残った。」
- 「日本海は、琵琶湖と同じように全層循環が起こっていることを知り、地球温暖化の影響が各地で起こっていることに怖さを感じた。」

#### 【成果と課題】

- 滋賀県の森林生態の変化が、日本周辺を取り巻く自然環境によって、ダイナミックな変化を遂げていることを長いスケールで捉えることができた。
- 日本海とその周辺の自然環境が密接に関わってきたことを学習し、これからの地球環境の変化を予測できることを学んだ。特に地球温暖化は、どのように環境に変化をもたらすか長期的な視点が必要であり、その因果関係を丁寧に見なければならぬ。

#### 【次年度への反映】

- 森林の樹種や日本海の生態系などの変化を日本海の変化と合わせて学ぶことで、環境の変化を視覚的にわかりやすい工夫を行う。

### 3-3-16 木材流通現場・製材所・木材住宅見学

#### (1) 活動目標

- これまで2学期のテーマである林業について、森林の手入れや木材流通のおおまかな流れについて学習を進めてきた。本時は、林業の川上と川中の中にある原木市場と、川中である製材工場、川下である木材住宅を見学し、林業の一連のサプライチェーンを学ぶ。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 11月13日：本校、株式会社スンエン、内保製材株式会社

##### 【実施体制】

- 授業実施：宇野吉生（株式会社スンエン）・川瀬文明 他3名（内保製材株式会社）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

- 原木市場である株式会社スンエンにて業務内容を聴き、規格ごとに分けられている木材を見学した。その後、内保製材株式会社にて製材工場とモデルハウスを見学し、林業の一連のサプライチェーンを学んだ。



### 【生徒の感想】

- 「木材の値の付け方が面白かった。競りの様子を見てみたいと思った。」
- 「授業で学習した通り、A から C 材に分類されていることを見学できた。また海外からも受注があることを聴き、木材の価値が上がっていけば良いと感じた。」
- 「製材場は木材を切るだけでなく、低温での乾燥や磨く機械の導入など、丁寧に木材と向き合っておられる様子が見えた。実際のモデルハウスでは、人の見えるところと見えないところで木材を使い分けていると聴き、木材利用の知恵と工夫を知ることができた。」
- 「木材をふんだんに使った建築がこんなに温かく安心できる家だと感じた。また家を買うときは、どんな人生を送りたいか考える時、という言葉聴き、住居の大切さを改めて感じた。」

### 【成果と課題】

- 貴重な現場を見学したことで、これまでの実習とあわせ、森林にある木がどのように木材として加工されて住宅に利用されるか、一連の流れを知ることができた。
- 講師として招いた林業関係者や工務店をキャリアとして想像することが難しく、このような仕事を身近に感じることができるよう魅力の発信が必要である。

### 【次年度への反映】

- 林業現場のサプライチェーンについて一連の現場を見てきてきたが、学びをどのように咀嚼するか、高校生としてどのような関わりができるか、新しい取組を考慮する必要がある。

## 3-3-17 秋の樹木観察

### (1) 活動目標

- 樹木は多くの生物の「住処」である生態系の基盤となる以外に、地球環境保全など多くの機能をもっている。本時は、春・夏に続いて秋の時期に樹木観察を行うことで、樹木と森林の変化を観察する。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 11月17日：本校裏山

#### 【実施体制】

- 授業実施：三浦豊（森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

○本校の裏山にて、日本の各地域で樹木ツアーを務める講師より、この時期に目立つ樹木の案内と解説を行っていただいた。春・夏に続いての観察で、スギ・シラカシ・モミジ・ケヤキなどの春・夏でも紹介された樹木に加えてイヌシデ・ムラサキシキブ・シロダモ・チカラシバなどの草本・樹木も新しく紹介された。



#### 【生徒の感想】

- 「この時期になると、葉を落としている樹木が多く、樹形を観察しやすかった。その一方で、春・夏の樹木観察では目立たなかったが、紅葉することで目立っている樹木もあり、季節による樹木の変化を観察出来て良かった。」
- 「どんぐりや松ぼっくりが落ちていたり、キノコが生えていたり、樹木以外の変化も楽しかった。冬にも来てみたいと思った。」
- 「イヌシデのような特徴的な樹木も印象的であったが、どこにでも生えている樹木も色々な場所に適応して過ごしていることに凄さを感じた。」

#### 【成果と課題】

- 夏とは異なり、葉を落としている樹木が多く、そのおかげで樹形をしっかりと観察することができた。また秋らしく紅葉している樹木もあり、森林のなかで存在感を発揮している草本・樹木を観察することができた。
- 春・夏の樹木の様子が思い出せない生徒もいた。季節ごとの違いをすぐに想起できるような工夫が必要である。

#### 【次年度への反映】

- 春・夏の樹木の様子を、簡単なスライドショーでまとめておいたり、春との違いがすぐにわかるような配布プリントにしておくなど、教材に工夫を施していく。

### 3-3-18 主伐見学

#### (1) 活動目標

- これまで森林資源の活用に関する学習を進めてきた。特に滋賀県では、戦後の昭和 20～40 年代の拡大造林で植林された森林が伐期を迎えており、森林資源を収穫して再造林を実施する主伐・再造林の施策がとられている。本時では、木材利用循環のなかの主伐現場を見学し、滋賀県の森林・林業の特徴や現状を知る。

## (2) 実施概要

### 【スケジュール】

- 11月19日：本校、主伐現場

### 【実施体制】

- 授業実施：清水悟司（滋賀県森林組合 北部事業所）・湖周造林2名
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦

## (3) 活動実績

### 【活動内容】

- 主伐の現場にて、講師の方々からチェーンソーによる主伐と玉伐り、プロセッサによる枝払い・玉伐り、フォワーダーでの玉伐りした木材の搬出を見学した。最後に、講師の方から林業の現状と課題について話を伺った。



### 【生徒の感想】

- 「チェーンソーによる伐倒は迫力があつた。講師の方の手際の良さが際立っていた。」
- 「林業機械は高価であるが、玉伐りする長さも設定出来たりと、非常にハイテクであつた。あの機械を使いこなせると楽しいだろうなと感じた。」
- 「林業は、人手不足や重機が入れない場所があるというようなスマート化を推し進められない課題がありながら、実際に林業に携わっておられる姿を見れて良かった。」

### 【成果と課題】

- 林業の主たる施業である主伐・収穫現場を見学し、これまで体験した間伐・枝払いと合わせ林業の一連の施業を知ることができた。
- 昨年度に続き、主伐は森林組合の方々長い見通しを持った計画のもと実施されるため、見学できたこと自体が幸運であつた。実際の現場見学以外の主伐学習を検討する必要がある。

### 【次年度への反映】

- 主伐現場の見学フィールドを探しながら、動画視聴など主伐のライブ感を意識した学習方法の検討を行う。

## 3-3-19 木材以外の価値づくり入門

### (1) 活動目標

- 森林には地球環境の保全や保健・レクリエーションなどの多面的機能と呼ばれる役割を果たしている。しかし、これらの多くはお金に換えにくく、価値があるのに価値として扱われないという問題がある。本時は、木材以外の森の恵みをどのように価値として伝えられるのか、消費者として森にどのように関わることができるか、考える機会とする。

## (2) 実施概要

### 【スケジュール】

- 12月8日：本校

### 【実施体制】

- 授業実施：高橋卓也（滋賀県立大学 教授）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

## (3) 活動実績

### 【活動内容】

- まず、森林の多面的機能に関する知識の整理を行い、その恵みによってもたらされる価値とお金に換えにくい理由や課題について考えた。その後、どうすれば価値を伝えられるか、国内や海外の事例をもとにアイデアとプランの創出を行った。

### 【生徒の感想】

- 「物質生産機能や保健・レクリエーション機能以外で森林の価値をお金に換える方法が分かりませんでした。本日の授業で例を示していただいて勉強になった。」
- 「森林の価値がわかりにくく、気づかれないことが問題であると感じた。森林の価値を魅力とともにお金に換える仕組みを考えていきたい。」

### 【成果と課題】

- 本時のワークを通して、森林の価値を伝え、お金に換えることは難しいことがわかった。本時の1コマでは、アイデアやプランを考える時間が少なく、中途半端な出来に終わってしまった。

### 【次年度への反映】

- 2年次の「森の恵み」や「持続可能な社会」の学習や課外活動のなかでアイデアの創出に取り組んでいきたい。



## 3-3-20 森づくりと播種体験

### (1) 活動目標

- 現在、琵琶湖源流域に広がる成熟段階の森林が、シカの食害によって天然更新が阻まれ、下層植生がほとんどない状態となっている。そのような状況を食い止めようと、地域の森林を地域のタネとヒトで再生する取組を行うタネカラプロジェクトの方を講師にお招きし、その取組について聞き、タネから関わる森づくりを行う。

## (2) 実施概要

### 【スケジュール】

- 12月10日:本校

### 【実施体制】

- 授業実施:清水美里 (タネカラプロジェクト)
- 対象生徒:1年生 森の探究科 17名
- 企画:実習助手 伊藤利恵

## (3) 活動実績

### 【活動内容】

- 講師より、タネカラプロジェクトの活動について紹介していただき、用意していただいた種子からその植物の生存戦略を考えた。その後、伊香高校の敷地内で事前に拾った種子を播種し、タネが芽吹く様子を観察する準備を行った。



### 【生徒の感想】

- 「色々な植物の種を実際に触って植えることができ、実際の芽吹きが楽しみ。そのなかで冬場の過酷な環境を、どのように植物が超えていくのか気になった。」
- 「普段見る大きな樹木がタネから育つ姿は想像できない。講師の方は、その活動を長期的な目線で行っておられるが、昔の林業従事者は、同じような目線で林業に携わっておられたのではないかと感じた。」

### 【成果と課題】

- 色々な種子に触れたことで、芽吹く段階での多樹木の生存戦略の多様性を考えることができた。
- 身近にある森林を管理・整備するだけでなく、種からの森づくりを行うというある種大きな実験を行うことができた。途方もない道のりであるが、森づくりに欠かせない長期的な目線を持つことができた。

### 【次年度への反映】

- 生長過程の観察を定期的に行いながら、タネカラプロジェクトの一端を高校生が行っていく。

## 3-3-21 メディアアートの世界と体験

### (1) 活動目標

- IoTの基本構造を学び、それを自分で作ることを通じて、身の回りにある「モノ」が動く仕組みを論理的に理解する力を養う。
- アートとエン지니어リングという一見すると異なる分野が、ひとつの作品において密接に結びついていることを理解する。

## (2) 実施概要

### 【スケジュール】

- 12月12日：本校

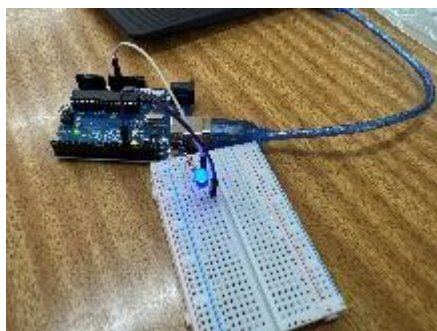
### 【実施体制】

- 授業実施：竹本智志（紫洲書院）・唐神一樹（メディアアーティスト）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：教諭 富山昌彦

## (3) 活動実績

### 【活動内容】

- 前半は、音をビームのように飛ばす「パラメトリックスピーカー」や、光で距離を測る「LiDAR センサー」など、普段触れることのない特殊なデバイスを体験した後、IoTの基本原理を学び、実際にAIを活用した電子回路の設計を行った。
- 後半は、講師の方のキャリアパスをもとに「メディアアート」についてのトークセッションを実施。その後、講師の方が作成したアート作品を見学、アート作品のコンセプトやその技術・仕組みについて解説いただいた。



### 【生徒の感想】

- 「スピーカーの原理を知ることによって、アート作品にまで昇華できることを知れた。原理に基づく基礎知識は必要だと感じた。」
- 「生成AIによって、簡単にLEDの光り方をコントロールできたことは驚いた。AIの活用によって、様々な分野で進歩が爆発的に進歩したことを体験できて良かった。」
- 「現代美術や抽象画などはよくわからないと感じていたが、今回の体験でその見方について知ることができた。」

### 【成果と課題】

- 近年話題となっているメディアアートの技術や舞台裏を知ることができ、アート作品の理解や造詣を深めることができた。
- アートは表現の手段として有効であるが、見る側の感性や素地によって理解が難しい場面もある。様々な作品を見ることで、作品の理解や許容を深めていく必要がある。

### 【次年度への反映】

- 森の表現としてアートを活用することは有効である。形式を模索しながら、文化祭等で作品作りに挑戦する。

## 3-3-22 様々な森林・変化する森林

### (1) 活動目標

○私たちの周りには、場所や条件によって様々な森林があるが、時間経過による遷移や、マツ枯れ・ナラ枯れなどの病気、シカなどの動物による影響といった自然変化に加え、人の手による影響によっても変化が起こる。講師の方の調査から、どのように森林が変化してきたかを知り、森林の変化について考える。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

○ 12月17日：本校

#### 【実施体制】

- 授業実施：籠谷泰行（滋賀県立大学 講師）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

○講師から森林植生の分布と分類の基礎知識の講義後、本題である森林が変化する要因と調査フィールドでの樹種変化に関する調査結果とその要因に関する考察を聴いた。

#### 【生徒の感想】

- 「森林は地球温暖化などの環境の変化以外に、虫によるナラ枯れやマツ枯れなどによって特定の樹木が病気になることを知った。被害の抑え方が気になった。」
- 「マツ枯れが起こっても他の樹木が増え、樹木どうしでカバーし合っていることがわかった。一見わからない森林のなかでも変化が起こっていることを知った。」

#### 【成果と課題】

○変化が見えにくい森林を、動的なものとして捉えることができた。それと合わせて、森林を取り巻く環境の変化を見ることで、これからの森林の有り様や保全の仕方について考えることができたが、局地的に点在する森林の長期的なモニタリングは難しく、森林を保全するうえでは関係人口を増やしながら、知恵を出し合う必要がある。

#### 【次年度への反映】

○講師の研究結果をもとに、樹種ごとの長期的な変化の知見を積み重ね、様々な森林に対しての適切な対応を考えていく。

## 3-3-23 森林における獣害の実態と対策

### (1) 活動目標

○近年、クマによる人的被害やシカによる食害が取り沙汰されて、野生動物と人との距離が難しくなっている。特に、米原市にある伊吹山はシカの深刻な食害によって植生が失われ、土砂災害も発生している。本時は、野生動物の生態と実際の被害を知り、滋賀県が取り組む獣害対策と野生動物と人との距離について考える機会とする。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

○ 1月14日：本校

#### 【実施体制】

- 授業実施：井上流翠、井上琳（滋賀県琵琶湖環境部 自然環境保全課）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：実習助手 伊藤利恵

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 野生動物の代表であるツキノワグマとニホンジカの生態をもとに、実際の獣害被害とその原因について考えるグループワークを行った。そして、滋賀県が取り組む獣害対策、またジビエといった活用を聴き、野生動物と人との共存の在り方について考えた。

#### 【生徒の感想】

- 「野生動物による獣害がクローズアップされているなかで、何とか動物と関係を構築し直そうとしている取組は素晴らしいと感じた。自分にでも取り組めることを考えていきたい。」
- 「獣害の問題は、人的なものと環境の変化でバランスが崩れてことによって生じたことを知った。どちらにも原因があるので、解決に向けて人と動物との距離を探っていきたい。」

#### 【成果と課題】

- 獣害問題というネガティブなイメージが広がるなか、動物の暮らしをベースに、被害の実態と対策について考えることができた。本学科の生徒達は、生物に関心のある生徒が多く、強い関心をもって取り組んでいた。また、散策している共有林でも駆除用の罠が仕掛けられていたり、自宅の畑の農作物が被害にあったりと、獣害は身近な問題であることもより自分事として捉えるきっかけとなっていたようである。

#### 【次年度への反映】

- 生徒達の興味・関心をより引き出せるよう、担当者と講義内容を深めていく。特に、担当者の部署で行っている滋賀県の駆除計画や滋賀県の種ごとの獣害被害数の推移など、データを見ながら獣害の現状について深く考察していきたい。
- ジビエの活用や生息環境管理など、高校生が取り組める対策を検討する。

## 3-3-24 森林と防災

### (1) 活動目標

- 日本の治山事業は、森林の持つ土砂災害や水源涵養といった多面的な機能を発揮・維持するために非常に重要であるが、治山施設の老朽化や気候変動に伴う災害の激甚化・頻発化、林業の衰退などの様々な課題を抱えている。そこで、本時は山地災害と治山事業について知り、土木工事や植栽による森林の保全について考える。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 1月19日：本校

#### 【実施体制】

- 授業実施：東出浩典、砂田学（滋賀県琵琶湖環境部 森林保全課）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

○山地災害の種類や日本が山地災害の多い国である原因、全国の治山事業例と滋賀県の山地災害例を学んだ。特に滋賀県は、伊吹山における草原植生の衰退が顕著であることから、植生の復元に力を入れて行っていることや、平成25年に台風による豪雨災害に見舞われた下戸山が山腹工事によって10年後には森林が復元した事例が紹介され、森林保全には治山事業が欠かせないことを知ることができた。



#### 【生徒の感想】

- 「気候変動以外に、人工林の管理不足や盛土・切土による影響によって土砂災害が起こることを知り、治山事業も目的によって行われていることがわかりました。高校生の自分たちにできることを考えていきたい。」
- 「実際の地滑りや土砂災害の映像を見ると想像以上に被害が大きく、特に大雨後に土砂災害が多いとおっしゃっておられたので、気をつけなければならないと感じた。」

#### 【成果と課題】

○土砂災害や地滑りといった山地災害の恐ろしさを、日本ならではの地形や切迫する気候変動、林業従事者の減少など、複合的な課題から考えることができた。このような課題対応として、治山事業という馴染みのない土木事業の重要性を知り、人の手で自然を保全する意義について考えることができた。

#### 【次年度への反映】

- 豊富なデータ量と馴染みのない土木工事の話が中心であったため、生徒の理解が追い付いていない様子が見受けられた。治山事業の目的を考えることに焦点をあて、人の手で森を保存・再生させる意義について考えていきたい。
- 治山事業の課題や治山事業の変遷についても、内容に取り入れることを検討する。

### 3-3-25 岐阜森林文化アカデミー訪問

大雪による交通障害により次年度に延期

### 3-3-26 野生生物の生態

#### (1) 活動目標

○イヌワシは日本の生態系の頂点に立つ大型猛禽類であり、豊かな自然のバロメーターである。しかし、現在イヌワシの日本国内の生息数は500羽程度とされ、絶滅の危機に瀕している。本時は、長年伊吹山にてイヌワシなどの野生生物と環境の観察を行ってきた講師を招き、人と野生生物の共存について考える機会とする。

## (2) 実施概要

### 【スケジュール】

- 1月26日：本校

### 【実施体制】

- 授業実施：須藤明子（イーグレットオフィス）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

## (3) 活動実績

### 【活動内容】

○講師の活動を簡単にご紹介いただいた後、本題であるイヌワシが減っている現状についてご講義いただいた。イヌワシは人工林の増加や大規模なダム開発など的人為的な影響によって狩場が減少し、個体数が大きく減っていった。また自然環境破壊の危惧があるダム開発においては、環境アセスメントの問題点や、県や市といった行政の理解が大きいことを指摘された。また講師は、イヌワシの撮影を行うカメラマン問題を解決するため、イヌワシの巣を見守るライブ中継の取組を紹介され、最後に生態系の保護には、一つ一つの生命だけでなく、野生動物全体の生命と生命のつながりを大切にすることを伝えられた。



### 【生徒の感想】

- 「貴重なイヌワシが自然環境や人為的な影響によるエサ不足で減っていることを知り、悲しく感じました。観察会をされていると聞いたので、参加して何かできるかを考えたい。」
- 「野生動物の生と死はつながっており、そのなかに人間との関わりがあると感じた。自然と関わりながら、生態系を守ることを考えていきたい。」

### 【成果と課題】

- これまでの学習では、森林生態系という大きなまとまりのなかで学習を進めてきたが、本時はイヌワシという貴重な生物に焦点をあて、その変容を通じて生態系の保全について考えることができた。
- 講師より日本の環境アセスメントの難しさが指摘され、日本の環境問題の課題が浮き彫りになった。地域の環境問題は、地球規模の自然環境や経済活動ともつながっており、複雑な連鎖のなかで捉える難しさを実感した。

#### 【次年度への反映】

○イヌワシを含めた自然環境の保全には、地道な取組の発信が必要である。まず講師が主催している観察会に参加し、貴重なイヌワシが生息する伊吹山の環境保全を訴える取組につなげていく。

### 3-3-27 冬の野鳥観察

#### (1) 活動目標

○本校が位置する滋賀県は世界有数の古代湖である琵琶湖を有している。その琵琶湖は数多くの水生生物の住み場所となっているほか、越冬のため多くの渡り鳥が飛来するなど、日本で見られる種の半分以上が観察される国内有数の野鳥の宝庫である。そこで本時は、多種多様な野鳥観察の手法を習得し、野鳥が生態系にどのような影響を与えているか学ぶ機会とする。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

○1月28日：本校

##### 【実施体制】

○授業実施：植田潤（湖北野鳥センター）

○対象生徒：1年生 森の探究科 17名

○企画：教諭 富山昌彦

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

○センター館内にて、琵琶湖を見渡せるライブカメラを見ながら、サギやカモ、ヒシクイなどの野鳥の特徴と識別方法について説明をうけた。次に、館内に設置された望遠鏡にて2人1ペアで野鳥の観察を実践し、観察された野鳥を全体で共有した。その後、バスにてセンター近くの水田で過ごすコハクチョウの群れを観察、数のカウントを行い、さらに山本山の麓へ移動し双眼鏡でオオワシの観察を行った。



##### 【生徒の感想】

○「野鳥1匹1匹の個性や特徴が分かり、特に湖北地域で暮らすコハクチョウやオオワシのカッコよさは感動した。」

○「琵琶湖は野鳥にとってエサや気候など過ごしやすい環境であることがわかり、この貴重な環境を守っていきたくと思った。」

##### 【成果と課題】

○短時間の滞在であったが、豊富な野鳥が観察でき、貴重な琵琶湖の環境を認識することができた。特にヒシクイやコハクチョウ、オオワシは滋賀県では湖北地域でのみ観察できる野鳥であり、湖北地

域の豊かな環境を体感できた。

#### 【次年度への反映】

○本時のスケジュールを踏襲しながら、琵琶湖で生息する野鳥が琵琶湖や森林の生態とどのように関係しているのか学術的な観点から学習や調査を行う。

### 3-3-28 森と人との関わりの歴史・文化（地域）

#### (1) 活動目標

○長浜市余呉町には、かつて福井・越前へと続く琵琶湖・淀川の最源流、高時川沿いに畿内と北陸を結ぶ北陸道として旅人たちが行き交った「奥丹生谷」に位置する7つの村があった。この源流域では、トチノキの巨木やブナの森が残されており、豊かな自然と共生する山村文化が息づき、数々の文化や技術が根付いていた。しかし、高齢化によって森林の保全・管理は困難となり、加えて高度経済成長期による燃料革命やダム計画の影響で各村々は1995年までに廃村した。本時は当時奥川並に暮らしていた方を講師に招き、当時の暮らしや森と人との接し方を聴きながら、これからの森との関わりについて考える機会とする。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

○2月4日：本校

##### 【実施体制】

- 授業実施：横山屯・前田壮一郎（高時川源流の森と文化を継承する会）
- 対象生徒：1年生 森の探究科17名
- 企画：臨時実習助手 伊藤利恵

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

○講師の横山氏の自己紹介を行った後、当時の山村での食べ物や服、遊び方を想像するワークを行った。そして講師が当時の村や家の中の写真、間取りを紹介しながら、当時の生活についてお話しされ、最後に現在の変化した森の様子について言及された。



##### 【生徒の感想】

- 「野ウサギやクマを食べていたなど自分では想像できない暮らしで、大変だったと思いますが、山を自由に駆け回って遊ぶのは楽しそうだったと思った。」
- 「冬を越すために秋から食べ物を準備したり、衣服を一から繕ったりと、普段の生活は大変そうですが、村の人達と協力しながら生活されていたことは素晴らしいと感じた。」

### 【成果と課題】

○消滅していく山村の暮らしについて伺い、時代の変化の速さを体感するとともに、現代では人と森、自然の距離が遠くなっていることがわかった。一方で現代とは非常にかけ離れた生活であったため、自分の生活と切り離して考えてしまう生徒も見られた。

### 【次年度への反映】

○当時と現代の暮らしを比較しながら、それぞれの暮らしの良さや問題点をあげて、当時と現代の暮らしに接点を持たせていく。また生徒と講師がより対話的になるよう、質問時間を多めに設定するなど、山村で過ごしてきた人々により強い関心を持たせる。

## 3-3-29 琵琶湖博物館見学

### (1) 活動目標

○琵琶湖博物館の展示見学や屋外での樹木観察を通じ、滋賀県の森林の成り立ちや現状を学ぶ。特に、日本最大の湖である琵琶湖の水源としての森林の重要性、人工林管理の必要性、および現代の林業が直面している経済的・構造的な課題について理解を深めることを目的とする

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

○ 2月6日：琵琶湖博物館

#### 【実施体制】

- 授業実施：奥田岬（琵琶湖博物館講師）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 屋外展示であるびわ博にて、常緑広葉樹林(照葉樹林)を観察した。シラカシやスタジイに加え、滋賀県では珍しいタブノキ(竹生島に自生)や、新旧の葉が入れ替わる様子から「譲り葉」の名がついたユズリハなどを確認した。
- 屋内展示では、滋賀県の森林や林業の課題を学習した。人工林は適切に間伐(かんばつ)を行わないと、木がひょろ長くなり、日光が遮られて下草が生えず、土砂災害のリスクが高まることを展示から理解した。

#### 【生徒の感想】

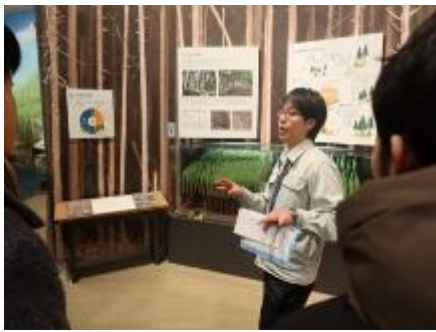
- 「琵琶湖の固有種は現在の琵琶湖ができた 40 万年前から枝分かれした種類が多数いる事を知った。このことから、琵琶湖の固有種がいつからどのようにして琵琶湖が入ってきたのか詳しく調べたい。」
- 「昔の森を再現エリアではたくさんの生物が棲んおり、昔の森の豊かさを知ることができた。また森を上から眺めることで、細かい葉の部分を見ることができるなど、展示に工夫がされていて楽しかった。」
- 「これまで森のキホンの授業で学習したことを、実際の魚や森の展示物を通して復習することができた。魚も豊富で、林業の大切さを改めて学ぶことができた。」

### 【成果と課題】

- これまでの学習を復習する良い機会となった。また琵琶湖博物館に行ったことがない生徒もいたため、琵琶湖の貴重な生物や資料を見学することができた。
- ボリューム感のある琵琶湖博物館の展示を全て時間内に見学することができず、嘆く生徒がいた。展示見学の時間をより長くとることや、エリアを限定して見学を行うことを検討する。

### 【次年度への反映】

- これまでの実際の伐採現場や製材所の見学を通して、川上(山)から川下(消費)までの「木材の価値の繋がり」を学んできたことを活かして、ゆくゆくは森の探究科で琵琶湖博物館の一部に展示を行うことや、これまでの学習を通して得た知識に基づき博物館の見どころをまとめるなどの活動につなげていく。



## 3-3-30 森と人との関わりの歴史・文化（日本・世界）

### (1) 活動目標

- 人々の暮らしや文化のなかで、どのように森と関わってきたか、その変遷について考える。  
そのなかで、日本と世界における森と人との関わり方の違いについて理解する。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 2月 9日：本校

#### 【実施体制】

- 授業実施：三浦豊（森の案内人、合同会社 NiwaMori 代表社員）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也、臨時実習助手 伊藤利恵

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 日本全国の森を歩く三浦さんから日本における森林と人との関係性と、エストニアでの森と人との関係性について、講義して頂いた。数万年前から、人は調理や暖房ど生きる道具として、木や火を使っていた。日本は、マキやシバを貴重な燃料として多くの木を伐ってきたため、はげ山も多かった。しかし、エネルギー革命以降、木の利用は極端に減り、「人と森のつながり」も減ったことで、森への「関心」が激減している。一方、エストニアでは、隣地の森で散歩やキノコ採りをすることができ、サウナが文化となるなど、人と森は身近な存在である。日本とエストニアの文化の違いを知ることで、人と森の強いつながり、また森からの恵みの恩恵を知る時間となった。



#### 【生徒の感想】

- 当たり前だけど、今と昔では、森との関わり方が全く違うことがわかり、昔の日本に行ってみたくなった。そして、エストニアの森との関わりや山のことを幅広く知り、森を貴重な資源として活用していることがわかり、森に対してさらに興味を持つことができた。
- 今日の講義を聴き、かつての日本の森の接し方を知ると、現在とても異常なことが起こっているのだと、改めて感じた。

#### 【成果と課題】

- 2月4日に行った「森と人との関わり（地域）」で横山さんからお聞きした話を、長い日本の歴史と照らし合わせて話をして下さったので、人と森のつながりについて、大きな流れのなかで整理することができた。

#### 【次年度への反映】

- 「森と人の関係性」を歴史的に学ぶことは、これからの「森林」との関わりを学ぶ上で非常に大切である。次年度以降、本時の内容は「森の探究科」の学びの目的と方向性を示すため、森のキホンの導入として位置づける。

### 3-3-31 持続可能な社会について

#### (1) 活動目標

- 日本は、2050年までに温室効果ガスの排出を全体として実質ゼロとするカーボンニュートラルを目指すことを宣言している。そのなかで、再生可能エネルギーを利用するなど、二酸化炭素の排出を抑制することは急務となっている。そこで今回の講義では、地域でバイオマス事業に取り組み、地域振興に携わっておられる講師をお招きし、エネルギー事業を通じた街づくりについて考えるきっかけとする。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 3月10日：本校

##### 【実施体制】

- 授業実施：久木裕（バイオマスアグリゲーション）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 講師の専門であるバイオマスに関する基礎知識やバイオマスエネルギーの利点、ヨーロッパと日本での普及率の違いについてご講義を受けた。その後、講師がバイオマス事業に携わることとなったきっかけや現在展開している事業についてお話を伺い、生徒たちが今後のキャリアを考えるきっかけを頂いた。



#### 【生徒の感想】

- 「バイオマスは石油よりも熱効率が高いことが意外で、チップからエネルギーを生み出せることに驚いた。」
- 「長浜から毎年、エネルギー関連の経費が 300 億ほど流出していることに驚き、エネルギーにひもづけてお金や人を循環させることができることを知った。」

#### 【成果と課題】

- 講師のキャリアを通して、バイオマス事業という一見なじみのない分野が、仕事やお金ひいては地域の活性化につながっていくことを知った。事業づくりには、持続可能な仕組みが必要であることがわかった。
- 地球環境の維持には、自然保全や地球温暖化防止など様々な方法がある。本時の内容は、再生可能エネルギーを通じて持続可能な地球環境の維持をはかっていく取組であり、生徒達が今後どのように自然と接していくか、進路をふくめて考える良いきっかけとなった。

#### 【次年度への反映】

- 本時の内容は、2年次の学校設定科目「持続可能な社会」につながる内容であった。次年度も引き続き、この内容を踏襲していきたい。

### 3-3-32 セーザイゲームで学ぶ木材流通

#### (1) 活動目標

- 2学期の授業テーマは林業とし、「山の木が家になるまで」という流れで、森林の育成や管理、収穫から販売(木材流通・製材・木造住宅)と、川上から川下までの一連の流れを学んできた。今回は、その集大成として「製材所の経営」をテーマとしたカードゲームを行い、製材の内容や木材の品質、売り上げの向上などについて、学びを深めた。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 3月13日：本校

#### 【実施体制】

- 授業実施：川瀬文明、本庄正則、稲川玄樹（内保製材株式会社）
- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 企画：臨時教諭 大久保卓也、教諭 富山昌彦、臨時実習助手 伊藤利恵

### （3）活動実績

#### 【活動内容】

- 講師の川瀬様から林業の流れや製材所の仕事内容、良い木材の見方など解説を頂いて、4 チームに分かれてカードゲームを実施した。ゲームは、①セリ：原木を買う②製材する③製材品を販売する、という 3 つの流れになる。原木の良し悪しを見極めて、高い利益を出すことを目的に競い合った。最後にまとめとして、製材のやり方や日本の木造建築の中での木材の使われ方などを講義頂いた。

#### 【生徒の感想】

- 「セリ」を経験することはほとんどないので、貴重な経験をすることができました。良い木材が買えた時は、とても嬉しかったです。とてもおもしろく、楽しく、学ぶことができました。
- ゲームを行って、原木を買い、製材する大変さを感じました。原木の値段を上げすぎると利益が出ないので、お金を儲けることはとても大変でした。でも、節のことも詳しく知れて、良い時間になりました。

#### 【成果と課題】

- 各チームが「木之本工務店」「ベイウッド」「服部工務店」などチーム名をつけて、「工務店運営」を行った。木材価格も実際の価格と近い金額であったので、リアリティーが高く、班内で協力をして売り上げを目指すことに一丸となり、非常に盛り上がった。
- 良い木材とは「節」の有無がポイントであり、節が無い(ムジ)材だと単価が高くなる。また、いろんな大きさの部材を効率良く配置して、無駄な部分を減らすことで木材品の売り上げを伸ばすことができる。これら節の見極めや歩留まりの重要性について、ゲームを通して実感し、考えることができた。
- 生徒が好む「カードゲーム」という側面からも、非常に盛り上がった。目標に向かって協力する、チームビルディングを高める面が見られた。
- 木材を販売するという「経済」の視点を強く意識することができ、非常に有意義な授業となった。

#### 【次年度への反映】

- 林業の学びの最後に位置付けることで、森林管理における「枝打ち」の重要性など、林業全体を振り返ることができ、「森のキホン」の最後の授業として非常に良かった。次年度も継続していきたい。
- このカードゲームは、木材の品質や木造住宅の基礎的なことも含んでいたため、2 年時に行う「森の恵み」の木材加工の授業などにつなげていきたい。



### ■授業計画（森の探究科開講「総合的な探究の時間」）

	時期	取り組み内容	実施生徒	協力機関(敬称略)
33	R7.4/24 -5/8	1本の樹木と友達になろう	17名 (1年生森の探究科)	副島氏・中井氏（コーディネーター）
34	R7.5/29 -7/15	山門水源の森で気になったことを調査しよう	17名 (1年生森の探究科)	副島氏（コーディネーター）
35	R7.8/27 -9/25	能登半島地震の今を調べよう	17名 (1年生森の探究科)	大林氏・速水氏・柴田氏（長浜ライオンズクラブ）・副島氏（コーディネーター）
36	R7.10/2 -12/19	木工作品で身の周りの課題を解決しよう	17名 (1年生森の探究科)	上村氏（地域工務店）・副島氏（コーディネーター）
37	R8.1/8 -3/19	これまでの振り返りをしよう	17名 (1年生森の探究科)	副島氏（コーディネーター）

### 3-3-33 一本の樹木と友達になろう

#### (1) 活動目標

○自分だけが興味を持ったことを追究する体験を得る

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 4月17日：本校周辺にて樹木を選ぶ
- 4月24日、5月1日：調査
- 5月10日：発表（本校の授業参観日に日程設定）

##### 【実施体制】

- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 授業実施、企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦、臨時教諭 大久保卓也、コーディネーター中井健太、コーディネーター 副島拓歩

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

○本校敷地内にある木の中から一人 1 本の樹木を選び、その木についてリサーチ。写真を撮りながら、樹形や葉・幹・花や実についてまとめ、「友達」になることを目指す。



#### 【生徒の感想】

- 「もっと追究したくなった。うまい人の説明を聞いて、もっと工夫できたと思いました。楽しかった。」
- 「自分で調べてみたい木を自分で探し、発表する過程を楽しく行えたのが良かったです。」
- 「一本の木に愛着が湧いた。季節の変化を追ってみたいと思った。」

#### 【成果と課題】

- 「森のキホン」の授業での樹木の種類や葉の特徴に関する学びを活かすことができ、学校設定科目と横断的に実施することができた。
- 自身の興味・関心に沿って、選んだ題材を探究するという、森の探究科「総合的な探究の時間」のコンセプトを体現する授業を実施することができた。これにより、今後3年間で行う探究活動や授業への解像度が高まり、生徒が主体的に学びを深めていききっかけをつくることができた。
- 実際の成果物を見ると、図鑑やインターネットの引用部分の割合が高くなっていた。テーマへの主体的な調べ方の深め具合が生徒によって差があった。

#### 【次年度への反映】

- 今年度の内容を踏襲しながら、多様な樹種を比較する時間を設け、選んだ木の特徴がよりわかるようにするなど、リサーチの手順を工夫することで、樹木の特徴や生態をより深めた形で調査できるようにする。

### 3-3-34 山門水源の森で気になったことを調査しよう

#### (1) 活動目標

○5月22日に校外学習として琵琶湖の源流の森である奥琵琶湖・山門水源の森のフィールド調査を行った。本時は、その調査結果に基づいて、学校周辺の自然環境について調べ、自分の生活の中の生物や環境について考える機会とする。

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 5月22日：山門水源の森での調査(森のキホン)
- 5月29日、6月5日：調査の振り返り、チーム組成
- 6月12日、6月30日、7月10日：調査、フィールドワーク
- 7月14日：発表

### 【実施体制】

- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 授業実施、企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦、臨時教諭 大久保卓也、コーディネーター 副島拓歩

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 5月22日に校外学習として訪問した奥びわこ・山門水源の森の調査を通して興味を持ったテーマの一つを選び、グループで探究活動に取り組んだ。



#### 【生徒の感想】

- 「調査で木を見ながら、山を歩くのは楽しかった。動物によって実の割り方が異なり、山を歩くときは実の割られ方に注意を払いたい。」
- 「実際に山を歩いてみて、キノコは雨上がりによく生えていることがわかった。キノコによっては木に生えているものもあり、色々なキノコを見れて楽しかった。」
- 「ニホンインガメについて調べたが、季節によって生息場所を変えているのがわかり、移動した場所で生態系に変化があるか調べてみたい。」

#### 【成果と課題】

- 森の探究科での総合的な探究の時間では、探究活動の心構えとして「何度も試す」「楽しむ」ことを目標にしており、ユニークなテーマで、楽しみながら調査を行う様子が見られた。実際の調査では、伊香高校付近でリスが食べたと思われるクルミの痕跡や、実際に葉っぱを食べた感想、付近の神社で日本固有種であるタゴガエルを発見するなど、興味深い調査結果が得られ探究活動の面白さと奥深さを再認識することができた。
- 生徒は初めてグループで協働しながらパワーポイントの資料づくりを行った。また活動はテーマに対して問いを立てながら行ったが、実際の課題探究は調査時間の確保や情報の収集に時間が想定以上にかかり、生徒自身が完全に納得するプレゼンテーションを発表日までに仕上げることができなかった。

#### 【次年度への反映】

- 生徒にとって初めて取り組む事項が多い授業題材では、活動に想定以上の時間を要する。そのため、十分な授業時間の確保や、求める成果物のクオリティを調整するなどの配慮が必要である。
- また、調査や情報の収集の時間の確保については、柔軟なカリキュラム編成を行いながら、課題探究の成果や意義、他教科との授業バランスを検証していく必要がある。

### 3-3-35 能登半島地震の今を調べよう

#### (1) 活動目標

○災害発生から1年半を迎えた能登半島地震の被害や現在の復興の状況について知り、伊香高校の生徒に能登を再び応援してもらうための報告資料をA4で作成する

#### (2) 実施概要

##### 【スケジュール】

- 9月4日：能登半島地震の被害と現在の復興の状況について知る(講義)、グループ編成
- 9月11日、18日：チームに分かれ、報告資料作成
- 9月25日：地域の方々の前での発表の実施

##### 【実施体制】

- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 発表観覧：速水一生様、大林利男様、柴田清行様(木之本ライオンズクラブ)
- 授業実施、企画：教諭 富山昌彦、臨時実習助手 伊藤利恵、臨時教諭 大久保卓也、コーディネーター 副島拓歩

#### (3) 活動実績

##### 【活動内容】

○能登半島地震が起こって今年で1年半が過ぎた。8月27日に木之本ライオンズクラブの支援のもと、希望者を募り石川県輪島市にて災害復興ボランティア活動を実施した。本時はボランティア活動に参加した生徒と不参加の生徒で役割分担を行いながら、当時の被害や現在の復興の状況についてまとめ、伊香高校の生徒に能登を再び応援してもらうための報告資料をA4サイズにまとめた。



##### 【生徒の感想】

- 「災害ボランティアに参加するのは初めてで、正直不安もありました。しかし、実際に現地で活動してみると、想像以上に多くの方が支え合っていることを知りました。自分の行動が少しでも役に立っていると感じられたことが、とても印象に残っています。」
- 「被災された方と直接話す中で、テレビやニュースでは分からない現実を知りました。作業だけでなく、話を聞くことも支援の一つだと学び、人と人とのつながりの大切さを実感しました。」

##### 【成果と課題】

○災害発生直後は関心を浴びる一方、時間がたつと被災地に注目される機会は少なくなる。現地での実習を通し、メディアを通じた間接的な情報理解を当事者意識へと変容させる機会となった。

### 【次年度への反映】

○災害復興ボランティアへの参加は予算の都合上毎年参加できるものではないが、災害復興ボランティアへの参画やレポート作成活動は、次世代を担う高校生にとって社会的当事者意識の醸成と防災知見の深化の面で有意義である。次年度の防災学習の内容を検討しながら、本単元の次の展開を考えていきたい。

## 3-3-36 木作品で自分の身の回りの課題を解決しよう

### (1) 活動目標

○「森のキホン」の授業で、森林の生態や管理、活用について学習を行っている。そのなかで、森林が持つ多くの機能が重要であることを学んだが、その機能を価値として測りにくいという課題も学んだ。本單元では、森林資源活用をテーマに、自分の部屋の課題解決を図る木作品製作に取り組む。製作にあたっては、合板 DL・モジュール木工キット「Kism」を用い、「課題の発見・原因分析・解決策の立案・実行・検証」という一連のプロセスを辿りながら、課題解決の手法を身につけることを目指す。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 10月2日：材料と加工の技術が生活にどう役立っているのかを確認(講義)
- 10月9日、10月23日：設計図の作成
- 10月30日：スチレンボードを用いた試作
- 11月20日：製作(工務店 上村さまによる技術指導)
- 12月9日、12月11日：製作
- 12月23日：発表会の実施・振り返り

#### 【実施体制】

- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 技術指導：上村真也さま(11月20日)
- 授業実施、企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦、臨時教諭 大久保卓也、コーディネーター 副島拓歩

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

○身の回りにある製品は様々な課題やニーズによってデザインされている。本時は、自身の部屋の課題解決を図る木工製作を行うことを目標に、設計図を作成、その設計図をもとに指し金・マルノコ・インパクトドライバーといった木工具を取り扱いながら課題製作を行った。完成した製作物は、クラス内で発表会を行った。



### 【生徒の感想】

- 「採寸が難しく、きちんと測ったつもりでも切断した時に長さが違って、完成品はガタガタになってしまった。しかしやりがいのある作業で、とても楽しくできた。」
- 「自分の作品は部品が多く、材料の量を考えながら寸法を調整することが難しかった。また接合も部品が多いため強度を上げるに苦労した。特に、狭い接地面積のビス打ちが難しかった。」
- 「最初に設計図を描く段階から、設計の工程を考えておかなければならないことが大変だったが、やり切ることができて良かった。」
- 「切断した時に、切り口が斜めになったりと、想定していたものを作ることは難しいことだと改めて感じた。そのなかでも、自分の考えていたことを上手く表現できて良かった。」
- 「作りたいものをしっかり作ることができて良かった。目的通りに使うことができそうなので、大事に使いたい。」
- 「難しかった。そして楽しかった。自分が想定していない使い方も友達に教えてもらって嬉しかった。」

### 【成果と課題】

- 本単元では、木工作品製作を通じた課題解決能力の育成を目標に取組を進めてきた。生徒達の作品は、一つとして同じものはなく、各作品で個性やこだわりを見て取ることができた。実際、最後の時間に行った品評会において、生徒達は熱がこもったプレゼンを行っており、その様子は一見お祭りさながらで、生徒達の作品への強い思い入れを伺うことができた。
- また品評会では、聞き手側の影響も大きく、プレゼン者に対して「こういう使い方ができるのでは」というアドバイスを多々送っていた。このように他者と協働することが多様な視点の獲得やメタ認知の向上につながり、単元終了後の感想から生徒達が課題解決のプロセスを念頭に置き、主体的に取組を進めていた様子が伺えた。
- 一部の生徒が感想としてあげていた通り、全体として設計図の作成、ボンドやビスでの接合に手間取っていた。この2つの過程は、完成品の見通しが必要不可欠であり、各製作工程のイメージができなかったことが、つまずきの原因であったと考えられる。
- また、生徒の製作進度が異なることで全体の進度調整を難しくさせていたことも課題である。授業時間数の調整やレーザー加工機以外の製作物のオプションを増やすことで、対応を図りたい。

### 【次年度への反映】

- 結果として本単元は、スライド作成以外の探究活動の十分な成果と成り得た。次年度に実施する「森の恵み」では今回学んだ知識や技術を活かし、より大きく複雑な構造の作品づくりを行っていきたい

## 3-3-37 これまでの振り返りをしよう

### (1) 活動目標

- 3年生「森の未来創造」での最終の研究活動に繋げるべく、自身が決定したテーマに対して探究活動を通して、探究活動を実施する上での一連のプロセスを知り、また納得するまで問い続ける姿勢を身につける。

### (2) 実施概要

#### 【スケジュール】

- 1月8日：テーマ設定・問いのアイデア出し
- 1月15、22、29日：調査
- 2月12日：発表準備
- 3月19日：発表

### 【実施体制】

- 対象生徒：1年生 森の探究科 17名
- 授業実施、企画：臨時実習助手 伊藤利恵、教諭 富山昌彦、臨時教諭 大久保卓也、コーディネーター 副島拓歩

### (3) 活動実績

#### 【活動内容】

- 1年間 森のキホンの授業をとおして興味を持ったテーマを一つ選び、個人で探究活動に取り組んだ。



#### 【生徒の感想】

- 「河川にはどれくらいの範囲にどれくらい生き物がいるのかもっと調べたいと思った。」
- 「初めから気になっていたことを調べ進められたため、楽しんで活動することができた。」
- 「自分の好きなことを1年間で学習した植生に関連付けて調べることができた。」

#### 【成果と課題】

- 一般的な普通科では難しく時間がかかるとされる、総合的な探究の時間における生徒のテーマ設定について、本校ではこれまで1年間、「森のキホン」において五感を通し、理論と実践を織り交ぜた多様な学習を行ってきた。その結果、テーマ設定に要する時間は1時間もかからず、円滑に探究活動を開始することができた。
- 教員の助言を必要とせず、自分の興味から小さな疑問から問いを立て、深めていくことを反復することができる生徒が増えた。
- 初めての個人での探究活動であったため、活動の進め方のイメージを持てている生徒はスムーズに取り組めた一方で、問いの切り口を見出せない生徒は、自身の活動をまとめることに大きく時間を要していた。

#### 【次年度への反映】

- 毎時ごとに活動計画を作成する時間を最初に設け、短期間の中でも効率的に活動が進められるようにする。
- 活動の進捗を共有する中間報告会を作り、他者の取り組みに刺激を受け、自身の活動に活かす機会を作る。